

---

# 東方探求記

アントニナス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方探求記

### 【Nコード】

N5164W

### 【作者名】

アントニナス

### 【あらすじ】

イ○ジンプ○イカーそつくりの能力を得た平凡高校生が両親の秘密を探るべく、幻想郷で暮らす事になるが・・・？

注意：この小説には多少オリジナル設定、オリキャラ成分が含まれております

## プロローグ

さてさて今回はとある世界の物語を語っていきましょう・・・

そこは日本と親密な世界

通常は行き来出来ない隠されし世界

そこに、とある一人の少年が入り込んだ

少年の行きついたその世界は、まるでタイムスリップしたかのような古風な場所だったそう・・・

少年はそこでの生活や戦闘技術を学び、何一つ不自由なく過ごしていた

そして何年もの歳月が過ぎたある日・・・

突如、世界の均衡が崩れかけようとしていた

「人間」という存在と「妖怪」という存在の間に軋みが生じたのだ  
った

だが、少年の持つ「不思議な力」によってそれはやがて阻止された  
が、その後彼の行方を知るものは誰一人いない・・・

やがて皆の頭からは彼との思い出も消え去られたのだった

そう、彼の名は・・・

## プロローグ（後書き）

続けるか飽きるかは俺次第！（殴）

## 第1章 はじまりはじまり

チュンチュン

特にこれといった事のない朝が訪れた

「う、うゝん」

俺はベッドから起き上がり、とりま伸びを一発かましてみる  
カーテンの隙間から入り込んでくる日光がやけに眩しい、うう・  
なんで朝ってこんな鬱なんだろうな

目覚まし時計を見ると9時を回っていた

今は夏休み真っ只中なので「遅刻だー！！」なんて事態になる事はない

かと言ってこの時間に起きたのには何か理由があるわけでもない

部屋着に着替え、1階のリビングへと降りていく

両親は仕事で出かけているので完全にアローンである

テーブルの上に朝飯と昼飯が置いてあり、俺は朝飯のおにぎりを頬張った

俺の名は岡野正也<sup>おかのまさや</sup>、現在高校2年生のごく平凡な男子である

中学時代はバスケットボール部に所属しており、中2で何とかレギュラー入りを果たしたが特に目立った活躍はしなかった 高校に入ってから部活をしていないので体育の後なんかはよく筋肉痛になる

うちの親は何故か俺に対してそっけない 小学生の時に足をすりむいても「自分で何とかしなさい」と言われたり、熱が出て家で寝たきりになっても看病すらしてくれない

だからこれまでありとあらゆる事は自力でやってきた　かといって別に自慢出来る程の物でもない  
前々から何故？とは思っていたが、気にしない事にした　そんな事深く考えたって仕方がない

ところで今日、こんな夢を見た

真っ白い空間の中に俺だけが佇んでおり、空間の外から何者かがこんな事を聞いてきたのだ

“もし能力の飛び交う戦乱の地に行ったら、お前はどんな力が欲しい？”と

俺はその問いに対し

「うゝんそうだな・・・別に俺戦いは言うほど好きではないし、かのライトノベルの主人公が持つてる‘異能の力を打ち消す右手’のような物でもあれば十分かな」と答えた

かのライトノベルというのは最近友人から借りて読ませてもらっている物の事だ

イ○ジンプレ○カーだっけ？そんな感じの名前の右手を持つ高校生が能力者と戦うって感じのストーリーだった気がする

すると・・・

“ふむ・・・ならばそれに酷似する力、お前に貸し与えよう”  
とか言うや否や突然ピッカアアアンと俺の体が光って・・・そこ

で目が覚めたんだっけ

・・・てか俺は夢の話なのにそこまで気にするんだろうか

それはさておき、サイダーが飲みたくなつたので近くのスーパーへと買いにマイチャリを走らせた  
うーん、やはりこの辺は緑が少ない

スーパーに入り、買い物かごを腕にぶらさげて目的のブツを入れることにした

ええと三ツ〇サイダー、そんで暑いからスイカバー、あとついでに  
苺大福を2個と・・・

わしゃ苺大福好きなんだよ、何も言わないでくれ

レジ袋が有料になったので裸で持ち帰ることとなった サイダーと  
アイスはカゴに、苺大福は左右のポケットに入れた

「いやあゝ、しっかし熱いな」

信号待ちをしている時、茹だる様な暑さからついそんな事を言ってしまう、なんせ今日の日中の気温は36 だ

「ん？」

ふと、横断歩道の向こう側で信号待ちをしている一人の女性に焦点を合わせた

いあ、別にやましい事を考えたとかじゃなく・・・

恰好が異様だったのだ

金髪で背は高め、おばあちゃんが被るような(?)丸いキャップ、柄の入ったゴシッククロリータな服を身につけている・・・さらに、よく分からない禍々しいオーラまでも纏っていた

「な・・・なんだあの人」

おおお落ち着け俺、ただのコスプレイヤーなのかもしれん、一体何をそんなにビビってたんだ

するとその女性もこちらの視線に気づいたのか、俺の方を向いた

その時

ギィイーン！という効果音が俺の脳内で再生されたような気がした

(か・・・体が動かない!??)

金縛りにでもあったのか？動こうと思っても震えるのみでびくともしない

その時、信号が青になった



その女性はゆっくりとこちらに向かって歩いてくる

（ま・・・まずい）

俺の第六感はとっくに鳴り響いていた

（動け・・・動けよ！）

今すぐにも逃げ出したい一心だが、いかんせん金縛りは解かれない  
女性との距離はおよそ15メートル、14、13、12とカウント  
ダウンのように狭まっていく

（頼む、動いてくれ！）

あと10メートル

（動け・・・動け動け動け！）

あと8メートル

（ち・・・つくしよおおおおお！！）

その時、体が一瞬解き放たれたような感覚がした  
そう思った時には俺は反対方向へと全力でチャリを走らせていたのだ

（はあ・・・何とか動けるようになった）

思わず安堵の息がもれた

それからしばらくして、路地裏に入った  
あの女性はもう追ってきていない

一旦自転車を片隅に置き、壁にもたれかかって座り込む

「それにしても、あの女性は一体何者だったんだ？」

新手のファッションか？にしてもあんな格好初めてみたぞ

「人様を見るなり逃げ出すなんて失礼な人間ねえ」

突如、右の方から声がかかった

安心していたのもつかの間、一気に緊張が走る　だが、もう金縛り  
にはならない

恐る恐る声のした方をふり返ってみると・・・そこには先ほどのゴ  
スロリ衣装の女性が立っていた

「い、いつの間に！？」

ガバッ！と立ちあがって言い放つ

「どこに逃げても無駄、とだけ言っておくわ」

さらに女性はこんな事を言い出した

「貴方のご両親の秘密について知りたくはないかしら？」

「秘密？」

両親の秘密だと？俺の知らない秘密なんて物があつたのか？てかそ  
もそもなんであんたが他所様の家庭事情知ってんだ？

「あんた一体誰なんだ！？」

すると女性はこう答える

「八雲紫、幻想郷からこちら側にやってきた妖怪よ」  
「げんそーきょー？ようかい？」

聞きなれないワードに一瞬戸惑う

「そんで、その両親の秘密ってのはなんなんだ？」

少し落ち着きを取り戻し、とりあえず気になった事を聞いてみる

「幻想郷に行けばその内分かるわ」  
あっち

「あっち？そのげんそーきょーとやらにか？」

そもそもそんな所実在するのかよ・・・聞いたことも見たことも行  
ったこともないわ

「f m f m、両親の秘密とやらは興味あるな、んじゃあそのげんそ  
(ryとやらに連れて行ってもらおうか・・・最も、そんな世界が  
存在すればの話だな」

いきなりこんな訳の分からない事ばかり話し出す人の言う事なんて  
誰が信じるか

「そうね・・・ならばあっちに行っても困らないかどうか、私がここ  
でテストをしてあげるわ　ここじゃ狭いから広い所に出なさい」

「？」

テストって何だ？

訳が分からぬままに近くの（誰もいない）公園へと連れていかれた

「それじゃあ始めるわよ」

「一体何を？」

始めるわよ、て言われても何をやるのかさっぱり分からない

「まあ分かるわ」

そう言つて懷から扇子を取り出し、軽く横に薙いだ

すると・・・

「な・・・何だありゃ？」

何と、そこから隙間らしき物が形成されたのだ  
中には無数の目、両端はリボンで結ばれている

その時

ビュン！と何かが隙間から俺めがけて飛んできたのだ

「うおっ！？」

俺はとつさに右に飛んでかわす  
ボン！という音をたててそれはついさっきまで自分のいた背後に着弾した

「た、弾！？」

といつても銃に装填するような物ではなく、スーパーボールぐらいの大きさの光る弾だった

「まだまだ終わらないわよ」

と言つて再び扇子を薙ぐ

すると今度は背後に隙間が現れた

「うおお！？？」

またしても弾が飛んでくる、しかも今度は4〜5発ぐらいそれを何とかぎりぎりでかわす

「テストつてまさか、戦えつてことかよ！？」

この人、八雲さんの言っていた事は嘘じゃなかったのかもしれない、現に今こうして能力らしき物を見せつけられているのだ

ん？能力？

その時ピンと来たのはただの偶然だった

（そついや夢で何者かがそれっぽい事を言っていた気が・・・）

別にその声の主がこの八雲さんの物だったとかではなく・・・

なんか力を貸し与えるとか言ってなかったか？

もしそれが本当なら俺の右手には例のあの力が宿ってるって事だろうか？

（いや・・・）

所詮夢の話だ、鵜呑みにしてどうすんだ俺

だがこのままでは披露する一方だ、何か打開策を編み出さなければ

その時、目の前から弾が飛んできた

（まずい、やられ・・・る？）

そう思った時、何故か無意識に右手を前に突き出していた

その動作に何の意味があつたのだろうか・・・

俺はギュツと目を瞑っていた

何が起こつてるのかは分からない

ただ記憶にあるのは弾が飛んできたという事ぐらいだ

だが・・・

（あれ？何も感じない？）

音はおるか、痛みすらなかった

恐る恐る目を開けてみると・・・

そこに隙間はあつた

だが弾は飛んでこない

そして自分の突き出した手を見ると・・・

プシューと、何やら煙みたいなのがたっており、傷1つ無かつた

（まさか・・・打ち消した？）

何と、そのイ○ジンプレ○カーとやらの力は本当に宿っていたのか  
！？

あの夢のお告げは本当だったって事かよ！？

そして八雲さんの方を見ると

「さあ続けましょう」

と、満足げな顔で再び扇子を薙ぐ

今度は真上に隙間が現れ、弾が飛んできた

俺は再び右手を突き出す

パン！という効果音とともにその弾は打ち消される

（消せる！）

今度は背後から飛んでくる　が、またしても右手を振りかざしてそれを打ち消す

（弾は全てこの右手でどうにかできる！）

今度は4つの隙間が俺を囲むように現れた

とっさに俺はそのうちの1つの隙間の端についているリボンに触れた

パキン！という音と共にそれは消滅した

そして前回り受け身の要領でそこから脱出する

するとすぐそこには八雲さんの姿が

両者との間はおよそ4メートル

全力で駆ければ2秒もかからない距離だった

「おおおー！」

俺は（その場の勢いで）とどめをさすべく、彼女に突っ込んでいった

と、そこで

「合格ね」

という声がした

そう思った時には俺の上半身は突如目の前に現れた隙間に入り込んでいた

「ななっ!？」

そしてそのままバランスを崩し、俺は隙間の中へとダイブしていった……

「ようこそ幻想郷へ」

その言葉を最後に聞き、俺の意識は途絶えた

TO BE CONTINUED



## 第1章 はじまりはじまり（後書き）

ついに始まりました  
なんかもう不安しかない

## 第2章 熊より怖くなくて熊より恐ろしい者、なぐんだ？

そしてここはまたしても例の夢で見た白い空間

“どうだ？初めての戦闘は”

どこからともなくそんな事を問われる

「まあ確かに役にはたつたが……」  
すうつと深呼吸し……

「そのまんまかよ!??」  
と精一杯の声をあげて言い放つ

“どうした？何か不満でもあるのか？”

「不満も何も、あれじゃあ元祖イ○ジンブレ○カーと何ら変わらないじゃないか！結局パクリか!??もしこれが漫画か何かの世界だったらどうしてくれるんだ!??」

俺としてはオリジナリティーを求めていただけあつて正直残念だった

“安心しろ、その辺は私も考慮してある”  
一体何を考慮してるってんだ

“まず、お前のそれはイ○ジンブレ○カーとは異なり、幸運まで打ち消す事はない”

「f m f m」

“さらに根本的な原理も違う それにはまだまだ隠されし力があるのだ 最も異能の力を打ち消すという概念は変わらないがな”

うん成程、全く分からない それに隠されし力があるっていうのもイ○ジン（ryにもあるんじゃないかなかつたっけ？

“ なあに、今後のお前の頑張り次第で決定的な違いっていうのを見せつけてやるさ だからとりあえずしばらくはそれで我慢しろって事だ ”

「 ったく、何が我慢だよ・・・ 」

まあいい、身を守るだけのスペックがあるだけでも幸いだ  
それに八雲さんの言っていた秘密についても知りたいいな・・・

「 んじゃあ行ってくるか、秘密を探りに、その幻想郷とやらに！ 」  
どうせ親も心配しないだろうし

“ フツ、気をつけるのだぞ ”  
そこで俺は眩い光に包まれた

「 あ、サイダーとアイス、自転車力ゴに入れっぱなしだった 」  
目が覚める間際にどうでもいい事考えるよなあ俺って・・・

アホーアホー

「 う、うゝん・・・ 」

目が覚めてとりま伸びをかます ケータイの時計は6時をさしていた  
随分寝てたんだなあ俺 て、今はそんな事どうでもいいか

ようやく意識がはつきりとし、辺りを見渡してみる

「 .....ここ、どこだよ？ 」

辺り一面木、木、木、そんなもって今俺が座り込んでいる場所は砂  
利道

言わずとも森の中である

まずいな、もうそろそろ日も暮れるし、どこか安全な所に行かなければ、熊が出そうだ

（さあて、座り込んでても仕方ないし、そろそろ歩き始めるとしますか）

森を歩き始めて10分、未だどこに向かっているのかも分からず、嫌気がさしてきた

「そっぴや腹減ったなあ・・・」

この辺に木の実でもないかね　　という感じで辺りを見渡しつつフラフラしていると・・・

トンと、何かにぶつかった

（な、何？）

そしてぶつかった方を見える、するとそこには

「あ、人間だ」

そう言ったのは見た目小学生ぐらいの金髪の女の子だった  
背は130センチぐらいで低く、頭の端には赤いリボン、黒い洋服を身にまとっていた

「なんだ子供か・・・」

ホッと安堵の息を一つつく　とりあえず名前でも聞いてみようか

「君、名前は？」

「ルーミア」

ん？そういあ人に名前を聞くときは自分から名乗るのが礼儀じゃなかったつけ？まあいいか、八雲さんの時も名乗らなかったし

ところでこのルーミアちゃん、こんな森の中で何をやってたのだろうか まあ大体予想はつくが・

「親御さんとはどこではぐれちゃったの？」

どうせ迷子になったんだろう てかそもそもこの子に親御さんという言葉の意味が理解できるのだろうか？

まあいい、なにしろばったり出会ったのが普通の子供でよかったよ 狼だったら間違いなく食われてたね

「お兄さんおいしそうだね」

前言撤回、全然普通じゃなかった

初対面の人に対しておいしそうだねとは何事か

「食べてもいい？」

さらに危ない事言ってきたよこの子 そういうのはもっと大きくなつてだな・・・って痛っ！？

「ねー食べさせてよ」

と言つて俺の左腕を掴んできた

なんなのこの子握力いくつだよ！？

見るとあーんと口を開けて俺の腕をそこへ引つ張ろうとしている

まさか、文字どおりの意味で「食べる」のか！？

心霊ドラマなんかにある、‘子供の霊がすごい力で海やら川やらに引つ張っていくシーン’を思い出した

俺は今それに似た物をリアルに体験しているみたいだ

てかこのルーミアちゃん、一体何者なんだ？

そもそもこんな時間帯にちっちゃい子供が森の中に一人でいるという事事態不自然なんじゃないか？

その時、八雲さんと初めて会った時に言っていた言葉が頭を過る

“八雲紫、幻想郷からこちら側にやって来た妖怪よ”

八雲紫・・・幻想郷・・・こちら側・・・妖怪・・・ん？

妖怪？はっ！

（まさかこの子、妖怪なのか！？）

俺は妖怪帝国にやってきたって事なのか？

ふと我に返ると、腕は口の10センチ手前まで引っ張られていた

（まずい！）

俺はもう片方の手で引っ張っている手を掴む

「放せええ！」

そしておもいつきりその腕を上にも引っ張った

すると案外あっさりと引き離され、ルーミアちゃんの体が一瞬グラついた

見るとルーミアちゃんは心底驚いた様な顔をしていた

「へー、お兄さん力強いんだね」

力強いだと？待て待て、それは俺の台詞だ

「てか俺の腕をいとも簡単に引つ張った奴がいうなよ！？あれでも結構必死だったんだからな！？」

「そうじゃないよ、私より強い力で私の腕を引き離してたじゃん」  
この子より強い力で？俺ってそんなに腕力あったのか？

（ん？まさかこの右手・・・）

俺は例の力が宿っている右手を見る

そうか、この右手、妖怪の力なる物も一時的に打ち消せるのか！

もし掴まれたのが右腕だったらと考えると今になってもゾツとする

というか何より・・・

「つーか、いきなり人の腕に掴みかかって食おうとするな！言っとくが俺なんか食ったって何の栄養にもならないからな！？」

「森の中で彷徨っている人間を見たら食べていいって誰かが言ってたもん」

「誰なんだよそれは！？いいか？人を食べるってのはな、俺達の住む世界ではとてもじゃないが考えられない事なんだぞ！？そんな事したら警察につかまるんだぞ！？」

「そーなのかー」

駄目だ、必死の説得もやる気のない返事一つで流された　これ以上何を言っても無駄だろう

こうなったら・・・

「アディオス！」

「あ、待ってよ！」

振り返って全力ダッシュ　無論待つ訳がない

「くそっ！何なんだよあの子！」

只今絶賛逃走中、流石に足の速さならあの子に負けないだろうと思  
っていたが・・・

「空飛ぶとか何それ！？新手のドラオンボール！？？」

しかも何か色とりどりの弾なんて物まで打ってきてるし・・・もう  
やだこの世界

「わはー、待て待てー」

本人は鬼ごっここのつもりだろうが俺からすれば「鬼」そのものだった

いくら右手で打ち消せるといえど、いちいち消してはキリがな  
い それ以前に相手が飛んでるんだからまず勝ち目はない

ふと、俺のズボンが異様に揺れているのに気がついた

気が動転して今まで忘れていたが、ポケットの中には尊大福が2個  
入っていたのだ

（よし、こうなったら）

ズザザザー と動かしていた足に急ブレーキをかけ、ルーミアちゃん  
の方に向き直る

「ちよっとストップ！」

前に右手をかざし、制止の合図を送る



するとルーミアちゃんは追いかけるのをやめ、地面に降り立った

「君、お腹が減ってるんだよね？」

「うん、だからお兄さんを食べるー」

「待て早まるな！ここに俺よりももっとおいしい物があるから！」  
そう言つて俺はポケットから苺大福を1個取り出し、被さっているビニールをはがす

「ほれ、苺大福だ！絶対うまいから！ほら口開けてあーん！」

「あーん」

かなり必死こいてそれを差し出し、開いた口の中に入れる  
頬張っている姿を見て和んだのはきつと気のせいさ

「お・・おいしいか？」

「うん、おいひー」

だろうな、少なくとも俺の腕なんかよりは 少なくとも俺の腕なんかよりは（大事なことなので二回言いました）

さてと・・・

「そ、それじゃあ俺はちよつと用事があるからさ、もう帰らなきゃ  
いかなのだ」

「えー、もつともつとー」

あと1個残ってるがこれは俺の分だ 何か食べないと本格的に死ぬ

「ま、また今度食べさせてあげるからさ！それじゃあまたな！」

「うん、ばいばーい」

意外とあっさり引いてくれたな

とりあえず分かったことは常に何かしら食べ物を持ち歩けて事だ

さもなくば俺自身が食べ物にされてしまっ

しばらく歩くこと15分、もう1個の苺大福を食べたのでちょっと元氣が出た

だがしかし未だ森から抜け出す事はない

「うーん困ったなあ」

この辺に人間の住める所はないのだろうか 願わくば疲れたのでふかふかのおふとんに寝っ転がりたい

「こんな所をうろついて何してるんだ？」

するとその時、背後から何者かが声をかけてきた

また妖怪か！？と思って振り返ってみると・・・

「そんなに驚く事ないだろ」

そこには金髪で白黒の魔女っぽい衣装を身につけた歳の近そうな女の子が立っていた 髪の毛の左側は三つ綱されており、片手には箒を持っている

「まーたへんちくりんな妖怪か？」

おいおい、もう食われるのは勘弁だぞ？

「違う違う、私は普通の人間だぜ」

なんかこの世界来てようやく人間に会えた気がする 妖怪しかおらんとか俺が泣くぞ

「ええと、どちら様？」

「博麗霊夢、巫女だぜ」

「どこの世界にそんなオカルトチックな格好をした巫女さんがいるか！？どう見たって魔女じゃねえか！？」  
さらっと嘔吐きおるこの人

「ああ、これはただのコスプレだ」

「嘘つけ！」

「つたく、この世界にもコスプレイヤーがいるというのが　それはそれで面白そうだが」

「ところでこんな所で何してたんだ？早く帰らないと妖怪に食われるぜ」

「うん、現にさっき食われかけた」

「おかげで身も心もヘトヘトよお・・・」

「どつかに人住んでるとこないかな？なんて」とりあえずこの辺に何かないか聞いてみる

「ああ、それならこの近くに人里がある」  
「人里だと！？助かった！！」

「mj！？そんじゃあ案内してくれ！」

「ああ、分かった」

「そう言って霊夢は持っていた箒にまたぎ、後ろに指をさしながら俺の方を見る」

「ま、まさか・・・」

「連れていくぜ」

その後、しばらく心臓に悪い空の旅が続いた  
まあいい、どちらにしろ俺は助かったんだ 何も言うことはない

TO BE CONTINUED

## 第2章 熊より怖くなくて熊より恐ろしい者、なぐんだ？（後書き）

よし、やっと物語が進展しそうです  
結構大変だね

## 行間 1

ここはとある産婦人科

そこで、ある夫婦の間に一人の男の子が生まれました

「まあ、この子ったらあなたにそっくりね」

妻は病室のベッドの上に座り、その子を抱きかかえながら夫に言う

「何言ってるんだ、この目なんかはお前にそっくりじゃないか」

夫も負けじと妻と似通っている部分と言う

「しかし育児休暇が、しばらく仕事に行かなくてもいいのはうれし  
いんだが、色々我慢する事が待ってるだろうな」

「いい父親が何言ってるの」

そうだな と、夫は頭を抱えて照れくさそうに言う

「そつえば名前は決まったのか？」

「ええ、前々から決めてあった名前があるの」

そして妻は命名した名を夫に告げる

「・・・よ」

そして忙しい育児生活が幕を開けた・・・

### 第3章 住み家を確保せよ

「まさか、こんな所があつたなんてな」

霊夢の箒に乗せられて降り立った場所は、まるで江戸時代の城下町を連想させるような古風な人里だった

「ところで、俺はこれからどうすれば？」

承諾も無しに人様の家に侵入して「ちよりーっす、泊っていきますね」という訳にもいかないし

「そこに慧音の家がある、この人里全体を取り締まっている半人半獣だ そいつにお願いすれば家の一つや二つ、貸し与えてくれるんじゃないか？」

半人半獣って何ぞ？と思ったが今は気にしないでおう 要は住み家を譲ってもらえという事か

「ああ分かった」

「んじゃ私はもう行くからな」

「ああ、ありがとな」

別れの挨拶を交わし、再び箒に跨ってどこかに飛んでいく霊夢

「正直、緊張するなあ・・・」

これから人里のボスとご対面する訳である まるで面接みたいだ

トントン

扉の前で軽くノックを入れる

「ごめんださーい」



すると扉の向こうから人影が向かって来て、目の前まで迫ってきたところでガラスと開かれる

「どちら様かな？」

出迎えてくれたのは銀色で長い髪の毛の女性だった

どうも霊夢の言ってた半獣って言葉がひっかかる どう見たって普通の人だ

「あ、俺岡野正也っていいいます 慧音さんのお宅でよろしかったでしょう？」

「ああそうだが・・・見慣れない顔だな」

そう言って慧音さんは俺の顔を凝視する やはり幻想郷では珍しい顔なのだろうか

「ええと、色々あつて外の世界からやってきた者です」

「なるほど、渡来人か」

渡来人って何か俺外国人みたいだな 最もここが日本なのかどうかは知らないが

「突然なのですが、よろしければ空き家を1軒譲っていただけませんか？」

「空き家か・・・」

そう言って彼女はしばらく考え込み、突如思い出したという様な顔になる

「そういえばこのあたりに何年も使われていない家が1軒ある 少々埃っぽいがそこでも構わないか？」

「あ、はい！全然大丈夫です」

何と、都合良く住める場所があったとは 我ながらついてるぜ

「して、その家というのはどこに？」

「ここから右に真っ直ぐ行った所に3軒並んだ家がある　空き家は  
その内の真ん中だ」

「ありがとうございます」

「それと今日はもう遅い、今日は私の家でゆっくり休んでいきなさい」

その時俺はここにきて初めて感動した

ああ、こんな親切な人ってどこの世界にもいるんだなあと　皆も是非とも見習ってほしい（皆って誰だよ）  
それはともかく・・・

「あの、一つ気になったんですが」

「何かな？」

「そこには以前誰が住んでたんですか？」

すると慧音さんは何やら急に難しい顔つきになり

「さあ・・・確かに誰か住んでいた事は覚えているんだが、名前も顔も思い出せない　そもそもいつそこに住み始めたのかすらもちよつとな」

「は・・・はあ」

そりゃそうか、誰だって忘れる時はある　そんな昔の事いちいち覚えてないよね　かと言って追求するのは言語道断だ　今は気にしないでおこう

「あ、それじゃあ今日と明日からと色々お世話になります」

「ああ、よろしくな」

そして軽く会釈した後、慧音さん宅へ上がらせていただき、そこで  
一晚を過ごす事となった

クックドゥードゥルドゥー

別に気持ちいいとは思えない朝が訪れた　ぶっちゃけ俺は朝が嫌いなんだよ

昨日は夕飯までいただき、さらには布団、ついでに着替えまで用意してくださった　この恩はいつか絶対返さねば

そして現在、朝飯の銀シャリをおよばれしつつ、色々話していた

「そういえば八雲さんて一体何者なんですか？妖怪っていう事は分かったんですが・・・」

味が物足りなかったので胡麻塩を振らせていた

「ああ、彼女はこの世界でもかなり腕の立つ妖怪だ　だが、彼女の考えている事を読み取れる者はそうそういない」

「確かに俺も最初会った時、意図が全く読めませんでした」  
お味噌汁をズズッと啜る

要は何を考えてんのか全く分からない人って事が

「ところで正也、この人里にはどうやって来たんだ？」

慧音さんがお茶を啜りながら問う

「ええと、白黒の魔女っぽい格好をした霊夢っていう人に連れてきてもらいました」

すると彼女はため息を一つつきこう言った

「そいつは霊夢ではない、魔理沙だ、霧雨魔理沙」

「・・・え？」

でも確か博麗霊夢って名乗ってた気が・・・

「でも名前を聞いた時、そんな名前は一言も・・・」

「たぶんお前が名乗らなかつたからじゃないか？」

何と、人に名前を聞く時は（r y）という礼儀はこの世界にも存在したのか！

だからと言って何も偽名を言わなくてもいいじゃないか・・・

「はい・・・これからは自分から名乗るようにします」

果たして俺はその誓いを守り続ける事が出来るのか・・・

「お世話になりました」

「場所は分かるな」

「あ、はい」

慧音さん宅を後にし、例の空き家とやらに向かって歩きだす

辺りを見渡すと、団子屋やら米屋やらでかいお屋敷やらが立ち並んでおり、まるで歴史の教科書を見てるかのようだ

「らっしやいらっしやゝい、家の米は最高品質だよゝ！」

威勢のいいおっちゃんの声がする

「おや坊主、見ない顔だが最近ここに移り住んできたのかい？」  
やはり誰が見ても俺は見慣れない顔らしい

「あ、俺今日からこの人里に住まわせていただく岡野正也つていいます」

「そうかそうか、一人暮らしったあ偉いね」

「いえ、それほどでも・・・」

「またよかつたら家の米買いに来てくれよ!」

軽く会釈して米屋を後にする　やはり日本人はお米食べなきゃね

「ん？あれかな？」

曲がり角にそびえ立つ3軒並んだ家、その真ん中には少し大きめの家があった

「お邪魔しますよ、っと」

ガラガラツと家の扉を開ける　すると

「うわっ、ゲホッゲホッ」

お出迎えしてくれたのは家中に充満した埃や湿気だった　恐らく何年も手入れされてなかったんだろう

まず目についたのが8畳間の真ん中にあるちゃぶ台、壁際にはタンスやら箒やらが置かれていた

どうやらここは居間として使われていたようだ

奥には自炊の間・・・所謂台所があり、さらに居間の左側は便所とお風呂の間に繋がっていた

てかこの世界も一応科学は進歩してたんだな

だが何から何まで汚かったので、大掃除に取り掛かる事となる

「まあ結構住みやすい所みたいだしいいんじゃないか？」  
まずはこの埃をどうにかしないとな・・・

## 2時間後

「あ、点検御苦労さまでーす」

無事に埃は全て掃き出し、台所云々もピカピカになって一息ついたところで、慧音さんが手配してくれたらしい河童さんが機材の点検にやってきたのだ

「特に異常はなし、今日から普通に使っていていいよー」

河童の技術力ってすごいね きゅうりばかり食って生活しているイメージしかなかったが・・・

「また何かあったら妖怪の山の川の端まで来てねー そこに住んでるから」

妖怪の山か、物騒な名前だな また今度気が向いたら行ってみよう

「ありがとうございました」

河童さんともお別れし、再び一人になる

家は確保できたものの、これからどう生きてくかな・・・

「何か職でも探すか」

やはり飯食う為には働いて稼がないと  
とは言ってもこの世界って仕事人とか雇ってるのか？

「私が職を与えてあげるわ」

おお、そいつはありがたい……って

「ぬあああ！？ややや八雲さんいつからそこに！！？」  
振り返るとどこから入ってきたのか、いつの間にやら例の何を考  
えているのか分からない人がお邪魔していたのだ

「さつきから、それと下の名前で構わないわ」

ここの世界の人達ってフレンドリーだな それより

「ところで紫さん、その職っていうのは？」

まずはそれから聞いてみる

「依頼屋よ」

「依頼屋あ？」

何なんだそれ？聞きなれない職業だな

「要するに人の頼み事を任されて自分がそれをやるっていう事よ」  
成程、例えば忙しくて手がつけられないから代わりにやっというてく  
れとか、草むしりを手伝ってくれとか、あらゆる人の要望を聞いて  
可能な限りそれを行うってな感じの仕事か

「でもそんなのどこでやるんですか？」

無論、それには事務所を構えなければならぬ

「貴方の家ですればいいじゃない」

「ええ！？」

何と、この家を直接事務所にするだつて！？

「でもそんなの勝手にやっていいんですか？」

「それは私が手を回しておくから安心なさい」

貴方だから安心できないんです

「して、その仕事の流れっていうのは？」

問題はそれである やり方が分からなければ話にならない

「とりあえず表に出なさい」

「？」

言われるがままに俺は家の外に出る

ここは俺の家の前の左側

「1歩下がってなさい」

そう言つと扇子を薙ぎ、頭上に例の隙間を形成する  
するとその隙間の中から・・・

ドスン！

何やら掲示板らしき物が降ってきて俺と紫さんの目の前の地面に両  
足が突き刺さつた

「これは一体？」

「依頼内容を貼っておく為の掲示板よ」

成程、依頼内容はあらかじめ紙か何かに書いておいてここに貼りに  
くるのか

「そして貴方はその内容を読んで直接依頼主の元に行くのよ」



「なるほど、まずは顔を出さなければ分からないしな・・・」

「依頼を達成したら依頼主に報告して、報酬をもらうといった流れね」

f m f m、大体理解した

「書き込む内容は依頼主のハンドルネーム、危険度、依頼内容、報酬の内容といった感じね」

こんな所でも、人に名前を（r y）的な礼儀を貫き通すとは・・・

「それとこの掲示板に貼る依頼はあくまで急ぎではない物、急ぎの依頼は直接貴方に頼みに行くといった所かしら」

まあ極端な事言つと、火事を何とかしてほしい、なんて依頼はちんたら紙に書いている場合じゃないからな

「ここまでで何か質問はあるかしら？」

「ええと、誰かと協力して依頼を遂行するというのはありなんですか？」

無論中には一人じゃ厳しい依頼もあるだろう

「それは別に構わないわ、ただその場合、報酬は山分けしなさい」  
そら手伝わせるだけ手伝わせて何も無いなんて図々しいもんね

「まあ大体分かりました」

「それじゃあ依頼主に失礼のないように頑張るのよ」

そう言つてどこからともなく現れた隙間に入り込み、閉ざされた

しかし依頼屋か、人来るのかねえ・・・      あの人の事だから宣伝してくれていると思うが

まあいい、金を仕入れる手段を獲得したんだ、今はこれで食つていこう

こうして俺のニューライフは幕を開けたのだった  
TO BE CONTINUED

### 第3章 住み家を確保せよ（後書き）

今回は少し中途半端で終わってしまった気が・・・  
小説って難しいね

## 第4章 配達、承りました

依頼屋の営業を開始して5分後・・・

ドンドン

何者かが扉をノックする音が聞こえたので「はい」と返事し、扉を開ける  
するとそこには

「おう、坊主！ここ依頼屋でよかつたんだよな？」  
酒屋の者と思しき生きのいいおっちゃんが立っていた  
てか紫さんの伝達力って音速！？もう客が来たよ

「あ、はい！岡野正也です。どういうご用件で？」  
こつという接客はあまり慣れていないのさ

「ちよつくらこの酒を博麗神社まで届けてくんねえか？」  
見ると傍らには荷車があり、酒瓶が4本積まれていた

ん？ちよつと待て、博麗だと？  
まさか、博麗霊夢とやらは実在していたのか！

「ええと、その神社というのはどこに？」  
「これを頼りに探してくれ」

そう言つて差し出されたのはメモ用紙に書かれた簡略地図だった  
・・・これでどうやって行けと？

「あの、これじゃちよつと分からないんですが・・・」

「男なんだから後は自分を頼りに探しな」

「は、はあ・・・」

このオッサンいつか妖怪の餌にしてやる 最も食ったところで吐く  
かもしれんが

「えと、報酬はおいくらですか？」

「これで勘弁してくれ」

そう言って5本の指をたてる

「500円ですか？」

「とんでもない、5円だ」

5円か、ひよっとするとこの世界では1円＝100円ぐらいに相当  
するのだろうか

「じ、じゃあとりあえず承りました」

「おう！しっかり頼むよ！」

こうして俺の初仕事が始まった

ガラガラガラ

音をたたせながら荷車を引っ張って歩くこと20分

「ええと、神社神社と」

地図によればこの森をまっすぐ歩いていればその内神社が見えてく  
るらしいのだが・・・

しかし未だ妖怪に会ってない所を見ると、奴らは夜行性なのかな？  
そうこう考えていると

「ん？」

左手に石段が見えてきた

そこに近づき、見上げると上の方に鳥居があつた

「ここっばいな」

案外あつさりこれだな、今日はツイてるんじゃないか？

とりあえず荷車を置いておき、石段を一段飛ばしで登っていく  
鳥居が近くなるとその側面に「博麗神社」と書かれているのが見えた

「よつと」

石段を登り終え、前に向き直る

参道の向こうには古風な社があり、その手前には賽銭箱と何かガラ  
ガラ鳴らす奴があつた  
ここの神社も造りは同じなんだな

ふと縁側に誰かが座っているのが見えた

赤と白の巫女服を身に纏っている 頭にはリボンっぽいものを召し  
ていて、肩のあたりは露出していた  
恐らく彼女が霊夢だろう

「あのー、霊夢さん、だよな？」  
彼女の元に歩みより、声をかける

「ええ、そうだけど・・・貴方は？」

「今日から人里で依頼屋を営むことになった岡野正也だ」  
俺って敬語で話す相手は選ぶ人なんだな

「ああ、紫の言ってた人ね」  
本当に宣伝早いなあの人

「それで？何用かしら？」

「酒屋に頼まれて酒瓶を4本届けに来たんだ。今運び出すからちよつと待っててくれ」

そして俺は下に置きっぱなしだった荷車へと向かう

「よっこいしょっと、これで全部かな」

最後の1本を縁側に置く いやゝなかなかの重労働だった

「あら御苦労様、確かにこれは酒屋に頼んだ酒だわ」  
霊夢って結構淡泊な人なのかもしれない

「ところでその酒って一体誰が飲むんだ？」

もしかしたら親父さんが相当飲兵衛だったりとか？

「勿論私に決まってるじゃない」  
「・・・え？」

いやいやちよい待てや

「霊夢って見た感じ未成年だよな？」  
「それがどうかしたの？」

「いや、どうかしたの？じゃなくて・・・ 未成年はまだ酒とか飲んじゃ駄目なんじゃあ」

「そんな決まり事はないわ」

何と、幻想郷は未成年でも飲酒オーケーだったのか！？

よし、今度酒屋に行つて1杯やつてくるか

「それより貴方」

「ん？」

どうしたんだろう、何やら急に眼付が変わったような気が

「紫から聞いたけど、何やら不思議な力を持つてるみたいね」

あの人何余計な事言っちゃってるのお！？？

「いやいや何の事だかさっぱり・・・」

「いいから今から私と勝負しなさい」

うわーお、何かやる気満々だよこの人

「ちょ、ちょっと待って！俺まだ仕事が残つてて戦つてる暇なんてないししかもそんな力持つてないし紫さんの出鱈目だよ！！」

焦りから若干早口になってしまった

すると彼女は元の目付に戻り

「あらそう・・・まあ紫<sup>あいつ</sup>の話はたまに本当かどうか分からない所もあるしね 今回は信じてあげるわ」

あくまでも「今回は」なんだな・・・

「じ、じゃあもう俺帰るからな！」

「そ、素敵な賽銭箱ならあそこよ」

「今1銭も持つてないんだ」



今度こそ殺られる雰囲気だったのでダッシュで神社を後にした

「おっちゃん、配達終わりましたー」

そしてここは酒屋の前 何とか依頼達成である

「おう御苦労！ほれ、お駄賃だ」

そう言っておっちゃんは5円玉を差し出す

「ありがとうございます」

「おう！また頼むよ」

また頼む気なのかこのオッサン 出来れば酒の配達ぐらい自分でしてほしいね

「ふいー、やっぱここは独特のにおいがするなあ」

報酬を受け取り、一服がてら人里めぐりをしていた

どこに何があるかぐらい把握しとかねば

ふと、何やら声が聞こえてきたのでそちらの方に歩み寄ってみる

「ゲン！お前また宿題忘れたのか！？」

先生と思いき人の怒号が炸裂する 成程、ここは学校なのかな？

「うえーん、先生ごめんなさーい」

怒られて泣きながら先生に謝罪するゲン君 気にするな、宿題なんて俺も全然やらなかったし

「やるべき事はやれと何回言えば分かるんだ!？」

「こ、今度はちゃんとやりま(ゴン!)ぐぴゃっ!」「ドサッ

「・・・」

何かすごい音が聞こえた気がするがあれは聞かなかった事にしておこう うん、それがいい

ゲン君、大丈夫かな？

「お、団子屋発見」

腹も減っていたので団子を1皿食べていこうと思った

「あらいらっしやい」

お出迎えしてくれたのは団子屋のおばちゃんだった

「団子1皿ください」

「はいよ、2円ね」

俺は懷から5円玉を取り出し、おばちゃんに渡す そしておつりの3円を受け取った

やはりもつと稼がないとな

「へいお待ち」

するとおばちゃんは2本の団子が乗った皿を持ってきてくれた あらかじめ作ってあったのかな？

所謂3色団子だ 懐かしいね

俺は団子屋の前に置かれてある長椅子に座り、1本を頬張る  
うん、なかなかいけるんじゃないか？

「そうそう坊や」

「何でしょう？」

するとおばちゃんが俺にこんな事を言ってきた

「近頃この近くの森で里の人間が夜雀にしょっちゅう襲われているらしいからね、坊やも気をつけな」

「その夜雀というのは？」

「何でも歌か何かで人間をおびき出すんだとさ」

おびき出した人間を食らう妖怪か そんな物耳栓しとけば問題ないんじゃないか？

「はい、気をつけます」

とは言ったが内心興味はあった そんな妖怪がいるのなら是非とも見てみたい物だね

団子を食べ終えた俺は団子屋を後にした

「さあて、一通り見て回ったし、そろそろ帰るか」

チンチロチンチロリンリン

昼寝のつもりで居間にねっ転がったのだが、目が覚めると外は暗くなっていた

「さあて、何か依頼は来てないかね・・・」

念のため来てないか掲示板を確認するため、扉を開けて外にでる

「ん？」

その時、微かだが森の方から何やら音が聞こえた  
何か戦争でもしてるような音だった

「何だろうな？」

気になって仕方がなかったので音のする方に向かって走りだした

「ええと、確かこの辺から・・・」

走ること数分、近づくにつれだんだんと音が大きくなり、やがてその音は止んだのだった

誰か戦ってたのだろうか？そんなもって決着がついたのかな？

「ん？」

ふと前を見ると、少し離れた所に何かが落ちていた  
俺はその元に走っていく

「こ、これは・・・」

何と、それは動物だったのだ  
といつてもただの動物ではない

何やら赤いオーラを放ったヤマアラシのような生き物だったのだ

「くっ・・・こんな所でやられるとは」

しかも何か喋り出したよこのヤマアラシ！？

見ると傷まみれでばたんきゅーと言った感じだった

「お、おい・・・一体誰にやられたんだ？」

とりあえず一声かけてみる

「ちょっと駄目だよ、せつかく今から食べるって時に邪魔しちゃ

」

「!？」

突如、背後上空から第3者の声がかかる

振り返つてみるとそこにはこのヤマアラシを仕留めたらしき者が羽  
を飛ばたかせながら俺を見下ろしていた

「おびき出してもいないのに人間の方から来てくれるなんて、今日  
はついてるわ」

おびき出すだ？そうか、こいつが昼間おばちゃんが言ってた夜雀か

「まさか、あんたがやったのか？」

「げっ 歯類の癖に私に喧嘩売ったのが悪いのよ、まさしく自業自得  
ね」

まあ最も何故このヤマアラシが喧嘩売ったのかは知らんが・・・

だが傷まみれの姿を見るとどうも放っておけなくなった

「悪いんだが今日の所は見逃してやってくれないか？見ての通り傷だらけみたいだし・・・」

「あら まさかそいつを庇うって言うの？」

「いんや、どうせ食うんだったら人間か動物のどっちかに統一しろって事だ、それにヤマアラシなんて食ったら腹壊すからやめとけ」  
全く、これだから妖怪ってのは身の程を知らない

「まあいいわ、貴方がそこまで言うのだったら・・・」  
夜雀は攻撃の態勢に入る

「ついでに貴方もここで食べてあぐげる」  
そう言うや否や、数10個もの弾幕を飛ばしてくる 戦いの火蓋は切って落とされた

1個1個見極め、サイドステップをフルに活用して確実にかわしていく

「無駄無駄あゝ」  
そして夜雀はかわした所に更なる追撃を加える、が

「うおおお！」  
俺はそこに例の右手を突き出す  
すると元気よく飛んできた弾はバキン！という効果音と共に打ち消された

「へゝ、人間の癖になかなかやるねゝ」  
「そらどうも」

今度は8、9個もの弾が俺めがけて1直線に飛んでくる

しかし、それらも構えた右手によって全て打ち消される

「困った困った、弾じゃあなたを仕留められそうにないわね」  
すると彼女は打つのをやめ・・・

「くくく」

何やら歌い始めたのだ

その歌というの莫名其妙上手くて思わず聞き入りそうだったのだが

直後、周りの風景が闇に溶け込んだような感覚に陥った

「な、何だこれは!？」

何も見えない、これじゃあ弾を避けるのは困難だ

その時、目の前が一瞬チカツと光る

俺はとつさにその光に右手を突き付ける

バキン!という弾が打ち消された音がした  
とつさに動けたのはまだ冷静さが残っていたから・・・

そうか、暗い所だと視力が大幅に落ちるのか

(ん?)

俺は先程弾を打ち消した右手の事を思い出した

(もしかして・・・)

この視力低下が夜雀の能力による物なのだとしたら

バキン！

そんな効果音が脳内で再生されたような気がした  
右手を脛にあてるとさっきまでの闇は取り払われ、周りが見えるようになった

「ふふふ、なんにも見えないでしょ？」

まさかこいつ、俺の視力が回復した事に気づいていない？

「うわー見えねー何も見えねー」

それならば見えていないという演技をさせてもらうまでだ　油断した所を一気に仕留めてやる

「ならその間にあのげっ歯類は食べさせてもらうとするわ、後であなたもゆっくりと食べてあげる」

そう言っただ奴は地面に降り立ち、ヤマアラシの元へと歩み寄る

(・・・へ？)

俺は拍子抜けした

普通優先順位が逆なんじゃないか？傷まみれのヤマアラシなんか俺を倒した後でも食べられるのに・・・仮にもまだ動ける人間に背を向けて先に向こうを食べに行っただ？

もしかしたらこいつ、俺を全く無害な人間だから後回しにしても問題ないとか思っただけか？

最も視力が戻ってるなどとは知る由もないだろうが・・・

(こいつもしかして・・・)

俺はある一つの結論を出す



（馬鹿なんじゃないか？）

「夜雀サイド」

（全く、すばしっこい人間だったわ）

おかげで更に空腹が増したじゃない、どうしてくれるのよ

まあいいわ、その間に何をしでかすか分からないこの動物を食べて  
おこつかしら

所詮普通の人間が妖怪に勝てるとは思わないしね

そりゃ確かに弾を消された時は正直驚いたけれども、それを除けば  
脅威の存在ではなさそうね 私を食べようとつけ狙ってくる亡霊の  
方がよっぽど怖いわ

それに何も見えないんだから後回しにしたって全然問題ないわ

「く・・・そ・・・お前・・・なんか・・・に・・・」

あら、まだ喋る元気があったのかしらこの動物

「貴方が何と言おうと私が勝ったんだから、敗者は素直に食べられ  
てほしいな」

さあて、お楽しみの晩飯の時間ね

トントン

ん？誰かしら？せつかくこれから食べようっていつ時に

「誰な」「ぽぽぽぽん」(ガッ！)「きゃあ！」  
ドサッ

く正也サイドく

「ふう・・・」

この妖怪が馬鹿なのが幸いしたぜ 油断大敵という言葉をも身を持って教えてやったんだ、ありがたく思え

俺は気づかれないように夜雀の背後に忍び寄り、肩をたたいて振り向いた所に渾身の右ストレートをかました

夜雀は近くの木の下で気を失い、ぐったりしている

さてと

「おい、大丈夫か？」

今度こそヤマアラシの元に歩み寄る

「ん？あ・・・ああ・・・何とか」

そうは言うものの体は未だ傷だらけだ

「あんた・・・一体？」

「ああ、俺は岡野正也だ お前は？」

「俺は・・・ガリバーだ」

どうやらこのヤマアラシはガリバーというらしい

「お前ボロボロじゃないか、何なら俺の家に連れていこうか？こんな所に突っ伏していたら妖怪に食われるぞ」

「あ、ああ・・・すまない・・・世話をかけて・・・」

俺は両手でガリバーを抱きかかえ、人里に向かって走り出そうとした

ふと、そこで先程の夜雀の方を見る

こうして改めて見ると普通の少女にしか見えない　今思えばやりすぎたかななんて考えてしまう

「う・・・うつ・・・」

やっべ、意識が回復してきたみたいだ　起きる前にずかららないと

そして俺の家にて

「ほれ、水飲むか？」

「ああ、すまない」

俺は水で湿らせた布でガリバーの傷跡を手当てし、そこから包帯をまいた

ちなみに布と包帯は家のタンスから見つけた物だ

水を飲んだガリバーは大分元気を取り戻したみたいだ

「ところで何であいつに襲われていたんだ？」

とりあえず気になった事を聞いてみる

「ちょうど人里の子供があいつに食われかけられていてな、何とか

子供は出しぬいたんだが・・・」

どうやら餌となりかかっていた子供を助けたらしい

「ふゝん、いい奴じゃないか」

「でも負けちまった、あんたが来てくれなかったら俺は食われていた この恩は絶対返したい」

ふむふむ、そういう事なら

「ならば今から返してもらおう」

そして俺は一言こう言った

「これから俺と一緒に依頼屋を経営してくれないか？勿論飯は食わせてあげるからさ」

それに俺だけじゃ戦闘力乏しいし・・・というのは隠しておく

「ああ、それなら構わない よろしくな」

「ああ、よろしく」

こうして俺はここに来て初めての‘相棒’を手に入れたのだった  
さて、明日からがんばるぞ（という台詞を何回も言ってる気がする）

TO BE CONTINUED

## 第4章 配達、承りました（後書き）

今回はオリキャラを出してみました

## 第5章 釣り場普及、承りました

コケコッコー

もう朝なんて大っきらい

ガリバーが仲間になって1週間、人里のお手伝いを中心にこなしている内に食費にも余裕ができるようになり、今では米屋の米を炊いたり、魚屋の魚を焼いたりしてそれを居間の卓袱台で食べて生活していた

ちなみに茶碗云々も運のいいことに家の中から発見したのだ

そんなある日

ドンドン

「ん？客かな」

俺とガリバーがぶれいくふあすとを撰っていると、誰かが扉をノックして来たのだ

「はい」

ガラッと俺は扉を開ける

「おはようございます！清く正しい射命丸文しゃめいまるあやです！」

「・・・」

ガラガラガラ

俺は開けた扉を再び閉める 俺は朝からうるさい奴大嫌いなんだよ

「あやややや、何で閉めるんですか!？」

と言っても応対しないと帰ってくれそうになかったので仕方なくもう一度扉を開く

「何の用ですか？」

「たく、こちらら朝は機嫌悪いってのに

「あなたは依頼屋の正也さんですよね？」

「んあ？そうですけど」

「実は、あなたの取材をさせていただきたく伺いました！」

「取材い？」

俺って別に有名人って訳じゃないよな？

うーん、ぶっちゃけ面倒だから断ろうかな

「取材を受けていただければ新聞を毎朝無料でお届けします！」

「無料で？」

「はい！」

何と、新聞が無料で読めるのか！そろそろ幻想郷<sup>こじ</sup>の情報を仕入れる手段が欲しかった所なので俺にとっては嬉しいニュースだった  
なので取材ぐらいは我慢しよう

「じゃあその取材、承りました」

正直ネタとなる話題はほとんど持ちあわせてないけど

「正也、何の騒ぎだ？」

すると気になったのか、ガリバーが俺の肩に上がり、ひょっこりと顔を出す

「あやや!？喋る動物とは珍しいですね」

余程珍しいのか、何やら興味津津な様子の文さん

「フツ、俺は特別な存在だからな」

何格好付けてんだこいつ、傍から見たらウザいだけだからやめい  
とは言っても俺もこいつが何故喋るのかは知らない

「まあこいつは置いて、そろそろ取材を始めてください」  
こうしてインタビュータイムが始まった

「ではまず最初の質問です。正也さんはどういった経緯いきざつでこの仕事を始められたのですか？」

ふむふむ、1問1答形式か、これなら俺でも受け応え出来そうだ

「ええと、何の職にこういうかと悩んでいたら紫さんに勧められました」

「ふむふむ」

そう呟き、メモ用紙にペンを走らせる彼女

「紫さんとの関係は？」

「ただの知り合いです」

決して友達でも恋人でもない、期待外れで悪かったな

「続いての質問ですが、聞くところ貴方は不思議な力を持っている  
ようですね」

誰から情報だよ、まあ大体予想はつくが

「不思議というか何というか・・・ただ弾幕やら妖怪の力やらを打



ち消せるだけですよ」

すると文さんはいかにも胡散臭いとも言いたげな表情（所謂ジト目）で俺を見つめてきた そら信じられないわな

「成程、ならばその力を実際に見せていただきます！」

そう言つて彼女は懷から団扇を取り出し、2、3歩下がる

お、おいまさか・・・

「せいっ！」

掛け声と共にその団扇を横に仰ぐ

その直後、かまいたちのような物が飛んできた

「うわっ！」

俺はとつさに右手を前に突き出す

パキン！という効果音と共にそれは消えた

全く、やり方が強引すぎる・・・

すると信じたのか、目を輝かせながらこう言つた

「貴方は人間でありながらどんな妖怪にも負けない力を持ってるんですね！」

「い、いえ、そんな事は・・・」

空飛んでいる相手には届かないし、もし夜雀が馬鹿じゃなかったら食べられてたかもしれないし、こないだ朝の機嫌悪い時に紫さんが俺ん家に出没して「なに勝手に上がり込んだんのじゃああ！」つて叫んで殴りかかろうとしたら頭上からタライ落とされて撃沈したし・・・言うほど都合のいい代物ではない

その後、しばらく文さんの質問は続いた

外ではどんな生活をしていたかだの、もしも彼女が出来たらどうするだの、何かもうほとんどプライベートな事ばかり聞かれた気がする

「質問は以上です、御苦労様でした」

はあ、やっと終わったぜ 寝起きにこの受け応えはキツかった

「それじゃあ明日からお届けしますので、これで失礼します！」

そう言つてビューン！と風の速さでどこかに飛んでいった そういや彼女は一体何者だったんだろっ、眠気で特にそういうのは気にならなかった

「おい正也、まだ朝飯が残ってるぞ」

「あ、ああ、そうだったな」

そっぴや朝飯の途中だったっけ

俺は家の中に戻り、朝食を摂り直した

「ふっ食った食った」

「やはりあそこの秋刀魚は最高だな」

あそこというのはこの人里にある魚屋の事である あそこに売られている魚はどれも新鮮でうまいのだ

「さあて、掲示板でも見に行くかね」

「む？これは・・・」

俺はある一つの依頼書に目をつける

それは先程説明した魚屋のおっちゃんからの物だった

俺はそれを手にとり、中に入って座布団に座り、その依頼内容を読む

依頼主：魚屋の店主

依頼名：湖の氷

危険度：E

依頼内容：最近いつも釣り場にしていた湖の表面が凍ってて魚が獲れないんだよ

割ろうと思ったって硬くてびくともしねえ・・・

坊主、何とかしてくれないか？相応の報酬は用意するからさ

報酬：30円

「・・・・・・・・」

何とかしろって言われてもねえ、俺にどうしろと？

まさかそのびくともしない氷を割ってくれとでも言うのだろうか？

「どうしたんだ？」

ひょっこりと俺の肩から顔を出すガリバー

「依頼だ、行くぞ」

誠に不本意だが報酬金30円は魅力だ

やるだけやってやろっじゃないか

そして現在、魚屋のおっちゃんが俺達をその湖とやらに案内してくれている訳である

どうやらその湖というのも森の中にあるようだ  
俺はおっちゃんを見失わないように着いていくのだが

「お前は気楽でいいよな」  
俺は肩に乗っているガリバーに話しかける

「ここは俺の特等席だ 飛ぶの疲れるし」  
「たく・・・」

俺はお前の椅子じゃないっての まあ軽いからいいけどさ

「おお坊主、ここだ」  
そうこうしている内にその湖に辿り着いたらしく、おっちゃんが前の方を指さしている

するとそこには、大きな大きな鏡があつたのだ

「へー、これはこれで美しいじゃないっすか」  
湖全体にぶ厚い氷が張られている スケートとか出来るんじゃないか？

「そんな軽い問題じゃねえよ、俺にとっては死活問題なんだよ　このままでは店の魚が底を尽きちまう」  
おっちゃん　は頭を抱えながら言う

「金槌が何かで割れるんじゃないすか？」

「試してみたがびくともしなくてよ」

ふむ、確かに硬そうだな

「よし、俺に任せろ」

そう言つてガリバーは俺の肩から飛び出し、湖の真上へと飛んでいく

「喰らいな！」

そう叫ぶと前の両足からちよつと太めの赤いレーザーのような物を2本発射する

ドオオオン！

爆音と共に表面に直撃し、その氷は・・・ヒビ一つ入らず、再び輝きを見せる

「馬鹿な・・・」

ガリバーは俺の肩に戻り、信じられないといった表情になる　最もこいつの表情の変化は動物なので分かりづらいが

「それにしてもすごい強度だな・・・」

俺は湖のそばに歩み寄り、その場でしゃがんだ

「軽く叩いて強度を確かめてみよう」

叩いた音で硬さを確かめるっていうのは何やら原始的な考えだが、何を使えば壊れるのかを考えなければ

そして右手で握り拳をつくり、その表面に触れる  
その瞬間

バキーン！

あれだけ硬かった氷が嘘のように簡単に砕け、消滅した  
そして元の湖の姿が浮かび上がった

「……へ？」「」

その場にいる全員が理解出来なかった

「正也、お前何かしたか？」

「いや、俺はただ右手で軽く触れたただだが……」  
「ん？右手で？」

「すげえじゃねえか坊主！見なおしたぜ！ほれ、約束の30円だ」

「あ、どうも！」

俺はおっちゃんから30円を受け取る これでおっちゃんも釣りが  
再開出来そうだ

「また家の魚をよろしくな！じゃあ俺は先に帰るぜい！」

「あ、はい。ありがとうございます」

よっしゃああ！と叫びつつ人里に走り去っていくおっちゃん

そして俺はその後ろ姿を見てその場で佇んでいた

「おい、まさかあの氷……」

「ああ、間違いない」  
一息ついてこう言う

「あれは何かしらの能力による物だろう」  
そら右手で触れれば消える「弾幕or妖力及び能力という等式が成り立ってるんだし

「なあ正也」

「ん？どうした？」

ふとガリバーの方を見てみると何やら体を震わせている

「ここ、何か異様に寒くないか？」

「・・・確かに」

言われてみればまだ夏だというのにここはクーラーがガンガンに効いた部屋の中なんじゃないか？と思ってしまっくらい寒い　ゲ○ガ  
ーでも生息してるのかな？

その時

「あんた、何勝手にあたいの縄張りに入り込んできてんのよ！」

「「！？」」

突如、背後から威勢のいい声がかかる

振り返ってみるとそこには背が低く、水色の髪の毛に青色の大きなリボン、さらに青っぽいワンピースを召した女の子が浮遊していた  
背中には氷っぽい羽らしき物がついている

見た目こそは愛らしいが何やら気が強そうだ　スケバンじゃないんだからせめてあたいて言うのはやめてほしいね

ゲ○ガーはいないみたいだけど目の前に妖精らしきものならいた、恐らく湖を凍らせたのもこの子だろうか

「え？ここおっちゃんのフィッシングポイントじゃなかったの？」

「違うわよ！」

どうやらここは元々この子のテリトリーだったらしい おっちゃんもよく今まで見つからなかったな

「せっかく凍らせた湖をよくも台無ししてくれたわね！ただじゃおかないんだから！」

何やら湖に張られていた氷を消されてご機嫌斜めだ こりやすんなりと帰してくれそうにはないな

でもね

「俺が君みたいなおちびちゃんに負けると思ってるの？時間の無駄だからさっさと引き返しんしゃい」

「なっ、この最強の妖精チルノがあんたみたいなただの人間に負ける訳ないじゃない！」

へー君って最強なんだ、すごいね 例の隙間氏とやりあったらどんな戦いを見せてくれるのが楽しみだ

「そっかそっか、なら俺に勝てる自信もあるって事なのかな？」

「当然よ！」

やけに自信满满だな 最もあんなちっちゃん子に負ける訳ないという自信を持っているのは俺だが

「おい正也、あいつに勝てるっていう確証はあるのかよ？」

「ん、確証というよりは・・・」

そして俺はガリバーにこう言った



「俺、ああいう子見ると弄りたくなるんだよね」

「・・・駄目だこりゃ」

さてと

「さーどつからでもかかってきなさい、お馬鹿さん」

「むきいー！おしおきしてやるんだから！」

そう言つて俺目がけて氷弾を放ってくるチルノちゃん

「無駄なんだよなあ」

俺は避ける事もせず、ただ右手を前に突き出す  
パキン！という音と共に氷弾は霧散する

「このー！」

今度は何発もの氷柱を放ってくる

俺はそれを最小限の動きでかわしていく

「よつと」

パキン！

かわせない物は右手で打ち消すだけの簡単なお仕事である

「むう、人間の癖にやるじゃない」

「そりゃどうも^^」

するとチルノちゃんは打つのを諦め、何やら力を溜めている

「あんだなんかには使いたくなかったけれど・・・くらいなさい！  
ヘイルストーム！」

そう叫ぶや否や、あの子の周りから数10個もの氷柱が現れた

「うお、何だありゃ？」

「正也、あれはスペルカードだ」

「スペルカード？」

「まあ要はそいつ個人が使える必殺技のような物だ」  
へー、そんな物あったんだ 是非とも俺も使ってみたい物だね

そんな事を言っているとその氷柱共がまるで1本の矢のごとくすごい速さで飛んで来たのだ

「お、おい、やばいんじゃないか？」

「いんや」

俺は再びそのばで右手をのんびりと構えた

パキキキキキキン！

蛇のように襲いくる氷柱は皆俺の右手によって防がれた

全く、一直線すぎるんだつての  
それ故にいつも簡単に破られてしまう

「ふふふ、何とかストーム破れたり」

「ぐぬぬぬ！」

人間にやられるのが余程屈辱なのか、顔を真っ赤にして睨みつけていた

「これでもくらいなさい！」

するとチルノちゃんは俺目がけてライダーキックを放ってきたのだ

しかし、俺は1歩左にずれ・・・

ガシッ

右手でその子の頭を掴んで制止させる

「ええい、放しなさい！」

これ以上前に行けず、ジタバタジタバタと手足を振り回すチルノちゃん

「これで分かったかな？その程度で俺に勝とうなんざ100年早いよ」

そしてとどめの一言を突き刺した

「ぐぬぬ、今日のところはこれで勘弁してあげるわ、覚えてなさい！」

ふんっ！と何やら涙目になりながら向こうの方へ飛んでいった

「・・・お前、ある意味すごいな」

「言っただろう、あんな子に負ける訳ないって」

まあ現実の世界ではしょっちゅう近所の小学生のガキンちょに喧嘩売られてたし、この手の類の子との接し方は心得ている　ちよっと心をいじくれば簡単に折れる

「さて、今日は疲れたし、そろそろ帰るか」

「まだお昼時だぞ・・・」

そっぴやそっぴだっ たね

「んじゃあ昼は作るの面倒だし、人里の食堂にでも食べに行くか」  
ただ今日はもう依頼を受ける気がしない　正直あの子とのやりとり

で  
疲  
れ  
た

T  
O  
  
B  
E  
  
C  
O  
N  
T  
I  
N  
U  
E  
D

## 第5章 釣り場普及、承りました（後書き）

なんか今回の正也はスっ気全開でしたね・・・

## オリキャラファイル vol.1 (前書き)

題名の通りこの作品内のみで登場する人物紹介です

## オリキャラファイルvol.1

NO.01

おかのまさや

岡野正也

種族：人間

能力：特になし（ただし、弾幕、能力、妖力を打ち消す右手所持）

概要：普通の私立高校に通う2年生

中学の頃はバスケットボール部に所属しており、全国大会出場経験あり

高校からは無所属

両親の秘密を知るべく、幻想郷へと旅立つ

彼の右手には謎の人物から授けられた不思議な力が宿っており、弾幕云々を打ち消す事が出来る

イマ○ンブレ○カーと似ているが、運までは打ち消さず、他にもまだまだ隠された力があるらしい

性格は基本温厚だが、人一倍正義感が強い　クッキーと莓大

福が好き　朝が大の苦手

喧嘩は強く、二人の友人と共に校内のとある戦を戦い抜いてきた過去がある　それについては後日記載

人の性格を見抜くのが得意で、初対面の人でも1〜2分話していれば分かるという

得意科目は英語と体育

NO.2

ガリバー

種族：妖獣

能力：自身の体を武器に変化させる程度の能力

概要：赤いオーラを身にまとったヤマアラシ

夜雀に破れ、間一髪の所で正也に救われる　その後正也の相

棒となる

短気で生意気な性格だが、優しい一面もある 魚全般が好き  
蛙が大の苦手

何故か喋れる

後部の針は普段は閉まってあり、触っても怪我はしない  
威嚇する時や戦闘時に逆立てる

NO.3

謎の人物

種族：UNKNOWN

能力：UNKNOWN

概要：夢の中で正也に語りかけてくる

正也に力を与えたらしき張本人らしい



## 第6章 お手伝い、承りました

朝だよ

俺とガリバーはいつものように朝食を摂っていた  
いやー、昨日は昼間からは何も依頼受けなかったなあ　そんでもって飯食って寝ただけだもんな

ガラッ

「ぶんぶんまる文文。新聞でーす！」

ビュオオン

突如家の扉が開かれ、風とともに新聞が飛んで来た

バサバサバサバサ

そしてその新聞が俺の顔に覆い被さる　漫画みたいな光景だ  
全く、物の扱いが乱暴なんだよ・・・

「えーとなになに」

とりあえず新聞を両手で持ち、記事を読んでもみる

『密着！依頼屋店主の隠されし真実』

「・・・・・・」

タイトルから何やら不穏な空気を感じる  
ま、まあ読んでみるか

「えーと、『新しく人里に入居し、依頼屋を営んでいる岡野正也氏は、八雲紫氏と密接な関係にあることが発覚。彼女と関係を持ち、距離を縮めるべく現実の世界から幻想郷にやってきた模様。尚、彼の右腕には霊弾を打ち消す力が宿っており、恐らくは彼女を護衛するために身に付けた物だと思われる・・・』ってなんじゃこの出鱈目記事はああ!!」

ビリッ!と両手で新聞を真つ二つにし、壁に向かって投げつける  
おのれあの新聞記者め、俺のアンサーを完璧に無視しやがって 勝手にシナリオ作るんじゃない

「全く、お前も朝からうるさい奴だな」

「朝は不機嫌なんだよ!!」

今度あの記者が訪ねて来たら全力で抗議してやる

トントン

ふと、誰かが家の扉をノックする音が聞こえた

俺は扉の前まで歩みより、勢いよく開けて開口一番にこう叫んだ

ガラッ

「てめえの書いたハッター記事今すぐ取り消せやああ!」

「どうかしたのか?」

「ってわわわ、慧音さん!?!」

てつきり奴が来たのかと思ったのだが、そこには色々とお世話になった慧音さんがいたのだ

「お久しぶりです、ちょっと色々ありまして、失礼しました」  
とりあえず無難にあいさつする

「久しぶり、それよりちょっと頼みたい事があつて来たんだが」  
「はい、何でもしょう？」

どうやら依頼をしに来たらしい

「寺子屋の助手をしてくれないか？」

「助手う？」

寺子屋つて今で言う学校の事だよな

「普段は人里の大人達に頼んでるんだが、生憎今日は皆手づまりらしい　そこで正也に協力をお願いしに来たという訳だ」

「ふむふむ、なるほど」

「報酬なら後に渡す」

要はお手伝いさんを大人の代わりに担うって事か

「そういう事なら承りました」

「うむ、よろしく頼む」

こうして慧音さんに案内され、寺子屋へ行く事となった

「ここだ」

歩くこと2、3分、少し古びた建物の前までやってきた

ガラッ

慧音さんが入り口の扉を開く

「邪魔しまーす」

中に入ると玄関の左には靴箱があり、その奥には教室と思しき広い畳の間があり、長い机や座布団が置かれていた

見ると既に何人かの子供が走り回ったり、他の子とお話していたりして、教室内は騒がしかった 何か微笑ましい光景だな

「静かに、皆席につけ」

慧音さんの一声で騒がしかった教室は静かになり、各々の席に座る

そうか、慧音さんはここで先生もやっているのか

でも何か忘れている様な気が・・・

慧音さんは教卓に上がり、子供達にこう言った

「今日は昨日も言った通り習字をする 皆、習字の用意は持ってきてるな」

なるほど、この世界にも習字はあるのか 俺も高校で文系だから書道を取ったんだがなかなか難しい字ばかり書いていた気がする

「せ、せんせえ」

「ん？どうしたんだゲン」

すると一人の子供が何やら怯えながら何かを言おうとしている 急にトイレにでも行きたくなっただんだろうか

「習字の用意、忘れてしまいました・・・」

どうやら習字道具を忘れてしまったらしい  
ん？ゲンって確か・・・

「そうか・・・」

すると慧音さんはゆっくりとその子の元へと歩み寄り

「これで何回目だと思ってるんだお前は！」

ゴスッ！

「ぐびゃっ」

ドサッ

一喝するや否や、その子の両肩を掴み、おでこ目掛けてダイナミックな頭突きを喰らわせる慧音さん

ちよっ、大丈夫なのかゲン君！？

ん？そーういや俺だいが前人里めぐりしていた時一度ここに来たんだっけ？そんでもって宿題忘れたとかどうのこーうので怒られていた気が・・・音だけで中は見てないけど

てかゲン君、忘れ物の常習犯かよ！？とりあえず懲りようよ！？  
それよりも今この場で分かったことは慧音さんは絶対に怒らせてはいけないという事だった 俺もあんな頭突きは喰らいたくない

「全く、私のを貸してやるからそれでやれ その代わり、次はないからな」

そう言っつてゲン君に習字道具を貸し与える彼女

こんな優しい先生はそうそういないだろう

そしてしょんぼりしながら自分の席に座るゲン君 どんまい

「えー、いつもなら里の大人達に来てもらってるんだが皆忙しい為、最近ここで依頼屋を営み始めた者に来てもらった」

そう言うのと彼女は俺に手招きをする、ふむ、自己紹介をしるというサインだろう

教卓に上がり、皆の方に向き直った

「ええと、岡野正也っていいます 短い間だけでもよろしく」  
周りから拍手の音が聞こえる 暖かいなこの子達

「今回は皆に‘友情’という字を書いてもらう」

そう言つて慧音さんは黒板にでつかく‘友情’と縦に書き、筆順やら注意点やらを説明しながら書き込んでいく  
子供達には若干難しそうだな

「それじゃあ始め」

掛け声と共に皆一斉に筆を墨に浸し、書道用紙に書き始めた

「よつこらせと」

慧音さんに「外に行つてバケツに水を汲んで運んで来てほしい」と言われたので、寺子屋の近くの水場で置かれてあった2つのバケツに汲み、中に運んで教卓の近くに置いた  
恐らく筆を濯ぐ為の物だろう

そして今、教室を行ったり来たりして皆の様子を見て回っている

「正也兄ちゃん、ここどうやって書くの？」  
すると一人の女の子が、情の書き方に戸惑っており、話しかけてくる

「ああ、ここはこうやって・・・」

俺はその子の書いている方の手を持ち、動かせながら書き方を教える  
まだこれぐらいの字の書き方なら教えてあげられる　ただ書き順の  
多い難しい字だけは勘弁してほしいね

「ありがとう、お兄ちゃん」

「ん、頑張つて」

子供って見ると結構微笑ましい物だな　俺の小学生時代もこんな  
んだっただろうか

「正にーちゃん、机に墨こぼしちゃったよ」

すると今度はゲン君が困った顔で助けを求めてくる　全く落ち着き  
がない・・・

「待つてて、今雑巾持ってくるから」

こりゃ慧音さんも毎日大変そうだな・・・

それから1時間後

「はい、今日はそこまで」

教卓にあがり、慧音さんが言った

「書いた中でいいと思った物をここに持ってくるように」  
すると各々が自信作を教卓の上に重ねて置いていく

いや、書き方教えたり机ふいたりバケツを取り換えたりと大変な仕事だった

「ほれ、約束の報酬だ」

休み時間、慧音さんは俺に20円を差し出した

「ありがとうございます」

この後の授業は基本慧音さん一人が受け持つらしいので、これにて依頼完了である

「それでは頑張ってください」

「うむ、正也も頑張れよ」

それじゃあ、と軽く会釈をし、寺子屋を後にしようとする

「正也にーちゃん、また来てねー」

「うん、また行く」

出る間際に一人の子供に声をかけられ、その子に向かって手を振った

慧音さん曰く、俺は割と好評だったらしい

まあ別に悪い気はしないかな・・・



そしてここは俺の家

「ただいま」

扉を開け、中に入る

「おうお帰り、お疲れさん」

留守番していたガリバーが出迎えてくれた

「それより正也、お前にうってつけの依頼が来てるぞ」  
そう言つて俺に一枚の依頼書を渡す

それを受け取り、座布団に座つてその内容を読んでみる

するとそこには・・

依頼主：屋敷の頭首

依頼内容：貴方の事について知りたいです。

つきましては団子屋の近くの屋敷までお越しください。

報酬：200円

「な？一攫千金を狙える依頼だろ？」

「おいちよつと待てやヤマアラシ」

俺は一呼吸置いてからこう言つた

「どう見たつて怪しさ満天じゃねえか！？何だよ貴方の事について

知りたいって！？それに報酬の額が胡散臭すぎるわ！！」

全く、俺はこの手の類の危なそうな依頼は避けてるってのに・・・

「なんだ正也、知らないのか？この屋敷の主の事を」

「何がだよ？」

「ったく、ちったあ耳の穴かっばじっておばさん連中の井戸端会議にでも耳を傾けたらどうだ？」

その言い草にカチンと来たが、今は我慢しておこう

「聞いた話によれば、そいつはとある有名な書物の著者で、尚且つかなりのボンボンらしいぜ」

そんなのどこで聞いたんだよ？ってのは一先ず置いといて

「でも、何故そんな御方が俺なんかの事を？」

一般庶民である俺の事を知ったって何かメリットがある訳ではなさそうなんだが・・・

「恐らくその右手絡みだろう」

「なるほど・・・」

俺の力ってそんなに珍しいのかな？報酬の額の高さからもう何が何でも知ってやる的なオーラを感じるんだが

「ま、まあとりあえず昼飯食った後で行ってみるか 聞く感じ別に危なそうじゃないし・・・」

そして俺はガリバーと共にその屋敷に行く事を決めた

昼飯を食べ終え、現在その屋敷の入り口の前にいるのである

「そついや頭首つてどんな人なんだろうな」

「さあ、髭生やして威張ってるおっさんしか浮かばないな」  
すうつと深呼吸をし

ドンドン

「ごめんくださーい、依頼屋でーす」  
ノックをし、扉の奥に向かって言う

すると奥から「今そちらへ向かいます」という声が聞こえた

数秒後、ガラツと扉が開かれる

「よくぞお出でくださいました」

お迎えしてくれてくれたのは花柄の着物を着用し、頭には花飾りを  
装着した少女だった

歳こそは俺より年下みたいだが、どこか大人びた雰囲気漂わせて  
いる

恐らく彼女はこの屋敷で大切に育てられたお嬢様なのだろうか

「ええと、依頼書を読んで伺いました、岡野正也っています 貴  
方は？」

とりあえず名乗り、名前でも聞いてみる

「私がこの屋敷の頭首、ひえだのあきゆう稗田阿求といいます」

何か日本史の教科書にそれっぽい名前が載ってたような気もしなく  
もない

・・・ってそれより

「……え？」

今何と言った？俺の耳が正しければ確か……

‘頭首’って言ってなかったか？

「ええええええ！？ととと頭首う！？？」

俺とガリバーが同時に驚きの声をあげた

「何かおかしい事でもありました？」

「あ、いや何でもない何でもない！」

そら見た目年下の少女がおえらいさんだと知ったら誰だって驚く  
つしよ

人里に来て初めてのビッグサプライズだった

「ところで、何故俺なんかの事を知りたいと思ったの？」

「聞く話によると、不思議な力を持つてるとの事なので」

やはりこの右手か 何故皆知りたがるんだろうね

「ところでそちらの喋る動物は……？」

やはり動物が喋るのは珍しいらしく、阿求さんが何やら気になった様子で訪ねてくる

「ああ、こいつはヤマアラシのガリバーっていうんだ」

「ふっ、よろしくな」

何でこいつは初対面の人に対していちいち格好付けるんだろうか

「それならついでにガリバーさんの事も教えていただけますか？」

「ああ、構わないぜ」

「お前はついでだな……」

だが俺も正直こいつの事は知っておきたいと思う

「こちらです」

阿求さんに案内され、畳の間へと入る

見渡すと花瓶やら棚やらがあり、棚には何冊もの書物が収納されていた

「とりあえずそこにお座りください」

座ってもいいとの事なので、用意された座布団の上に座り込んだ  
ついでにお茶と和菓子も用意されている

すると彼女は戸棚から長めの半紙と墨と筆を取り出し、俺の前で正座をした

なかなか礼儀正しそうな人だ、俺なんか普通に胡坐あぐらかいてるのに・

・  
「それではまず正也さんの事について色々聞かせていただきます」  
そう言つて筆を構えてスタンバイOKな様子である  
ふむふむ、合点承知

「ええと、渡来人です」

「それは慧音さんからお聞きしました」  
あの人もけっこう話しちゃう人だねえ

「種族は人間です」

「それは知ってます」

そら見たまんまだもんね

「ただの人間なので空は飛べません」

「それも知ってます」

だろうね、里の人間が空飛んでる所なんて見たことない

「好きな物はクッキーと苺大福で、嫌いな物は朝とカイワレ大根、あと、人の性格を見抜くのが得意です」

ただの特技なんだけどね でも今まで外した事は一度もない

「それなら私の性格を見抜いていただけますか？」  
そら気になるわな・・・

「うーん、上品且つしっかりしていて抜け目がないけど、ちょっぴり強情で好奇心の強そうな人・・・かな？」

これはあくまでも俺の主観であって周りからはどう見えるのかは知らない

すると嬉しそうな顔で頬に手を当て、「やだ」と言ってもう片方の手を振る阿求さん

うーん、お世辞臭いと思われたのかな？

「とりあえず続きを」

さてと、そろそろ本命に入るとするか

「ええと、俺の右手には弾幕だの能力だの妖力だのを打ち消す力が宿っています 聞く話によると、まだまだ隠された力もあるとの事です」

「その隠された力というのは？」

「自分もよく分からないけど、少なくとも攻撃的な物ではないらしいです」

ただ「夢のお告げです」と言っても信じてもらえそうにないな

「それは能力なのですか？」

「能力と言っているのかどうかは分かりませんが、何故か皆珍しがるんです。こんな事言うのは変かもしれないけど、幻想郷では説明のつかない力・・・なのかな？」

さらさらと半紙に筆で書き込んでいく彼女。なかなかの達筆だ

すると突然その手を止め、何やら思いだしたような表情になり、俺の方を見る

「そういえば今朝の新聞に、紫様との関係がどうのこうのと・・・」

「誤解だからね！？あれは奴の作り話だから信じないで！??」

どうやら阿求さんも新聞をとっていたらしい。全く、これだから情報化社会ってのは怖いね

俺の事は書き終えたとの事なので、今度はガリバーの番である  
俺は和菓子を頬張りながらその様子を眺めていた

「種族は妖獣、能力は『自身の体を武器に変化させる程度の能力』だ。例えば剣とか鞭とかにな」

何その能力。おい、今度俺にその武器使わせるよ

「好きな物は魚全般で、嫌いな物は蛙だ」

なかなか人間に近い好みをしてるな。ヤマアラシが蛙に怯えるんならシニール極まりない

「ところでどういった経緯で正也さんとお仕事を？」

「正也は俺の命の恩人でな、その恩返しだ」  
うう、言ってくれるじゃねえかこのヤマアラシ 普段は生意気で短  
気な奴なのに

それからしばらくして

「無事書き終わりました」

「お疲れさま」

長々とした文らしき物を書いた後、お二人の絵を書かせてほしいと  
の事だったので結構時間がかかった  
ところでその書いた物どうするんだろうか？

「お二人の事は『幻想郷縁起』に追加しておきます」

「幻想郷縁起？」

「私の書いた、様々な人間や妖怪について記してある書物です 良  
かったらまた読んでみてください」

成程、要は人物大百科みたいな物が

「今日はありがとうございました。ほんの少しですが、これ、報酬  
です」

と言って彼女は懐から小封筒を取り出し、俺に差し出した  
そして遠慮がちにそれを受け取る 2000円も貰っちゃあねえ

「いえいえ、こちらこそお茶と和菓子まで頂いて申し訳ない」  
ちなみに昔懐かしの最中だった この餡子がまた絶妙だったんだよな



カーカー

「それではお元気で」

「じゃあな」

「はい、そちらこそ」

こうしてお屋敷を後にする俺とガリバー  
気がつけば外は夕暮れ時だった

「・・・ところでガリバー」

「ん？何だ？」

「俺達、どんな風に書かれたんだろうな・・・」

「・・・さあ、普通に書かれてあるんじゃない？」

「うーん、何か気がかりだな」

実際にその書物を読んだ事がないので分からないが、ただ一つ願う  
事がある

（あの新聞みたいに、変な事書かれてなかったらいいんだが・・・）  
阿求さんがそんな事書くとは思えないが、どうも新聞の所為で疑心  
暗鬼だ

（まあ、それはまた読ませてもらったら分かる事が・・・）  
深く考えたつてしょうがない  
早くこの偏見を取っ払いたかった

T  
O  
  
B  
E  
  
C  
O  
N  
T  
I  
N  
U  
E  
D

## 第6章 お手伝い、承りました（後書き）

今回はちよつと長めになりますた

何とか読み応えのある文章を意識していこうと思いましたが  
でもまだまだ文章の質はいまいちなのかもしれんorz

## 第7章 奪還、承りました

「ここはとある館の中にある図書館」

「ええーと、薬品から不要物を取り除く方法は・・・」

現在、私は暇なので新作の魔法薬でも作ってみようと思い、レシピ魔導書を参考にしながら机の上で配合を行っている所である

「それでなにに、砂糖と蛙の心臓をこれに投与してよく混ぜると・・・」

バコン！

ん？何かしらこの音

ビュン

ガチャンバリン！

「へー、面白そうな物読んでるじゃないか」

「ち、ちよっと！持ってかないでー」

いつの間にか読んでいた本を奪われ、その勢いで薬品の入ったフラスコが下に落ちる

どうやら壁を壊され、そこから侵入されたみたいだ・・・

全く、あの門番は一体何をやってるのよ！？

「それ読んでる途中なんだから返しなさい！」

「安心しろ、死んだら返すぜ」

そう言って今までも絶対に返してくれない

「じゃあな」

そしてそのまま再び壊れた壁の外へ飛び去っていく白黒魔法使い

どうしよう、これじゃあ薬を作ることが出来ない

取り返しに行こうにも行けないし・・・

（こうなったら・・・）

何としてもあの本だけは誰かに頼んでも取り返してもらわないと・  
・

く所変わって人里く

「はいよ、2俵で80円ね」

昨日は結構な収入が手に入ったので、食糧を買いに回っていた

「また家の米を頼むぜい！」

「あ、はい！」

これにて買い出し終了かな 俺は両手に米俵を1俵ずつ持って歩く  
ちなみにガリバーには秋刀魚が乗った皿(?)とキャベツを運んで  
もらっている こいつ結構力持ちなんだよね

「ん？」

ふと、歩いていると何やら団子屋の方が騒がしかったので、立ち止  
まって中の様子を見てみると・・・

「幽々子様食べすぎです！ここに来る前にも桜餅20個食べてたじゃないですか！」

「そんなので足りる訳ないじゃない」

「あわわお客さん！このままでは店が潰れてしまつよお！」

何やらテーブルの上に皿が山積みになっており、次々と団子を平らげている女性、その立会人らしき者、そんでもって困惑した様子のおばちゃんの姿が目に入った

しかし賑やかだな、大食い選手権でもしてるんだろうか

「ま、いつか」

邪魔すると悪そうだったのでその場を後にし、再び家に向かって歩き始めた

「よっこらせつと」

家に着き、玄関の近くに重たい米俵を置く  
いやー、結構な力仕事だった

「これはどうするんだ？」

「ああ、冷蔵庫の中に入れといてくれ」

冷蔵庫といっても今みたいな大きい電化製品のような物ではなく、上の段にでっかい氷を入れ、下の段に冷やしておきたい物を入れておくオールタイプだ

するとその時

トントン

誰かが扉をノックする音が聞こえた

「はい」

ガラスと扉を開く

するとそこには

「初めまして依頼屋様」

銀髪で左右を三つ網にさせた所謂メイドさんが立っていたのだ

「ええと、どちら様ですか？」

人里にこんな洋風な格好をした人はいない

「私、紅魔館でお仕事をしている十六夜咲夜いざやこやへと申します」

紅魔館？聞き慣れない名前の建物だな

まあそれはいいとして・・・

「実は、パチュリー様が依頼の事で貴方をお呼びなので、館まで案内しにやって参りました」

「案内い？」

どうやら依頼をお願いするのはこの人、咲夜さんではなくそのパチュリー様とやららしい

「それで、そのパチュリーさんは俺に何を頼んでいらっしゃるのですか？」

「どうやら取り返して欲しい物があるとの事なので・・・詳しい事

「はあちらで聞いてください」

ふむ、奪還依頼とな

何やらいつもとは違う展開が待ち受けていそうだ

「行くぞガリバー」

そして俺は今日も依頼の為に奔走する

咲夜さんに案内され、現在その館の前にいるわけである

「しかし赤いなー」

「設計者の性格がまんま現れてるって感じたな」

ずっと眺めていたら目がギンギラギーン！な事になりそうだ

ふと、門の近くに何かがあるのに気付き、そちらの方に目を向けてみる

するとそこには

「こ、これは一体！？」

そこにはチャイニーズな服を召した赤髪の女性が被っている帽子にナイフが突き刺さった状態で倒れているのだ  
恐らく彼女はゲートキーパーなのだろうか？

「痛いですよおお咲夜さああああん」

しかも何か言い出したよ！？怖っ！！



「これ？これは気にしないでいいですわ」

だがメイドさんは平然とした様子でそう言った

いやいや気になって仕方ないんですけど！？何があったの！？？

ガリバーに至っては恐怖のあまり硬直状態である

ともあれ気にしないでいいとの事なので、そのまま後をついていく  
事にした 誠に不本意だけど

ギィィ

館の大きな扉が開き、中に入っていく  
見ると薄暗くただっ広い空間に赤い廊下があった

しかし不気味だな 何か出そうで怖い

カッーンカッーンと、前を歩く咲夜さんのヒールの音が館内に響く  
辺りを見渡しながら引き続きその後ろをついていく

ついていく内に、またしても大きな扉の前に辿りついた

「この先がパチュリー様のいらっしゃる図書館でございます」

へー、図書館なんて物もあるのか 設備費かけまくってるなあこの館

「それでは私はこれからまだ仕事があるので、これにて失礼します」

そう言うや否や、フツツとその場から消えるメイドさん

ちよっ、テレポートでもしたのか！？一瞬でいなくなったぞ！？

（ま、まあいいか・・・）

「失礼しまーす」

ギィィィと図書館の扉を開ける

「うわ、本がいっぱいだ」

まず目に飛び込んできたのは両端にあるズラーっと前の奥の方まで配置されたどでかい本棚

その中には様々な本がズラリと並べられていた

「広いな」

本棚を眺めながら前へと歩いていく

「なあ正也」

「ん、どうした？」

するとガリバーが急にこんな事を言い出したのだ

「さっきから、誰かに見られてるような気がするんじゃないんだが・・・」

「誰かに見られてる？」

何を言い出すんだこいつは

「そりやお前、ここにパチュリーさんがいるからじゃないの？」

「いや、そうじゃなくて・・・何かこう、ありとあらゆる場所から」

一度その場に立ち止まって辺りを見渡してみる  
だが、目に見えるのは本や本棚だけだった

「つたく、何も無いじゃんか」

「でも！」

「気にし過ぎだ、もうちょっとリラックスしろ」  
全く、何でいらん心配までかけにやなんのだ

だが実を言うと俺もここに入った時、一瞬だけただたらぬ威圧感を  
感じたのだ

だが、その正体は分からない

（気のせい気のせい）

そんな物に気をとられていては自分を見失ってしまう だから特に  
気にしない事にした

「お、あれかな？」

「（ボソツ）何か暗そうな奴だな」

しばらく歩くと、前方にパチュリーさんと思しき人物が椅子に腰か  
けて本を読んでいるのが見えた

何やらネグリジェを召して紫の髪をビビンバの具材のように両端に  
結んで垂らしている

その傍には読み終えたらしき何冊もの本が積まれていた

「どうも依頼屋です、パチュリーさんでしたよね？」

とりあえず近寄って声をかけてみる

「・・・よく来たわね、思ったより早かったじゃない」

本から目を離すことなくやや早口で喋る彼女

うーん、気難しそうな人だなあ・・・

「それで、依頼というのは？」

「せっかく読んでいた魔導書を魔理沙に盗られてしまっただけ、それを取り返しに行つてほしいの。青くて分厚いやつよ」

魔理沙って確か森で会つたあの白黒の事だよな？

「でもその本の行方が分からなければ何とも・・・」

「あの子は基本的に盗んだ物は一先ず自分の家に置いておくらしいわ」

「その家というのはどこに？」

「魔法の森、私も外に出たことないから分からないけどその森のどこにあるらしいわ」

魔法の森か、迷わなければいいのだが・・・

というか何故外に出た事がないんだろか？

何やら訳ありみたいなのでそれについては触れない事にした

「じ、じゃあ承りました。行つてきます」

俺はその場を後にしようとする

「ちょっと待ちなさい」

すると突然本から目を離し、俺の方を向いて止める彼女

「な、何でしょう？」

何か言い忘れた事でもあるのだろうか？

「レミイから聞いたんだけど、貴方、何やら不思議な力を持っているみたいね」

もうそんな所まで広まっちゃってる感じですかい

てかレミイって誰ぞ？

「ええと、不思議というか、ただ弾幕やら能力やら妖力やらを打ち

消せるだけっすよ」

「打ち消す？」

まずい、何やらおかしいスイッチが入ったみたいだ

「その力、是非とも調べてみたい物ね」

そう言っているとパチュリーさんの読んでる本が何やらパラパラと音をたててページがめくれていく

「金符『シルバードラゴン』！」

そう叫ぶとページがめくれる音が止み、ピカーンとその本の内側が光り出す

その直後

キシエエアアアアア！！

雄叫びと共にその中から白く透明で稲妻のような龍が飛び出してきたのだ

そしてその龍は俺の方を睨み、そのまま俺の方に突っ込んでいく

「う、うわああああ！！！」

俺はすかさずその龍に右手を突き出す

パキン！

その手に触れた瞬間、恒例の効果音と共にその龍は消滅した

「な、なんだあれ！リアル過ぎるだろ！！！」

「こ、怖かったー」

上からガリバー、俺の順に言う

この人は皆調べる為なら容赦ないったらありやしない

「なかなか調べがいのある力じゃない」

「そ、それはどうも」

あのー、もうそろそろ出発していいですか？

「じ、じゃあ俺は本を取り戻しに行ってきますね!」

「それもそうね、行つてらっしゃい」

そそくさとその場を後にした

「それにしても、魔法の森つてどこにあるんだ？」

現在ここは紅魔館の外である

門番は未だナイフを刺して突っ伏している　生きてるのかな？

「咲夜さああん、もう食べられませんかよおお」

何か幸せそうな夢を見てるみたいだ　一応生きてはいるのかな？

「ああ、それなら確かここからそう遠くない場所にあつたはずだ」

「へー、行つた事あるのか？」

「まあちよつとな」

それなら話が早い　案内してもらおう

「いやー、空気がおいしいね」

ガリバーに案内され、歩いている内にいつの間にやらその森に突入してみたんだ

見た感じは普通の森だが、草にまぎれて何やら毒々しい色をしたキノコが生えてたりする

そしてようやく気付いた事が一点

「うん、迷っちゃった」

「早っ!!」

もうここがどこだか分からない

どうやら知らず知らずの内に奥へと入り込んでいたようだ

「どうすんだよ正也!? これじゃあ依頼を達成するどころか帰る事すら出来ないぞ!??」

「困ったな、誰かこのあたりに住んでない物かね?」

誰か人がいないか探すかと思い、辺りをキョロキョロする

「人間がこんな所をうろついて一体何をやってるの?」

すると背後上空から天の声がかかる

見てみるとそこには金髪で人形を傍らに連れている少女が浮いていた

「いやゝ、恥ずかしい話迷ってしまいました」

内心では人に会えた事にグッジョブしてる訳である

「意味もなく自ら森に探検しにいくからじゃない」

ヤレヤレとため息をつく彼女

「いや、ちょっと依頼を頼まれてまして、これから魔理沙の家に向かう途中なんです」

この辺の地位には詳しくないんだから仕方ない

「あら、よく見たら貴方、今噂になってる依頼屋の人間じゃない」

「あ、はい 岡野正也といいます。貴方は？」

現在進行形で噂されてるのね

「アリス・マーガトロイドよ」

アリス何とかさんね 後半よく聞き取れなかった

「それで、魔理沙の家に案内していただけますか？」

「ええ、構わないわ」

俺は今日何回道案内してもらえば気が済むのだろうか・・・

「ここよ」

アリスさんが指さした所には、小さな一軒家があった

扉の上には何故か‘霧雨魔法店’と書かれた木製のプレートが掛けられている

一体何の店なんだろうか？

「それで、ここから紅魔館に戻る時はどう行けばいいんですか？」

「ええ、それなら」

く只今少女説明中く

「色々ありがとうございました」

「ええ、じゃあ私はもう行くわ」

「あ、はい それでは」

そしてどこかに飛んでいく彼女 親切な人もいるもんだな・・・



「魔理沙ー、いるかー？」

コンコンとノックしてみるが、一向に返事がない

「留守なのかな？」

見た感じ彼女はアウトドアっぽいし、いない事の方が多いのかもしれない

「もう入っちゃえよ」

「いいのかよ？」

「どうせそいつも泥棒なんだし、盗まれた物を取り返しに来ただけなんだから構わないさ」

まあ確かにそうだけど・・・

それなら侵入しようと思い、扉に手をあてる  
そしてその手を右に引いた

ガラッ

普通に入れるなこれ

「鍵かけないなんて無用心だな」  
靴を脱ぎ、いざ、家の中へ

「うわー、ごちゃごちゃしてるな」

中は研究所みたいになっており、棚には瓶詰めされたキノコや薬品の入ったフラスコやらが並んでいた

さらに本棚もあり、何冊もの手書きの本が並んでいた

さらには少し大きめの机に椅子があり、机の上には何枚ものメモ書きが置かれてあったり、筆記用具なんかが散らばったりしていた

「流石は魔法使いだ・・・」

「泥棒が勉強してる姿ってなんかシユールだな」

外ではおちゃらけてるようにしか見えないが、影ではしっかり努力してたんだな

俺なんぞ宿題すら碌にしないというのに

「おや？」

ふと、机の上に一冊だけ明らかにお手製ではない青い本も置かれてある事に気付いた

「もしかして、これかな？」

青い本って言うてたし、見た目といい厚さといい図書館で見た本に似ているのだ

よく見ると下の方に手書きで「紅魔館」と書かれている

「目的のブツも見つけたし、とつとずらからないか？」

「ああ、それもそうだな」

あとはこれをパチュリーさんに返しに行くだけだ

そして現在、アリスさんに言われた道順で再び森の中を歩いている

「へー、魔法薬調合の書ねえ」

道中暇なので奪還した本を読みながら歩いているわけである

読みながら歩くのは危ないって？別にここ幻想郷なんだしそんなの気にしない気にしない

「さっぱり理解出来んな」

ガリバーも肩から顔を覗かせてページを見ている

「でも、薬の調合ってそんなに面白い物なのかな？」

「ああ、面白いぜ」

「具体的にはどういう所が？」

「そうだな、新しい魔法を産み出したり、思わぬ発見があったりする お前も是非一度やってみたらどうだ？」

「ふーん、また気が向いたら試してみるか……ってうわああ！??？」

自然過ぎて全く気がつかなかった

見るといつの間にか白黒魔法使いが俺の隣を歩くスピードで飛んで並んでいたのだ

「いいいいつからそこに？」

「さっきから居たぜ」

「いやいやさっきからっておい

「ところでそれ、私が盗……じゃなくて借りてきた本だよな？」

返す気はゼロなのね よく分かったよ

「ああ、ちよいとパチュリーさんに取り返しに行くよう頼まれてい

てな、魔理沙の家から奪還させてもらったぞ」

「なっ!？」

するとさっきまでの気楽な表情から一変し、何やらワナワナと震え始めた

「お前、何勝手に私の家に入り込んでんだ!？」

「いや、だからお前が盗んだ本を取り返しにだな」

「そうじゃない!!」

ちよ、そんな大きな声だして急にどうしたんだ!？」

「絶対誰にも言うなよ!？あそこで見た物は全て忘れろよな!!」  
成程、どうやら自分が影で努力している事は誰にも知られたくなかつたらしい

そりや俺だつて他人に無闇やたらと自分の私生活を覗かれたくはない  
ちよつと悪い事したかな・・・

「ああそれなら安心しろ、特に気にしてないし誰にも言わない」

「本当か？」

「ああ、本当だ」

すると安心したのか、ホッと一息ついていつもの様子に戻る彼女

「という訳でその本は返してもらっぜ」

「いやいや何さも当然の事のように所有権獲得しようとしてるんだよ!？」

何が何でも自分の物だと主張する気らしい

とりあえず逃げようと思い、一気にその場からダッシュした

「おい、逃げるなよ」

駄目だ、しっかり箒にライディングして飛んで来ている

「悪いが意地でも返してもらう 魔符『スターダストレヴァリエ』」  
「！」

そう叫ぶや否や、いくつもの星屑弾が飛んでくる

「う、うわわわわ！？」

立ち止まって防いでる暇もないので走りつつ飛び飛びにそれらをか  
わしていく

「正也危ない！」

ガリバーの叫び声で振り向いてみると一つの星屑弾が俺の真後ろ目  
かけて飛んできているのが見えた

「くっ！」

たまらず右手を突き出し、それを打ち消す

「まだまだ休ませないぜ 恋符『マスタースパーク』！」

すると今度はズゴゴゴゴ！と極太のレーザーが俺目がけて飛んで来た  
孫〇空じゃないんだからそんなモンぶっ放すなよ！？

避ける暇もなさそうなのでもう一度右手でを突き出す

パキン！という音と共にそれは消滅する

「へー、なかなか面白い力を持つてるじゃないか」

これには彼女も驚いたのか、以外だという表情をしている

「正也、これでは埒があかない ここは俺に任せろ」

すると突然ガリバーがそんな事を言い出し、前へと出る

「あ、ああ 何か知らんが任せた」  
「一体何をする気だろうか？」

「そーいえばよお」

「何なのぜ？」

そして一息つく

「お前のそのスカートの下、ドロワーズなんだな」  
はい何か言い出したよこのげっ歯類  
そんな根拠もない事言っただ揺するわけが・・・

「っ!!」

「つておーい魔理沙さん？何やら顔赤いですよー？」

「今だからえ！」

魔理沙が動揺してる隙について何かを放つガリバー  
すると刹那、彼女の周りが煙に包まれる  
成程、煙幕か

「女つてのはああいう事言っただりゃあすぐああやっただ揺する生き物さ 今の内に逃げるぞ」

「お前最低だな・・・」

ガリバーに促され、自分もその場から再び走り出す

「いやゝようやく辿り着いた」

そして現在ここは紅魔館の前

あの後ひたすら走っている内に見失ったのか、彼女はもう追ってこなかった

「そういえばガリバー」

「なんだ？」

「何でドロワーズ穿いてるなんて分かったんだ？」

小さい体を利用してスカートの下から覗き見たのだろうか？

「実はあいつの家の散らかっている部屋にそれも紛れて落ちていてな 全く、物の管理がなっていないとしか言いようがない」

落ちてたのかよ！？

てかそれを目敏く見つけるこいつもどうかと思うが・・・

「普段から餌を見つける訓練をしていたんだ そういうのも嫌でも目につく」

「お前なあ・・・」

いくら何でもあれは無いだろうと思う

でも戦わずして状況を打破しようという考えがあつたのかもね  
何だかんだでこいつは無意味な争いを好まない奴なんだな

「あつ、御苦労様です！」

突然そんな事を言われたので見てみると倒れていた門番が復活していたのだ

「いえいえそちらこそ」

しかし何故頭にナイフが刺さっていたのかは謎である  
気にしてもしょうがないのでそのまま門をぐり抜け、入り口へと入っていく

「はい、取り返しにきました」

「あら御苦労様」

無事本をパチユリーさんに返却し、依頼達成である

ちなみに報酬金はどこからともなく現れた咲夜さんから受け取った  
そして彼女は再び俺を人里まで案内してくれるとの事だ

「じ、じゃあ俺はこれにて・・・」

「ちよつと待ちなさい！」

い、一体何なんだ？

「ちよつと貴方実け・・・じゃなくて貴方の力についてもっと調べ  
させて」

今実験台って言おうとしたよな！？そんなの断固お断りだからな！  
??

「パチユリー様、お気の毒ですがこの方はまだ仕事があるのでござ  
います ですのでそれは・・・」

すると咲夜さんが助け舟を出してくれた

仕事といっても今日はもうそんなにハードな事するつもりはないけ  
どね・・・

「仕方ないわね、また今度来なさい」

行きたくありませんという本音は心の中に留めておいた

そして俺は再び先を歩く咲夜さんについて歩き始めたのだった



くそして正也がこの館から出て行った後の図書館く

館内には再び静寂が訪れる

だがその直後・・・

バサバサバサバサバサバサバサバサバサバサバサバサ

天井の隅っこや本棚の影などに隠れていた何十匹もの黒くて目の赤い蝙蝠が一斉に飛び立つ

そしてその蝙蝠達は本を読んでいる少女の傍へと集まり始めた

全ての蝙蝠が一か所に集結し、やがてそれらは人影を形成していく

そしてついにその蝙蝠達の‘正体’が姿を現したのだ

「あらレミイ、居たの？」

「あの噂の依頼屋が来るって言うからどんな奴か拝見させてもらっただけ、中々面白そうな人間じゃない」

見た目こそは幼いがどこか気品溢れるその悪魔はニヤリと微笑む

「私もあんなの初めて見たわね、シルバードラゴンをいとも容易く打ち消すなんて」

どうやら魔女の観点から見ても少年のその力は珍しい物らしい

「ふーん、なら時期が来たらあの少年に、あれ、でもやらせてみようかしら」

「レミイ、流石にそれは危険なんじゃあ・・・」

「なあに、どこまで出来るか知ってみただけよ」

その後、薄暗い図書館の中で魔女と悪魔の会話はしばらく続いた

当の本人は、館の悪魔に目を付けられたなど、知る余地も無かった。  
・

T O B E C O N T I N U E D

## 第7章 奪還、承りました（後書き）

良い子の皆は不法侵入なんてしちや駄目だからな！  
by正也

## 行間 2

「ちょっと！どこへ行くの！」

もう、こんな所耐えられない

外は危険がいっぱいだから友達と遊んじゃ駄目とか、習いたくもないピアノを無理やり習わされたりとか

もう、うんざりだよ

僕は走った

ただひたすらに、どこに向かう事もなく

普通の子供らしく育ててくれないあの家にだけはもう戻るまいと

出来れば自由気ままに生きられる所に行きたかった

気がつくと僕は、裏路地に座り込んでいた

涙でいっぱいだった

何で、自分はある環境で生まれ育ったのだろう……

その時

「もう二度とあんな所には戻りたくないって感じね」

誰かの声が聞こえた

「あ、あなた・・・は？」

「ふふふ、お姉さんって呼んでもらって構わないわ」

何故だろう、その人、何か普通の人とは違うオーラを纏っていた

## 第8章 山菜ツアー、承りました

チュンチュンチチチチチ

自分にとつてはどうでもいい朝

朝っぱらからラジオ体操とかしているオッサンの気がしれないね

そんなこんなで只今朝飯を食べている訳である

「えーとなになにに、『昨日、言わずと知れた白玉楼のフードファイター、西行寺幽々子氏が人里の団子屋を訪れ、何十皿もの団子を平らげ、材料が底を尽きた所で代金を払ってようやく帰っていった模様。その際お付添していた魂魄妖夢氏は、『多大なご迷惑をお掛けして申し訳ありません』と団子屋店主に謝罪。妖夢氏は今後もこの御大に振り回される事となりそうである』か・・・」

俺はついさつき飛んで来た新聞を両手で広げて読んでいた  
世の中色んな人がいるんだなあ

でも当分団子は食べそうにないな、昨日帰ってから団子屋に行ってみると『しばらくの間営業を停止します』って張り紙してあったし

「なんかそいつ化け物だな・・・」

俺が読んでのを聞いたガリバーが白飯を頼張りながら言う

「人間を食べる妖怪がいるぐらいなんだし、ビッグイーターの一人や二人、居てもおかしくないんじゃない？」

俺はもうすっかりこの手の類の物に慣れてきた 別に慣れたくは

なかったが・・・

「ごちそうさま」

朝食を食べ終え、食器を片づける

その間にガリバーは何か依頼はないか掲示板を見に行った  
やっぱり家事っていうのも毎日続くと大変だね

「正也、こんなのが来てるぞ」

するとガリバーが1枚の依頼書を持ってきた

「ああ、今そっちに行く」

居間に戻り、座布団に座ってその依頼内容を読む

依頼主：食堂のおばちゃん

依頼名：山菜集め

危険度：D

依頼内容：最近足を痛めてしまってこの近くの山に山菜を採りに行けなくなってしまうてねえ

悪いんだがお前さん代わりに採ってきてくれるかえ？

報酬：40円

「ふむふむ」

俺もたまにあの食堂に食べに行く時はあるが、そこで働いてるおば

ちゃんときたらもう歳が歳だもんね  
無茶はよくないって事かな

「よし、行くぞ」

そんじゃちよっくらおばちゃんを助けに行くとするか

「食堂にて」

「おばちゃん、依頼受けに来たよ」

「まあお前さん、来てくれたのねえ」

カウンターテーブルから顔を覗かせて見てみると、おばちゃんは食器云々を洗っている所だった

「それで、採ってきてほしい物っていうのは？」

「そうだねえ、舞茸まいたけと蕨わらびとイタドリをいくつか採ってきてちょうだい 歩いてたらずすぐ見つけれれると思うから」

てか天然の舞茸って幻のキノコって言われるほど貴重じゃなかったっけ？

それがこの世界では普通に生えているのか・・・

俺の知る限り舞茸に良く似た毒キノコはそうそう無かったと思うのでそれに関しては大丈夫だろう



「そこにカゴとカマがあるからそれを持って行ってちょうだい」

「分かりました、じゃあ行ってきます」

「気を付けて行ってくるんだよお」

こうして俺は人里近くの山へと向かった

「お、これかな」

現在ここは山の中

ようやく木に生えている舞茸を見つけた

本物がどうか確かめる為、一先ず傘を切って断面を調べてみる

「よしよし、異常なしだ」

しかし天然の舞茸なんて物が普通に採れるなんて、やっぱり世界が違うね

俺はカマを使ってそれらを1個1個注意深く根元から採っていく  
そして採った物を傍に置いてあるランドセルみたいに背負えるカゴ  
へと入れていく

しかしここはなかなか空気がおいしいね

俺の住んでる所なんざ廃棄ガスやら何やらでうんざりだよ

「おい正也、採ってきたぞー」  
そうこうしているとガリバーがイタドリを何本か持って飛んできたのだ

一人じゃ大変なのでガリバーにも山菜探しを手伝ってもらっている

「ああ、そこに入れといて」

「ほれよ、んじゃあもっぺん探してくるからな」

そう言って再び向こうの方へと飛んでいく

「ふう、だいたいこんな物かな」

全ての舞茸を採取し終え、一息つく

ずっとしゃがんでたから背中と足が痛い

いやーそれにしてもこれだけ空気が澄んでいる山なんだし、ちよっくら「ヤッホー」って叫んでみたい物だね  
気分もいいし、やってみるか

「ヤッホー!!!」

俺の叫びは山の中を何度かエコーする

ううん、いい響きだ

ヤッホー

ん？今なんか後ろからもエコーしてきたような気が・・・  
よし、もう一度・・・

「ヤッファー!!」  
再びエコーする

ヤッファー！

あれ？また後ろからも？  
しかも何か大きくなってきたくないか？

よし、もう一度

「おはよーございますーす！」  
またしてもエコーしていく  
こんなところで挨拶しても何の意味もないだろうに  
すると・・・

「おはよーございますー!!」  
「っ!!」

かなり甲高い声が俺の真後ろから聞こえ、その声が再びエコーする  
俺はあまりのうるさに両指で耳を塞いだ  
明らかに俺の声ではなかった

とうとう振り返ってその声の正体を確かめてみると・・・

「おはよーございます!」

そこには青緑っぽい髪の毛に茶色い犬耳のような物をつけた少女が浮遊していた

山にもしっかり妖怪はいるんだなー

「お、おはよーございます・・・」  
とりあえず挨拶を試みる

「声が小さい!もつと元気よく!」  
すると声が小さかったのが気に入らなかったのか、やり直しを求められた

「お、おはよーございます!」

「もつともつと!」

「おはよーございます!」

「もつともつと!」

「だーっ!うるさい!」

ついに我慢出来なくなり、思わず反発する

「元気なのはいい事だが限度って物があるんだよ!」

はあ、何故俺はこんな所でうるさい奴に会ってしまっただろうね  
まだ昼にもなっていない時に

「へへへ、山彦の私に向かって『うるさい!』なんて言うのね  
いい度胸してるわ」

ん?どうしたんだろう  
何か目つき変わったぞ

「私の存在を否定されて黙ってる訳にはいかないわね」  
すると彼女は犬耳らしき物をピコピコさせながら臨戦態勢をとる

え？山彦に対して「うるさい」はNGワードだったの？  
というか何で俺喧嘩売っちゃった事になってるの？

「ちょっと！俺山彦の事とか何も知らなかったんだし勘弁し・・・」  
「そんな人間はここにくたばってしまえ！」

しかしそんな願いも虚しく消え、何個もの弾幕が四方八方にばらまかれた

全く、何で妖怪ってこう人の話を聞かないんだろうね

てゆうかこの弾幕、全然俺の方に飛んでこないんじゃないか？  
そんな誰もいない所に打ったって何も意味は・・・

「ヤッホー！」

するとその直後、山彦は何やら声をあげた

その時

キキキーン！

突如、適当にばらまかれたと思っていた弾幕の1個1個が見えない  
何かに反射し、向きを変えて俺の方へと襲いかかる

「ぬおっ！？」

サイドステップで1つ1つそれらを交わしていく

パキン！

避けきれない物は右手で打ち消す

「はっ、そんなチマチマした弾幕じゃあ俺はくたばらないぜ！」

どうやら彼女には何らかの力で弾を反射させる事が出来るようだが、  
落ち着いて見極めれば怖い物でもない

「その余裕が続く事を願うよ、響符『パワーレゾナンス』！」

そう叫ぶと彼女はいくつもの弾幕を前に向けて放つ

だが、その直後

キキキキキキキン

「！？」

放たれた弾はそのまま俺の方に飛んでくるのではなく、まるで見えない箱に閉じ込められているかのように何度も反射しあう

「ヤッホー！」

再び山彦が声をあげたその時だった

ボン！

「！？」

突如、反射していた弾が大きいラグビーボールのような形になり、  
それらが一斉に襲いかかる！

「うわっ！」

あまりに予想外な光景を目の当たりにし、体が恐怖を覚え、その場で立ち止まる事を拒んだ

「とう！」

俺は全力で横に駆け、思いつきり飛んで緊急回避する

ドサッ

「いてて・・・」

着地など考えていなかった為、派手に転び、泥まみれとなった  
頭では冷静になれと唱えているが、やはり未知の恐怖には抗えない  
これが初見殺しというやつか・・・

ドドドドーン！

直後、俺がついさっきまで立っていた近くにそれらは着弾する  
音でかいのは何とかならないのかね

すぐに立ち上がり、パンパンと服を払う

「俺が悪かったから！まさか君が山彦だなんて知らなかったんだ！  
頼むからもう勘弁してくれ！」

駄目もとで謝罪を試みる

とにかく1秒でも早くこの戦いを終わらせかけた

「君が叫ぶから私もそれに応えてあげたっていうのに、逆ギレされ  
て許せると思ってるの？」

「うんそう思ってた時期がついさっきまであった」

「なら仕方ないね、尚更くたばってもらうよ」

くっ、1度ヘソを曲げたらなかなか戻らない妖怪みたいだ・・・

せめて、何かしらの攻撃手段があれば対抗出来るんだが・・・

その時

「獣符『ワイルドショットニードル』!」

またしても後ろから声が聞こえ、その直後、何十本もの針型弾幕が山彦目がけて飛んで来た!

「きゃっ!」

彼女は小さい悲鳴をあげ、慌ててそれらを避ける

「大丈夫か正也!?!」

「ガリバー!」

見るとそこには赤いオーラを纏って針を逆立たせたガリバーがいたのだ

「何か物騒な音が聞こえたんでな、急いで駆けつけてきたのさ」  
相棒というのは何とも頼もしいね

「おいそこの犬耳!人間ばっか食おうとしてないで少しは魚でも食べてカルシウム摂れ!」

威嚇の構えをとり、山彦に向かって言い放つガリバー

「違うよ違うよ!そいつが私に対してうるさいとか言ってきたんだよ!」

すると彼女は俺に指さして抗議をする

「・・・はあ?」

予想外の返答にヤマアラシは拍子抜けしたようだ

「そんなしょーもない事で人間相手に弾幕勝負仕掛けるなんざ、妖



怪としての品格が疑われるね」

「しょーもたくない！山彦の私にとっては死活問題だよ！」

「どうせこいつはお前の事知らなかったんだろ？それにうるさいっていうのはある意味正論だな」

「君までそんな事言うの！？」

ぎゃーぎゃーと叫ぶ山彦と冷静に受け応えするげっ歯類とのやり取りを俺は傍から見ていた

あの子は何となく弄られそうな子だなあ・・・最も俺は弄る間もなく弾幕をたたき込まれたけど

「そんなに気に食わないなら今から俺とゲームをしないか？」

するとガリバーが急にそんな事を言い出した

「ゲーム？」

「ああ、お前の誇りをかけたゲームだ」

そして一息おく

「これから俺が叫ぶ事を全て真似して叫ぶ事が出来たらお前の勝ちで好きにしてい、その代わり出来なかったら文句一つ言わずここから立ち去ってもらう」

「何でそんな事しなくちゃ」

「や・ま・び・こ、なんだろ？」

こいつ、山彦というプライドを利用した買収作戦に出たか

「むむ、出来るよ！受けてたつよ！その代わり私が勝ったら有無を言わずその人間を倒させてもらうよ！加勢も禁止！」

「ああ、構わないぜ」

乗ってきたのはいいが大丈夫だろうか？

「じゃあ行くぞ」

「何でも叫んでみなさい！」  
こうしてゲームが始まった

「その人間ー！」

ガリバーが俺の方を向き、叫ぶ

「その人間ー！」

山彦もそれにならって俺の方に叫ぶ

「君の事だーい好き！」

おいおい、こりやまた大胆な事言い出したな

「っ！！」

すると彼女は顔を赤くし、何やら口ごもっていた

「どうした？さっさと叫んだらどうだ？」

しめたという顔で挑発するガリバー

これはもう勝負がついたんじゃないか？

「山彦なんだろう？これぐらい叫べなくてどうするんだ？」

更に挑発はエスカレートする

「うぐぐっ！！」

ついには沸騰直前のような顔になる彼女

そらいくら山彦といえどこんな恥ずかしい事叫べないよね

「き、今日は貴方の勝ちでいいわよ！覚えてなさい！」

そう叫び、ぷいとどこかに飛んでいった ガリバーの圧勝である

「女つてのは素直じゃない生き物だ　ちよつと羞恥心をいじくるだけですぐあぁやって真っ赤になる」

「お前本当最低だな・・・」

全く、こいつは俺に会うまでどういう生き方してきたんだ

「それよりどつさりと集めてきたからカゴの中に入れておいたぞ」

「ああ、ありがとな」

幸い、カゴは無事だったようだ

「そんじゃそろそろ戻るか」

教訓、山の中では無闇やたらと叫ばない

俺はそれを身を持って心得たのだった

「所変わって食堂」

「おばちゃん、山菜取ってきたよ」

「まあ御苦労さま、ほれ、お駄賃だよ」

カゴを厨房に運び、おばちゃんから40円を受け取る

「なんか腹減ったな」

するとガリバーがそんな事を言い出し、腹をグルグル鳴らせている

「そついやもうお昼時だっけ」

なんかもう今から飯作るのも疲れるな

「おばちゃん、いつものセットを頼むよ」

「あいよ、座って待ってなさい」

せつかくだしここで食べていくか

カウンターの椅子に腰かけ、料理を待つ

と、その時

ガラッ

「いやあ、腹減った腹減った」

一人の男が入り口の扉を開け、中に入ってきた

「ばーちゃん、いつものやつ頼んだよー」

「腰かけて待ってておくれよお」

オーダーをし、俺の隣に座る

・・・ていうかこの声、どこかで聞いた事あるような気が

「おお！誰かと思ったらオカチンじゃないか！」

急にその男が俺に向かって話しかけてきたのだ

俺は即座に男の顔を見る

「お、お前は！」

もう間違いない、俺の呼び名といい声といい顔といいこいつは・・・

「大林っ!!」

そこにはかつての戦友の姿があつたのだ

「何だ正也、こいつと知り合いか？」

「ああ、間違いなく俺の友人だ」

黒いサングラスに坊主頭と、EXI〇Eのあの人を思い出させるような格好、尚且つこのおちゃらけた感じは向こうにいた時と何ら変わらなかった

「お前いつからこつちに来たんだ!？」

「つい4日前ぐらいに」

つい最近じゃないか、全く知らなかった

「お前が急にいなくなつて不審に思つてな、探し回っていたらいきなり女の人に出くわして、『幻想郷にいる』って言うモンだから連れて来てもらったのさ いやあ、まさかこんな所でバツタリ出会うなんてな」

女の人というのは恐らく紫さんの事だろう

あの人もよう連れてくるねえ・・・

「後で聞いた話なんだがオカチン、依頼屋を経営してるらしいじゃないか」

「ああ、ここで生きてく為に必要な資金は稼がないといけないからな」

たまに面倒だと思ふ時もあるけどね

「それで大林、今どこに住んでるんだ？」

「ああ、ちょうどこの食堂の向こう側で情報屋を営みつつ暮らしてるぜよ」

「へー、情報屋なんてやってるのか」

こいつは行動力が優れているからな、ぴったりの職だと思う

「それでなオカチン」

「なんだ？」

「聞いた話によれば今夜、博麗神社で宴会をやるとの事だ」

「宴会い？」

まさかそんなイベントが行われていたなんてな・・・

「再開の記念に、そこで一緒に1杯やってかないか？」

ふむ、たまにはそういう息抜きも必要かな

「分かった、じゃあ今夜食堂の前に集合な」

「おう、そうこなくっちゃ！」

果たして大林と宴会に行く約束を交わした訳である

よーし、今夜は飲むぞー！！

T O B E C O N T I N U E D

## 第8章 山菜ツアー、承りました（後書き）

正也の友人登場！

次回、二人＋動物1匹は宴会に行く事になり・・・

## 第9章 飲ま飲まYEAR!

夜なのか―

俺と大林は食堂の前で合流し、博麗神社へと向かった

神社に辿り着くと既にワイワイガヤガヤと賑やかになっており、神社の中はどうかやら満席のようだったので仕方なく用意されてあった藁の敷物を2枚借り、地べたに敷いて席を取った  
といっても外も割と賑わっており、十分宴会気分は満喫出来そうである

ちなみに宴会の参加費用は無料だとの事、これは嬉しいね

という訳で大林とガリバーをそこに待機させ、俺は神社の中へと食べ物を取りに行った訳だが・・・

「貴方、今度こそ私と勝負しなさい」

「前の決着、ここで付けさせてもらうぜ」

「あ、あのなあ・・・」

現在、賽銭箱の前あたりで紅白と白黒に絡まれ、頭を悩ましていた

「こんな人の多い所で勝負なんか出来る訳ないだろ」

「出来るわよ、上空で」

「出来ねえよ飛べないから!」

全く、俺はあんたらみたいないハイスペック人間じゃないんだっての



「あんな恥かかせて尚逃げようなんて考えるんじゃないぜ、きつちり白黒つけさせてもらおう」

「恥って・・・あれはガリバーがやった事だろう!？」

「ちゃんと面倒見てないからだろ？」

「あいつはもともとああいう奴なんだよ!」

文句ならあそこにいるげっ齒類に言ってほしいね

「いいからやるわよ」

「私が先だぜ」

「おお落ち着け二人とも!」

何が何でも勝負しなきゃ気が済まないらしい

こうなったら・・・

「ガリバー! 例のあれ持ってこい」

俺は待機しているガリバーにそう言い放つ

「ほれよ」

するとガリバーは1本の酒瓶を持って俺の方にやって来た

その酒瓶を受け取り・・・

「せ、せつかくの宴会なんだし、家から持ってきた自慢の一品でも飲むか? 勝負ならその後でしてやるから」

ここで俺はこのヤマアラシお得意の買収作戦を執行する

「それもそうね」

「気がきくぜ」

すると二人は何の疑いもなく奥からグラスを取りに行き、戻ってき

て注がれるのをスタンバイした

「そうこなくっちゃ」

俺は二人のグラスにその酒を注ぐ

「正也は飲まないのか？」

「いや、後でじっくり味わうとする」

正直俺は「これ」を飲む勇気がない

それは何故だと思っ？

「「かんぱーい」」

カチャンと音をたてて乾杯し、中の酒を口にくいっと入れるお二人さん

刹那・・・

バタッ

一気に顔が赤くなり、その場に倒れる巫女と魔法使い

「くくく・・・」

実はこの酒、こないだ酒屋のおっちゃんに貰い、家からガリバーに持ってこさせたアルコール度数を人間が許容できる限界ギリギリまで引き立てたおっちゃん自慢の一品である

大人推奨なので未成年は一口飲めばすぐに回ってくるらしいとの事

その名も「新月」

「こによ私が一口でだうんするにやんてえ」

「宴会はばわーだじええ」

呂津が回らなくなり、完全にばたんきゅーな霊夢と魔理沙  
これではらくは難を逃れそうだ

「・・・すごい破壊力だな」

「ははは、飲まなくて正解だった」

自由に酒が飲める世界と言ったかて、俺の年齢でこの酒のアルコール  
ルの高さに耐えられるかどうか不安だったのさ

さて、食べ物でも取りにいくかな・・・

「おお、いい物持つてるねー少年」

するとその時、横から声と共に誰かがやって来た

「どれ、ちょっと私にも飲ませてみな」

そう言いながら俺の手から酒瓶を奪い取ったのは何やら二本の角を  
生やしてベロンベロンに酔った少女だった

宴会とかに行ったら絶対一人はいるんだよなーこういう飲兵衛が

すると彼女は瓶ごと豪快に口の中へ酒を流し込む

「かあーっ、これはたまらない！」

なっ！？あの酒を一気だと！？？

恐らく彼女は妖怪だろうか

「お前さんもほら、ぐいっつと行きな」

そう言つて突然ガシツと顎を掴まれ、酒瓶を俺の口の方に傾けよう  
としている

ちよっ、いつぞやの金髪の子より力強いんですけど！？

てか承諾も無しにいきなり飲まそうとするな！

「は、放せ！」

俺はたまらず右手で顎を掴んでいる手を持ち、思いつき引き離れた  
すると彼女は「おっと」とバランスを崩し、その手を離れた  
ふう、この酒を飲まされていたら今頃自分もたんきゅーしていた  
所だった

「おお、あんた力強いんだねえ、姉さん気に入ったよ！」

「い、いやそんな事は・・・」

「謙遜しなくてもほら、飲みな飲みな」

「ち、ちよつ、うわああ！」

何だか知らないが厄介なのに気に入られたみたいだ  
そんでもって再び新月を飲ませようと迫ってくる

と、そこに・・・

「いいねいいね、ちよつとその酒僕にも飲ませてくれるかい？」

今度はハンチングを被り、伊達眼鏡をかけた男性がやって来たのだ

この人は酒屋の常連客らしく、酒が大好きであらゆる飲み会にも積  
極的に参加している事で有名な人だ

この宴会とて例外ではない

前に俺が酒屋に行った時にこの人がカウンターに座って飲んでいる  
所を見た事があるが、その際酒屋のおっちゃんに向かって「もうい  
い、酒樽ごと寄越せ」などというとてもない注文オーダーをしていたほど  
の強者である

「おお！おっちゃんあの噂の飲兵衛じゃないか！ほれほれ飲んじゃ  
って」

「それじゃあ頂くよ」

すると男性は角少女から酒瓶を受け取り、持参していたグラスにそれを注ぐ

そしてゴクゴクと飲み、ぷっはあーと一息つく

「これはなかなかアルコールの効いたいい酒だね」

「だろう？人間が作る酒もまだまだ捨てた物じゃないねえ」

どうやらなかなか好評のようで・・・

「そうだおっちゃん、恒例の飲み比べしないかえ？」

「お、いいね。一度鬼とやってみたかったんだよね」

彼女鬼だったのか、道理で力強いし酒に強い訳だ

どうやら彼女の興味は完全に飲み比べの方にいったらしく、俺は解放され、おっちゃんと張り合い始めたのだった

「さて、気を取り直して・・・」

俺は今度こそ中へと食べ物を取りに行った

「遅かったじゃないかオカチン」

「ああ、悪い悪い」

俺は大きめのトレイから揚げやら枝豆やら白飯やら何やらを乗せて大林の元へと戻ってきた

「さて、乾杯しようか」

そして履物を脱いで敷物の上に座り、「かんぱい」と言つてカチヤンと音をたてる俺と大林

ちなみにこれは先程の悪魔酒ではなく、中から持つてきた普通の酒である

ちなみにガリバーは酒が飲めないとの事なので我先から揚げを頬張っている

「いやゝ人目を気にせず堂々と飲めるなんて最高だねえ」

「本当、何もかも解き放たれた感じた」

向こうの世界では正月やらお盆やらでおよばれしに行く度に酒を飲みたいというフラストレーションに悩まされた物だ

それをようやく発散出来る時が来るとは・・・

え？20まで我慢しろだって？せつかちな俺には到底無理な話さ

「オカチン、仕事の方は順調か？」

「まあね、酒の配達頼まれたり本を奪還したりといろいろあつたよ」

「ふゝん、なかなかやりがいのありそうな職業じゃないか」

紫さんが勝手に作り上げた職なんだけどね

「ところで大林の方は？」

「俺っちの方は割と気楽だぜい。あちこち回つて集めた耳よりの情報を提供するつてな」

「へー、思ったよりハードな職だな。ところでその職にはどうやって就いたの？」

「単純明快、幻想郷まで連れて来てくれた紫姉ちゃんに勧められてね」

「・・・あの人本当何者なんだ？」

ますます意図が読めない 流石は妖怪の御大将だ

「そうだ、猫又は元気にしてるか？」

「相変わらず、ハイスペックな電脳星人で生き生きしてるな」

猫又というのは俺のもう一人の友人で、自前のハイスペックなノートパソコンを常備している男だ

そう言われると眼鏡かけた二トっていうイメージがあるが、顔は普通で運動神経もそれなりにあるのだ

ちなみに若〇規夫のファンでもあるらしい

「しかしオカチン、ここは何やらカオス臭が漂ってると思わないか？ほーら周りを見て御覧」

「？」

大林に促され、周りを見渡してみる

するとある所では

「よっしゃあ！私の勝ちい！」

「くう、流石に鬼相手に飲み比べは無謀だったね・・・」

先程飲み比べを始めたお二人さん どうやら決着がついたみたいだけど顔がもう成熟したアップルと化している

またある所では

「桜！なんで私の新聞の購読数はこんなに少ないんですか！？」

「知りませんよそんな事！」

「もう我慢できません、思う存分遊んであげますから覚悟してください！」

「酔い過ぎですよ！？ちよっ、やめてください！！」

忌々しい新聞記者とその部下と思しき人物 記事の件で抗議に行こうかと思っただが部下との楽しいひと時は邪魔してはいけないと思

い（というか空氣的に行けない）、そつとしておいた

そしてまたある所では

「妖夢、もう1回から揚げを取りに来て頂戴」

「何度も持つてきましたし今も尚食べてるじゃないですか！少しは自重してください！」

「何言ってるの？まだまだこれからよ」

「そんな理不尽な」

次々とから揚げを平らげている（現在進行形）今朝の新聞にも載っていた御大とその部下の剣士 第2回大食い選手権に向けての練習だろうか

「た、確かに・・・」

ここまで力オスな宴会は初めて見る  
これも幻想郷ならではのだろうか

「まー俺はこれはこれで楽しそうだと思うぜい、向こうの世界では絶対に味わえない刺激って奴があるからなここには」

「それもそうだけど・・・」

たまに厄介な事に巻き込まれたりもするし万事が楽しい事だらけって訳ではない

「そうだオカチン、一つ言い忘れたんだが・・・」

「ん？なんだ？」

「なんでオカチンはこの世界に来ようと思ったんだ？」



そついやまだ大林には話してなかったっけ

「紫さんに俺の両親の秘密を知りたくないか？って言われて、どうしても気になったから来てしまつてな」

「ふ〜ん」

「でも今の所手掛かりはこれっぽっちも掴めていない 紫さんに聞いたつてどうせ分からないし、せめて何かしらヒントのような物でもあればいいんだけど・・・」

「その話、本当なのか？」

「分からない」

でも、と付けたし

「それがもし嘘だつたらその時はその時でいいかな、どうせ親は俺の事なんてどうでもいいと思つてるだろうし」

ぶつちや俺はここでの生活の方がエンジョイ出来ると思うようになってきた

「もしかしたらオカチン、両親のお前に対するそのそつけない扱いこそが、その秘密つて奴と関係があるかもしれないぜい？」

そう言われてみればそうかもしれない

小学生の頃から朝起こされる事も無かつたし、テストや通信簿を見せるようにも言われた事なかつたし、授業参観に来る事もなかつたただ必要最低限の学費とかだけしか手配してくれなかつた気がするこれは小学生に対する普通の扱いではないかもしれない

「それより大林はいいのか？この世界で暮らすことになつても」

「俺つちの両親は既に逝つちまつたし、実質居場所なんてどこだつていいさ」

そうか、こいつのご両親は事故で亡くなれたんだっけ

こいつにとつてたとえそつけなくとも親がいる家庭つてのはどれだ

け羨ましい物なのだろうか  
そう考えるとちょっと悪い事したとも思えてくる

それでも、俺は話してもくれないだろう秘密を知りたいからここに  
来た

「大林、両親の事、協力してくれるか？」  
ただし、もう一人ではない

「友人の頼みとあらあ断る訳にはいかないぜい、無論その為にここ  
に来たようなモンだしな」

「じゃあ何かそれに関する情報を入手したら教えてくれ」

「ああ、任しとけ」

「ありがとな」

友達ってこんなかけがえのない物だったのか・・・  
普段何気なく馬鹿やってて全然気付かなかったな

「ウイ、食った食った」

「いやーごちそうさん」

食べたり飲んだりしている内に満腹になり、一息ついた  
ガリバーに至っては満足したようで、仰向けに寝っ転がっており、  
いびきをかいていた

酔いながら帰る者、未だに飲み食いしている者、寝っ転がってる者などがちらほら見受けられる

「じゃーそろそろ帰るとするか」

「そうだな、悪いがオカチン、片づけ頼むよ」

「ちっ、また俺かよ」

渋々と食器をトレイに詰め、神社の中へと運んでいく

中も今だ明るく、賑やかだった

本当にここの連中は酒が好きなんだな・・・酒の匂いがプンプンする

「さあて、行こうか」

俺は大林の元へと戻り、鳥居の外へと歩きだそうとする

「ほれ、オカチン、ペットの面倒はしっかり見ないと」

「あ、悪い悪い」

危うく忘れる所だった

「おいガリバー、行くぞ」

「んー？あ、ああ・・・ムニヤムニヤ」

俺に起こされたガリバーは眠たそうな顔で俺の肩に乗った

と、その時

「よーくもー私を酔い潰してくれたわねえ、ただじゃおかないわよ」

「逃げようなんて駄目だからな、存分に仕返しさせてもらっぜえ」

「うげっ！？霊夢と魔理沙！？？」

何やら後ろから声がしたので振り返ってみるとそこには酔い倒れさせたはずのお二人さんが禍々しいオーラのような何かを纏ってこちらに迫ってくるのが確認できた

むう・・・こうなったら

「逃げるぞ大林！」

「やれやれ、オカチンのフラグ回収と来たら一級品だな」

「待ちなさい！」

「逃がさないぜ！」

恐らく今日のファイナーレを飾るであろう、横腹我慢しながらの壮絶マラソン大会が幕を開けた

バシユン！やらドゴーン！やら何やら物騒な効果音と共に俺と大林はひたすら夜の森の中を奔走するのだった

ああ、やっぱり俺に平穩なんて物はなかったんだ・・・

TO BE CONTINUED

## 第9章 飲ま飲まYEAR！（後書き）

未成年の飲酒はダメ！絶対！

## 第10章 修復、承れません

「ここはとある3姉妹が住まう家」

「・・・じゃあ1時間半ぐらいで帰ってくると思うから、留守番頼んだよ」

「はい」

姉さんはこれから出かけるとの事だったので、留守番する事になった。そういえばどこに行くんだろう？何か持っていたけど・・・

「まいつか」

演奏会も近いし、トランペットの練習でもしていよう

「およ？」

自分の部屋に向かう途中、姉さんの部屋の机の上にバイオリンが置いてあるのが見えた

そういえば姉さんのバイオリンって触った事ないんだよね（というより触らせてくれない）、持ったらどんな感触がするんだろう

（出かけてるんだし、ちょっと触っちゃおう）

部屋に入り、そのバイオリンへと歩み寄る

そしてそれを両手で持って眺めてみる

手入れされてあるのか、傷も汚れも無くピカピカだった

今度は弦に指をあて、軽くそれらを弾いてみた

すると張りが強いのか、途切れ途切れの高い音が聞こえる

（これはトランペットにはない感触っ・・・！）

つい夢中になってしまい、何度も何度も弾く

ぶちん

「・・・・・・・・あ」

すると下の根元から1本の弦がちぎれてしまったのだ

「どどどどうしよう!？」

焦った私は何かないか机の上や中を探る

すると引き出しに張り替え用の弦が何本が入っていた

でも弦の張り替え方なんて分からないし、かと言ってもしこれが姉さんにばれたら・・・

く回想中く

「・・・これはどういう事？」

「ごめん姉さん！つい夢中になってしまっ」

「・・・当分の間家の掃除と洗濯、全部一人でやる事」

「そ、そんなあー！」

「姉さんついてないね（ニヤニヤ）」

〽回想終了〽

「駄目だああ！」

私に罰を課す姉さんとそれを傍目で見て楽しむ妹の姿が浮かんだ  
どうしよう、このままでは本当に家の掃除と洗濯を全部一人でさせ  
られてしまう

などとあれこれ考えていると・・・

「姉さん何してるの？」

「ひゃっ!？」

突然背後から声かけられる

振り返ってみるといつの間に来たのか、例の妹がそこにいたのだ

「り、リリカ!？ななな何か用？」

「何か慌ただしい音と声がしたから気になって見に来ただけど」  
すると今度はテーブルの上に置いてある弦のちぎれたバイオリンに  
目を向けるリリカ

「あーあ、それもう一人の姉さんのバイオリンでしょ？」



半ばニヤケ顔でそんな事を言う妹

「ち、違うの！これは最初から・・・」

「誤魔化そうたって無駄だよ、姉さんがやったんでしょ？」

そりゃ私があれば騒いでたんだし、誤魔化せるはずもなかった

「どんな罰を受けるのか楽しみだねー」

「全然楽しみじゃない！」

言うまでもなく私が罰せられている所を見たいだけである

「それとも私が直接言いふらしちゃおうかなー」

「やめよ！？そいうの」

この妹に知られてしまったのが運の尽きだった

証拠を隠滅しない限り、このままでは言い逃れも出来ない  
でも私弦なんて直せないし・・・

（こうなったら）

私は張りかえ用の弦とバイオリンを持ち、玄関へと向かう

「じ、じゃあ私ちよつと行ってくるから！」

「いつてらっしゃーい（ニヤニヤ）」

家から飛び立ち、ある場所へと急ぐ

‘あそこ’なら何とかしてくれるかもしれない

く所変わって正也の家く

「そろそろこの店の名前でも決めないか？」

散々だった宴会から何日か過ぎたある日の昼下がり、突然ガリバーがそんな事を言い出したのだ

「何故に？」

「やっぱこう、何かインパクトを与えたいじゃん。ただ単に‘依頼屋’って言ってもパツとしないから」

店の名前が、確かにインパクトって大事だもんね

「そうだな、じゃあ‘ザ・リクエストショップ’なんてどう？」

「そのまんまじゃねえか」

「じゃあ‘行列の出来る依頼屋’とか」

「ラーメン屋じゃあるまいし・・・」

「じゃあ‘依頼ショップYUKARI’とかは？」

「勝手に私の名前を使わない事　ガアン！

「痛っ！？」

どこからともなくタライが降って来た

そりゃ紫さんが考えた職なんだし、別にいいじゃないか・・・

「やっぱ名前考えるのって難しいな」

ネーミングセンスの無さを自覚してない訳じゃないが、名前って何を基準にして考えるんだろうね

そうこう考えてると

ドンドンドン

「依頼屋さん早く早く！」

扉をノックする効果音と何やら焦っているかのような声が聞こえた

「正也、客が来たみたいだぞ」

「随分と慌ただしい客だな・・・」

どっこらせと立ち上がり、「はい」と言つて扉に歩み寄つてガラツと開ける

するとそこには

「あ！依頼屋さん早くこのバイオリンを何とか！！」

白を基調とした衣服を召した水色の髪的女性が何やら切羽詰まった様子でこちらにバイオリンを突き出していた

頭には先つちよに水色の太陽のような物がついたオランダで見かけそうな三角形の帽子を被っている

「と、とにかく落ち着いて！まずは名前と事情を・・・」

「メルラン・プリズムリバー！このバイオリンのちぎれた弦を張り直してほしいの！」

一応名前と大まかな事情を聞き出すことは出来たが、いかんせん落ち着く様子がない

「と、とりあえず中に入って水でも飲んで！まずは落ち着く事から始めよう！」

そう言つて俺はメルランさんを家の中へ誘導する

この状態だととても依頼を遂行出来そうにない

「それでね、その間に姉さんのバイオリンを触ってたら弦が1本ちぎれてしまつてね」

卓袱台の前に座布団を敷き、そこに彼女を座らせた後、ガリバーが持ってきたコップ一杯の水を飲ませ、ようやく落ち着きを取り戻してくれたみたいだ

いやあ、一時はどうなることやらと・・・

「しかも運悪く腹の黒い妹に見られたからこのままだと確実に姉さんにばれてしまうの」

「ふむふむ」

となるとこの人はプリズム家の次女って事かな  
てか妹さんマジパネエっす

「張りかえ用の弦はあつたんだけど、私バイオリン担当じゃないからやり方分からなくて・・・そこで依頼屋さんをお願いしに来た訳なの」

成程、詳しい事情はよく分かった

ただ・・・

「弦の張りかえねえ・・・」

俺だってバイオリンやってた訳ではないので当然やり方なんて分かる筈がない

あくまでもここは‘依頼屋’であつて‘楽器修理店’ではないのだ

メルランさんには悪いけどここでお引き取り願うk・・・

「ええと、駄目？」

本当に困ってると言わんばかりの表情と言葉で訴えかけてくる彼女

「残念だったな、こいつは楽器の事なんざこれっぽっちも知ら  
（ゴスッ）ぶはあ！」

「分かりました、何とかしましょう」

どうにも断りきれなくなった俺は不吉な事を言いかけたげっ歯類に  
肘を入れて黙らし、この人の要望に応える

そりゃあんな顔されてはねえ・・・

「本当!？」

「ああ、でも・・・」

俺は卓袱台の上に置かれたバイオリンと替えの弦を持って立ち上がる

「直してくるからちょっと待ってて、すぐ戻ってくるから」

「早くお願いね!あと1時間ぐらいで姉さん家に帰ってくるから!」

「分かった」

そして玄関の扉を開け、ある場所に向かって走り出す

「あいつ」ならきつと何とかしてくれるだろう

ガラッ

「おつす大林」

「おお、オカチンじゃないか」

ここは大林が営む情報屋である

入ると目の前には横長のカウンターがあり、その向こう側に大林が立って客を待つようだ

その奥には私生活の間もある

俺が何故こんな所までバイオリンを持ってやって来たのかと言うと・

・

「どうしたんだオカチン、バイオリンなんか持って」

「ああ、実はかくかくじかじかで」

く正也説明中く

「という訳なんだ」

「成程、それで俺に直してほしいと」

ここに来た理由は言うまでもない

大林は現実世界では楽器修理のバイトをしていた男なのだ  
行動力と手先の器用さで定評があつたんだとか

だからこの男に弦の張り替えを頼みに来た訳である

「よし、友人の頼みとあらば特別サービスだ、ちょちょいと張りかえてくるから待っていてくれ」

「ああ悪いな、頼んだぞ」

そして大林はバイオリンと弦を持って奥へと入っていった

6分後

「お待たせ」

「おお、サンキュー」

待っていると奥から再びバイオリンを持った大林が現れたのだ

弦の部分を見ると元通りに1直線に並んでいた

「ささ、早くこれをその子の元を持って行ってやりな」

「ああ、そうだな………つてちよつと待て」

俺はバイオリンの下の方の表面を見ている

すると何やらさらに茶色い物が染み込んでいるかのような模様があるのが確認出来た

「おい大林、これは何だ？こんな無かつたぞ？」

とりあえず俺が待つてる間に何があつたのかを聞き出す

「いやあゝ実はな……」

く大林説明中く

「ふうー、こんなモンかな」

ようやく弦の張り替えが終わった

「さてと、これをオカチンの所に持っていくとするかね・・・」

すなわち

ガタツ

ガコツ

膝が卓袱台に当たり、その揺れでコップが倒れ、中に入っていたコ  
ーヒーが

丁度近くにあったバイオリンの下の部分にかかってしまったのだ

說明終了

「という訳なのさ、まあ許せ」

「ふっざけんじゃねええええええええええええ！！！」

この野郎、コーヒー飲みながら作業してやがったのか

こぼす事ぐらい想定しやがれ

「弦張り替えてくれた事は感謝するよ！けどな、だいたいからお前は注意力という物が欠けてんだよ！！」

「い、いやでもほら、俺だつてこぼしたくてこぼした訳じゃないし・  
・・」

「言い訳なんざ聞きたくねえ！ 仮にも人様の物だぞ！ これじゃますます本末転倒じゃねえか！！」

まったく、メルランさんも待ってるというのに



「お前が責任取れよ！今すぐこの染みを消せ！」

「ま、待てオカチン」

すると奴はこんな事を言い出した

「八百屋の近くに、ここ最近新しくクリーニング屋が出来てな」

「クリーニング屋あ？」

そんなのあったのか？

「そこは衣類は勿論、木材や本なんかについた汚れも15分あれば落としてくれるそうな」

「本当に、そんな所あるのか？」

「ああ、情報屋の誇りにかけて絶対に嘘はつかない」

何と、そんな都合のいい店があったとは

幻想郷なら何でもありなのか・・・

「分かった、じゃあそこに行ってくる。ただし、後でクリーニング代は返してもらうからな」

もしクリーニング屋が無かったら羽交い絞めにしていた所だ

そして扉を開け、俺は再び走り出す

とにかく早くしないと姉さんとやらが帰って来てしまう

「ガリバーサイド」

「いててて・・・」

卓袱台の上に立っていた所、正也に思いっきり肘を入れられ、不意のショックで今まで気絶していたのだ  
「たたくあいつは、何が「何とかしましょう」だっただ

「えと、大丈夫？」

すると突然、頭上から声がかかる  
見上げるとさっきの女が俺の方を覗き込むように見ていたのだ

「んあ？まあ何とかな」

はあ、正也も加減ってモンを知ってほしいね全く  
いくら妖獣と言っても根本的なスペックはヤマアラシそのものなんだから

「ねえ！それより君、喋れるの！？」

突然声を上げ、物めずらしそうな目で俺の方を見る

「あん？喋っちゃ悪いかな？」

「そんな事ないよ、すごいじゃん！動物なのに喋れるって！」

「ま、まあ確かに喋れる動物なんざ俺意外いないからな」  
やけにテンション高いなこいつ

そりやめずらしがるのは分かるんだがそこまで声を張り上げて言う事か？

「それよりお前、何故正也なんかの所に訪ねて来たんだ？正直あい

「つは期待するほど万能な人間じゃないぞ」

「うっん、そんなんじゃないぞ」

女は一呼吸置き、こんな事を言い出した

「ここ、頼りになる店主がいるってすごい評判らしいんだ！だからその評判を聞きつけて私も頼みに来たの！」

頼りになる……か

そういえば何年前、‘あの男’が俺にこんな事言ってきたっけ

「僕は、君の事頼りにしてるからこそここまで来れたんだ。だから、これからも一緒に来てくれないか？」

そんな事俺に言っておきながら、あいつはどこかに消えてしまったんだっけ

だから俺はこんな言葉、もう信じないと思った

（でも……）

俺が夜雀に鳥目にされてボロボロになった時、あいつは見ず知らずの俺を自らの危険を顧みずに助けてくれた別に深い意味なんて無かったんだと思う

それから俺はあいつと一緒に依頼に出かけたり、飯食ったりと、い

つまでもこんな事が続くと思ってたりする

もしかして俺は、あいつの事を‘頼りになる’と思ってるのかもしれない

（馬鹿馬鹿しい・・・）

こんな俺らしくない考えはやめだやめ

「それにしても遅いね、早くしないと姉さん帰ってくるよ」  
それでも・・・

「それなら心配するな、あいつの事だからきつとお前の期待に応えてくれるさ。必ず戻ってくる」

俺はあいつならどんな状況でもそれなりに‘何とか出来る’奴だと思っっている

（正也サイド）

「ええと、ここかな？」

大林に言われた通り、八百屋の隣にある1件の建物の扉の前にやって来た

ガラッ

「ごめんくださーい」  
扉を開け、中に入る

「あらいらつしゃい」

すると目の前は畳の間になっており、そこにはさまざまな器具が置かれていた

そして店主と思しきおばちゃんが座布団の上に座っていた

「ええと、このバイオリンの染み抜きってお願い出来ます？」  
とりあえずオーダーを言ってみる

「ええ、朝飯前だよお」

「本当ですか!？」

何と、バイオリンもきつちり守備範囲だったらしい

「因みにどれくらいお時間がかかります？」

「そうだねえ、ちよつと見せておくれ」

俺はおばちゃんにあの馬鹿が汚したバイオリンを渡す

「ああ、これならものの10分ぐらいで終わるよ」

「じ、じゃあお願いします!」

「あいよ、8円ちようだいな」

俺は懐に入れておいた財布から8円を取り出し、それを渡した

「じゃあちよつと外をブラブラするなりここで待つなりしておくれ」

「あ、はい」

とにかく今は一刻を争う時だったので待たせてもらつ事にした

10分後

「はいよ、お待たせ」

どうやら無事終わったみたいで俺に向き直り、バイオリンを差し出している

「ありがとうございます」

俺はそれを受け取り、染みのあった所を見てみると

跡形もなく取り払われ、元の輝きを見せていた

す、すごいな幻想郷の技術 何でもありがたい

「さあて、戻るか」

するとその時

ガラッ

「・・・おばさん、預けてあった服、取りに来た」

「おやおかえり、ほれ、もうこれでバッチリだよ」

金髪で黒を基調とした衣服を召した女性がご来店して来たのだ  
どうやら前もって預けてあったらしい

そしてその女性はおばさんから3着の派手な色をした服を受け取る

「えーと、ルーミアちゃん、だっけ？」

どことなく後ろ姿とかがそれっぽかったので話しかけてみる事に

「・・・私はルナサ・プリズムリバー、そんな名前じゃないが、どうやら人違いみたいだった

「あ、これはこれは失礼しました」

いやあ、名前間違えると何とも気まずくなるよね

「しかしお洒落な服をお持ちですね」

場の空気を元に戻すべく、適当に話題をふってみる

「・・・演奏会も近いから、その時に着ていく私と妹達の服をクリーニングしてもらってね」

「ほえー、妹さん思いじゃないですか」

何となく妹さんの事でも苦勞してそうだ

・・・ってちよつと待て

プリズムリバー？妹達？

「・・・ところで貴方、そのバイオリンって」

やや訝しげに俺の手にあるバイオリンを見るルナサさん

ま、まずい

この人、恐らくメルランさんの言ってた‘姉さん’か！

でも性格がまるで正反対じゃないか、どうなってるんだプリズム家の人達って・・・

ええい、今はそんな事どうでもいい

問題は今この状況でこのバイオリンの持ち主であるお姉さんに行く

わしてしまった事である

さらに悪い事にはそれをこの場で見られてしまった

まずいな、「借りてます」は論外だし、「妹さんから預かりました」なんて言える訳がない

どうやってこの場を乗り切ろうか、何かよく分からない冷や汗が背中からドバツと出てきたような感覚がする

何とかこの場を切り抜く方法はないかとあれこれ考えてると・・・

「もしかして貴方、バイオリンやってるの？」

「ほ、ほえ？」

確実に怪しまれると思ったが、予想外にも見当違いな質問が飛んできた

「そ、そうなんですよ！以前演奏会を見に行った時に憧れを持って、それ以来バイオリンの練習をしてる所なんです！」

仕方なくとんでもない大嘘をつくしかなかった

実際バイオリン触るのは今日が初めてなんだけども

「そ、それよりルナサさんはこれからどちらに？」

「もう用は済ませたから、そろそろ帰ろうと」

ま、まずい

そうはさせん、そうはさせんぞ！

「そ、そういえば今日魚屋が特売日なんですよ！ぜ、是非ともそちらに立ち寄ってみてはいかがですか？」

「・・・でもお金が」

ええい、仕方ない

俺は財布から20円を取り出し・・・



「そ、それなら奢りますよ！さ、秋刀魚なら確か一尾6円ぐらいで買えたはずですし！」

「で、でも・・・」

「え、遠慮なら無用です！妹さん方にも買っていつてあげてください！」

半ば強引にそれを彼女に与えた

「・・・あ、ありがとう」

「そ、それじゃあ俺はこれにて失礼します！演奏会頑張ってください！」

最後にそう言い残し、逃げるようにクリーニング屋を後にする  
何か今日、ろくな事が無かった気がする  
でもとりあえずはこれで時間稼ぎが出来そうだ

「そしてここは正也家」

ガラッ

「すみません、お待たせしました！」

若干息切れしながらも何とか家にたどり着いた

「はい、これで元通りです」

そして俺はメルランさんに例のブツを渡す

「ありがとう、助かったよ！」

ほっとした様子の彼女

俺だってあの馬鹿にコーヒーぶちまけられた時はどうしようかと思っただけ全く

「それよりお前、報酬は何なんだ？」

するとガリバーが若干皮肉げに訪ねる

「あつ、どうしよう。私何も持ってきてなくて」

恐らくバイオリンの事で肝心の報酬を忘れてしまっていたようだ

やれやれ・・・

「さあ、それより早く行くんだった！じゃないとお姉さんもうすぐ帰ってしまうぞ」

「え？でも・・・」

「今回だけは特別サービスでいいから、とにかく早く！」

「あ、うん！ありがとう！」

そう言い残して玄関の外へと飛び去っていく彼女、これにて依頼完了である

その後、俺はその場でしばらく立ち尽くしていた

「いいのか正也、何も受け取らなくて」

ふと、ガリバーがそう訪ねてくる

そりゃ確かにボランティアでこの仕事をやってる訳じゃないし、俺だって何のメリットもない事はしようと思わない

「まあいいじゃないか、一刻を争う非常事態でそこまで頭が回らなかったんだろし・・・それに、何も物や金だけが報酬って訳じゃない」

でも、俺は最近こう思うようになった

「お客さんから喜んでもらえる、それもまた一つの『報酬』、なんじゃないか？」

この世には、お金で買えない物もある

「よく言っぜ、いつぞやのボンボンの件なんざモロ金目当てだった癖に」

「なっ、そんな事ねえよ！」

まあいいか、別に今滅茶苦茶生活に困ってるって訳じゃないし

「その夜、メルランサイド」

「・・・はい、ご飯出来たよ」

椅子に座って待っていると、テーブルの上に姉さんが作った晩ご飯が置かれる

「それじゃあ、食べようか」

「「いただきます」」

結局バイオリンの件はばれなくて済んだけど、帰って来てからの姉さんと来たらやけに機嫌が良さそうだった

何があつたのかと聞くと、‘クリーニング屋でバイオリンを持った少年からエールを送ってもらい、更には魚代までいただいた。とても親切な人だった’との事

バイオリンを持って外に出た人なら一人思い当たる節はあるけど、弦を直すのにクリーニング屋なんかに行く必要はこれっぽっちもない

という事はその少年っていうのは一体誰なんだろう？

人里でバイオリンをやっている人なんていたのだろうか？

そもそも依頼屋の少年はどこに行ってたんだろう？

などという腑に落ちない事を、私は秋刀魚の塩焼きを白飯と一緒に頬張りながら考えていた

でも、結局答えは出ない

TO BE CONTINUED

## 第10章 修復、承れません（後書き）

ガ「たまにいろよな、頼まれたら断れない奴って」  
正「うぐっ」

## 第11章 お話、承りました

おはようございます！

始まりはいつも朝

鬱陶しい朝

誰特だよ朝

バイオリン騒動から何日か経ったある日の事、いつも通り朝飯を食いながら新聞をおっぴろげて読んでいた

「『あの稗田家頭首も絶賛！？突如人里に現れた情報屋』か・・・」  
新聞の見出しには大きくそう書かれてあった  
あいつの店もとうとうこの新聞記者に目を付けられちゃったか

「俺達の店はもう話題に上がらなくなったな」  
大好物の秋刀魚の塩焼きを頬張りながらガリバーが言う

「いや、むしろ家はもう知れ渡り過ぎて今さら記事にするような事  
ないんじゃない？」

小さい頃、新作のゲームを今か今かと心を躍らせながら待っていた  
記憶がある

けど手に入れてしばらくやっている内に何とも思わなくなったかな  
人間ってというのは大抵そんなものさ、最もこの記者は人間じゃない  
だろうけど

「まあ俺らは俺らでいつも通り頑張ろうか」  
こうしていつも通り俺達の生活が始まる

「さてと、掲示板でも見てくるか・・・」  
食器をかたづけ、ガラスと扉を開けて外へと出る  
相変わらず外はいい天気だった

「お、何枚か来てるじゃん」  
とりあえず俺は1枚1枚読んでいく事にする  
その中の一枚を手に取り、目で字を追いかけた

## 1枚目

依頼主：博麗の巫女

依頼内容：いい加減私と勝負しなさい

報酬：素敵なお賽銭なら博麗神社まで

「・・・・・・・・・・」

よし、破り捨てるか

こんなデメリットだらけの依頼なんか誰が受けるか馬鹿

「おいおい、何破ろうとしてるんだ？」

するとガリバーが肩からそれを覗いて呆れたように言う

「こんな依頼受けたって得る物は何一つないだろう」

「おいおい、こないだ、客に喜んでもらう事も報酬、だとか言ってた奴が客の期待を裏切るような事してどうすんだ？」

「それとこれとは全く別問題っしょ！？」

最もこの場合俺が負けたら喜んでくれるだろうが俺はそこまでマゾヒストではない

「なにがともあれこれは没だ、次だ次」

2枚目

依頼主：普通の魔法使い

依頼内容：せつかくパチュリーから借りてきた本をよくも持ってくれたな

返してもらうぜ

報酬：ある訳ないだろ

「・・・・・・・・・・」

まだ言ってるのかこいつは

言っとくが俺は持ち主であるパチュリーさんに頼まれてやった事だからな

俺を怨んだってどうしようもない

「ええい、次だ」



3枚目

依頼主：わはー

依頼内容：依頼なのかー

報酬：そーなのかー

「・・・」

ルーミアちゃん、依頼の意味分かってる？

決して落書きを掲示しにくる所じゃないんだよ？

「碌な依頼がねえな」

「全くどれもこれも・・・」

気を取り直して4枚目

依頼主：香霖堂の店主

依頼内容：外の話聞かせてほしい

是非香霖堂まで来てくれないか？

報酬：25円

「だよ、どうすんだ？」

4枚目にしてようやくまともな依頼書を手に取る事が出来た  
見ると裏側には香霖堂とやらまでの大まかな地図が書かれてある

「まあ内容もそんなに難しくないし、行ってみるとするか」

こうして俺はガリバーと共に依頼主の所に向かって歩き始めた  
なんかもういつも通りのパターンだな

「ええと、地図によれば確かこの辺に・・・」  
どうもその香霖堂とやらは魔法の森の近くにあるらしい  
地図を頼りにエツチラオツチラと歩き続けていると・・・

「ん？あれかな？」

生い茂った木々をバックに1件の木造の建物がそびえ立っていた  
扉の上には‘香霖堂’という看板も貼られている

更には・・・

「なんだありや、ガラクタ塗れじゃねえか」

顔をしかめながらガリバーが言う

見ると家の周りには電源の入っていない古びたテレビやらソファや  
ら、更には自動販売機なんて物もある

もしかして現実世界から転生でもされたのだろうか？

幻想郷との繋がりはよく分からないから何とも言えないけどね

「まあ、とにかく行ってみよう」

スタスタと扉の前に歩み寄り、コンコンとノックする

「ごめんください、依頼屋です」

そう言っただけでしばらくするとガチャッと扉が開かれる

「おお、来てくれたんだね」

お出迎えしてくれたのは白髪で眼鏡を身に付けた I K E M E  
N だった

恐らくこの人が店主だろう

「初めまして、岡野正也と言います」

「俺はガリバーだ」

「丁寧にどうも正也君にガリバー君、僕は森近霖之助だ」  
手を差し出して握手を求める霖之助さん

「ところで、外の話を知りたいとの事で来たのですが、どのような話をすれば？」

握手をし終え、早速気になった事を質問する

「聞く所によると、君は渡来人との事だから、外ではどんな物があ  
るのかを聞かせてほしいんだ」

成程、どうやらこの人は外の事について興味があるらしい  
未知を知るってのはなかなか刺激的だったりもする

「分かりました」

「まあ立ち話もなんだし、中でゆっくり聞かせてもらおうよ」  
そして霖之助さんの後をつき、中へと入っていく

「そこに座って、今お茶を持ってくるから」

「はい、ではお言葉に甘えて」

畳の敷かれたリビングに案内され、卓袱台のそばに敷かれた座布団に座らせてもらう

そして霖之助さんは台所にお茶を淹れに行った

「（ボソツ）しかし中にもガラクタだらけだな」

どうやらここは店を営んでいるらしく、ここに来る途中にもさまざままな道具が置かれてあったのだ

「（ボソツ）まあそりゃ店だし、それに見慣れない物もいくつあったね」

例えばお札やら陰陽玉やら、俺達の住む世界ではお目にかかれない物まであったりした

何に使うのだろうか？

「待たせたね」

そうこう話していると、奥から霖之助さんが小さめの丸いトレイに湯呑を3杯乗せて持ってきたのだ  
彼はそれを卓袱台の上に置いていく

「少しいただいてもいいですか？」

「全然構わないさ」

お言葉に甘え、湯呑を両手で持ち、ズズっとそのお茶を啜ってみる  
うん、これはなかなかいいお茶っ葉が使ってあるね　まだ熱いけど

「あちっ！舌がっ！」

するとガリバーもそのお茶を啜った訳だが、どうやら舌を火傷した  
みたいだ

やれやれ、落ち着きがないね

「大丈夫かい？」

「いつもの事です、気にしないでください」  
とりあえずこいつは置いとして・・・

「それじゃあ早速聞かせてくれないかい？」

「分かりました」

さてと、何から話したらいいやら・・・

「ええと、じゃあまず移動手段について話します」

「ふむ、それは興味深いね」

「俺も気になるな」

そっぴやガリバーも幻想郷の妖怪だから外の事は何も知らないんだ  
っけ

「普通移動手段と言ったら、ここでは歩くか飛ぶかの二択ですが、  
外では交通網というのが発達しておりまして、例えば燃料を積んで  
座ったまま移動が出来る自動車や、遠く離れた地に行きたければお  
金を払って利用する電車や飛行機なんて物があります」

普段見慣れていた物でもいざ人に説明するとなるとこれが結構難し  
いんだよね

もうちょっとトークの力を伸ばしたい物だね

「その‘でんしゃ’と‘ひこうき’っていうのは具体的にどんな物だい？」

「うーん、簡単に説明すると、線路っていう専用の道を進んでいくんですが、すごい速度で突き進んでいくので、何十キロか離れた場所に数分で行く事ができます。あと、飛行機はそれよりも更に早い速度で上空を突き進み、何千キロも離れた土地に数時間で行く事が出来るといった感じですね。つまり、自分で歩いたり飛んだりしなくとも目的地に行くことが出来るのです」

「おお、それはすごいじゃないか」

「まあ、ただそれによって環境問題やそれに頼りっきりの人間などが現れるようにもなったんですけどね」

「皆はちゃんと適度な運動もしような、例えばジョギングしたり自転車を使ったりとか」

「他にも意思伝達手段として、電話や電子メールなんて物もあります」  
コミュニケーションツール

「何だいそれは？」

「直接対面しなくても離れた人とやりとりが出来るんです」

「それはまた興味深いね、どんな物なんだいその‘でんわ’っていうのは」

「俺はポケットから携帯電話マイセルフォンを取り出したてかもうこれ、電池切れてないか？」

「例えばこんな物ですね、もう電池切れになつてて使えませんが」

「どれどれ、ちょっと触らせてくれるかい？」

そしてそれを興味津津な様子の霖之助さんに手渡す

「ふむふむ、道具名は‘けいたいでんわ’、普通の‘でんわ’とは

違つて持ち運ぶ事ができ、遠く離れた人と会話や文通が出来るのか・  
・・」

「え、何で分かつたんですか？」

「僕は触れた物の名前と使用用途が分かる能力を持っていてね。ただ、詳しい使い方までは分からない」

何と、この青年も能力者だったのか

俺の右手なんかよりずっとか実用性高いじゃないか

その後、外の文化や技術などあれこれと霖之助さんに語った  
ガリバーは途中で退屈になったのか、卓袱台の上に突っ伏して寝てしまったが、霖之助さんは最後まで興味深そうに聞いてくれた

「色々勉強になったよ。少ないけどこれ、お礼ね」

「あ、はい、ありがとうございます」

霖之助さんに入り口の前までお見送りしていただき、報酬もいただいた

ちなみに今だ眠そうに俺の肩に腰かけているげっ齒類には帰ったらお仕置き予定である

「また色んな話を聞かせておくれ、いつでも待ってるから」

「はい、また機会があれば是非とも」

それではと軽く別れの挨拶を交わし、香霖堂を立ち去ろうとする

「あら、正也さんじゃない。丁度いい所に居たわね」

が、その失先、背後から聞き覚えのある声がかかる

振り返ってみるとそこには紅白の巫女装飾を召した女子が約1名様

「うげ、霊夢！？なんでこんな所に？」

「ちよっとお目当ての物を強だ・・・貰いに来てね」

そんな調子だから参拝客も減るんじゃないのか？

「もしかして貴方、私の前に現れたという事はやっとな勝負する気になったという事かしら」

「何でそう解釈するんだよ！？」

依頼屋の掲示板にも果たし状を貼るほど俺と勝負することに対して執着心を燃やしているようだ

その執念、もつと他の事に使ってほしいね

「君も災難だね」

「そう思うのなら何とかしてくださいよ！？」

「何とかしろと言われてもねえ・・・」

やれやれと頭を掻く霖之助さん

どうやら彼も霊夢には頭を悩ませているようだった

「どうする正也？こりや勝負してあげなきゃ気が済まないパターンだぞ」

「はあ・・・」

こりや参ったね



「しょ・う・ぶ・しなさい」  
ええい、もうどうにでもなれ

「分かったよ、勝負してやるからかかって来い」  
「ふふふ、そうこなくちゃ」  
出来ればかかって来てほしくなかったけどね

「それじゃあ・・・」  
彼女は立った姿勢のまま宙に浮きあがり、臨戦態勢を取る

「早速始めようかしら！」  
そう叫ぶや否や、何枚もの札がばらまかれ、こちらに向かって飛ん  
で来た！  
バトルスタート  
勝負開始のゴングは既に鳴らされていた

「ぬおっ!？」  
一枚一枚見極め、サイドステップで交わしていく

「そこよ！」  
すると今度は俺の真正面に向かって札を飛ばしてきた

「うおお！」  
すかさず恒例の右手をその札に差し出した  
パアン！という効果音と共にその札は消滅する  
どうやらこの札も霊弾の一種なんだろう

「流石ね、といたい所だけでも・・・」  
すると霊夢は急にこんな事を言い出した

「貴方、武器もなしに私に勝てると思ってるの？」

確かにそうだ。いくら右手で防げるとはいえ、俺はごく平凡な一般人だ

空も飛ばないし弾を打つ事も出来ない

ん？武器？

「おいガリバー、そういやお前武器に変身出来るんだったよな」  
阿求さんの家で確かそんな事言ってた気がする

「厳密に言うなら、この幻想郷で人妖が所持している全ての武器を再現出来る、と言った所だな」

成程、要するに誰かの力を借りるといった所か

「じゃあ、一番シンプルな奴を頼む」

「ああ、因みにこれは能力の一種だから、左手で受け取ってくれよ」  
そう言うや否や、ガリバーは俺の肩から飛び出し、「それよっ！」と叫ぶ

すると・・・

ボン！という効果音と共に、ガリバーの体が変化した  
俺はそれを左手で受け取る

「か、刀！？」

見ると、それは長身の刀だったのだ

だが、悪魔でもガリバーの体がそれに变化しただけなので、ガリバーカラーである事には変わらない

「あら、いい武器を持つてるじゃない。それじゃあ続けましょ！」  
すると満足したかのような顔で再び札を放つ彼女  
全く、容赦ないね

「てか、これでどうやって飛んでいる奴に攻撃するんだよ!？」  
飛んでくる札を交わしつつ防ぎつつ刀ガリバーに訪ねる

「とりあえず一振りしてみな、霊波を打てるから」

「こ、こうか？」  
ガリバーに言われた通り、霊夢に向かって刀を振る  
すると・・・

シュン！

キレのいい効果音と共に刃先から刃と同じぐらいの長さの赤いカッターのような霊弾が飛んでいく

「うわつとと」

不意打ちだったのか、慌ててそれを避ける彼女

「なかなか出来るみたいね、私もそろそろ本腰を入れようかしら」  
そう言うや否や、何かを念じ始めた  
そして・・・

「夢符『夢想封印 集』！」

彼女がそう叫ぶと、何十枚もの札が360度俺をとり囲むように現れた

それら全てが一斉に襲いかかる！

「うおおおお！」

俺はひたすら刀を振り回し、何発もの霊波を打つ  
流石にこの数を右手1本で受け切る事は出来ないので、武器の力を  
借りる事にした

バシユン！バシユン！

音をたてながら霊波と札が次々に相殺されていく  
消せなかった物はギリギリでかわしていく

しかしこの刀、なかなか高性能じゃないか？  
重くなく使いやすいし、こりや<sup>オリジナル</sup>原型の持ち主に感謝ア

「正也後ろ！」

「っ！！」

とか言ってる暇もなく、ガリバーの声でとつさに後ろを向く  
すると数枚の札が俺目がけて飛んできていた

パン！

とつさに右手を突き出し、それらを打ち消す

「まだまだこれからよ、神技『八方鬼縛陣』！」

何とかやり過ごしたと思った失先、今度は彼女の前にどでかい円陣  
が現れた

そしてその周りからリボルバーの如く、次々と札が発射された

チユンチユンチユン！と引つ切り無しに俺の方に飛んでくる

「ぐっ！」

このまま右手で打ち消しながら突っ込んでいこうかと考え、その札に手を向ける

だが、それが間違いだった

「ぬあっ！」

飛んでくる勢いが激しすぎて、尚且つ止まないので、バランスを崩し、そのまま軽く後ろに吹っ飛んだ

ドサツと背中から倒れ込む

「いてて・・・」

どうやら木の影に吹っ飛んだらしく、草まみれだった

「大丈夫か正也？」

「まあ何とか」

よっこらせと起き上がって霊夢の方を見る

すると彼女は先程の攻撃で俺を見失ったのか、何やらキョロキョロと辺りを見渡していた

「（ボソッ）正也、今ならチャンスなんじゃないか？」

「（ボソッ）いんや」

確かに今霊波を放てば当てられるかもしれない  
でもね・・・

「（ボソッ）せっかくだからこのままずらかるとするか」

「（ボソッ）逃げるのかよ」

「（ボソッ）今の見ただろ？平和ボケしていた今の俺では彼女には勝てない」

という訳で・・・

「（ボソッ）ガリバー、煙幕だ」

今までも、そしてこれから、俺は無駄な戦いは避ける男でいるだろう

「（ボソッ）仕方ないね、俺も無駄な争いは好きじゃないし・・・」

直後、ボン！と彼女を取り巻くように黒い煙が舞い上がった  
俺はその隙に人里に向かって全力疾走する

「ゲホッ、ちょ、どこにいるのよ!？」

そんな声が聞こえたが気にしない  
振り向かず、ただひたすらに走る

かかって来いとか言っておきながら逃げるなんてダサいだって？ふふふ、人間っていうのは時としてプライドを捨ててでも身を守らなければならぬ時が来る、そんな生き物さ

アディオス、博麗の巫女

今回はお前が勝者だ、やったね、すごいね

「正也が逃げた後の香霖堂」

「出てきなさいよ！」

煙幕が晴れ、ようやく辺りが見えるようになったが、その頃にはもうどこにも正也の姿は無かった

「むう、この私に背を向けるなんて、そこまでして戦いたくないのかしら」

「君は少々やり方が乱暴だね」

やれやれと呆れたように霖之助は肩を竦める

「はあ・・・まあいいわ、もう疲れた」

「まだ昼にもなっていないじゃないか」

「霖之助さん、例のあれ、貰っていくわね」

「出来ればお金ぐらい払ってほしいね」

異変解決のプロフェッショナルがこんな調子でどうするんだと霖之助は思った

「（しかしあの少年・・・）」

逃げたとはいえ、霊夢の攻撃を的確に防いでいた  
あれは普通の人間には到底出来ない

「（一体どんな力が・・・）」

弾を打ち消す能力なんて物はない  
ひよっとすると、あれはまだ我々の知らない未知の力なのかもしれない

「（ますますあの少年の事が知りたくなつたね）」  
渡来人である事も含め、ただものではないと霖之助は目をつけた

「そして、霖之助以外にも正也に目を付けた者達が」

「噂には聞いていたけども、なかなかやるわねあの人間」

「まさか霊夢と互角にやり合うなんてねえ」

森の木影からこっそりとその一部始終を見ていた妖精達がいた

「でも結局逃げたじゃない」

「普段から戦い慣れてない証拠よ、その辺りはそこの人間と何ら変わらないわね」

この時、彼女達は「とある計画」を企てていた

「あいつって、人里で依頼屋をやってるんでしょう？なら私達が騒動



を起こして、どう出るのかを見てみない？」

「それは面白そうね、あいつのうろたえる姿が目に見えかわわ」

「でも捕まったらどうするのよ？」

「大丈夫よ、霊夢みたいに勘は鋭く無さそうだし、私達の力を使えば絶対捕まる事はないわ」

「それもそうね」

「なら決まりね、明日の朝決行しましょ」

こうして彼女達は具体的な作戦会議をすべく、住み家に戻っていった

・ 当の本人は、知らず知らずの内に厄介な物に巻き込まれていく・・・

T O B E C O N T I N U E D

## 第11章 お話、承りました（後書き）

今回は何やかんやで中途半端で終わってしまったorz  
キャラ同士バトラせるのって難しいね

次回の投稿は少し遅れると思います  
ご了承ください

## 第12章 鈴蘭採取、承りました（前編）（前書き）

予想以上に長くなってしまったので2話に分けます

## 第12章 鈴蘭採取、承りました（前編）

「いやー、災難だったな」

やつとこさ家に帰り、俺とガリバーは昼食を摂っていた

そう言えば俺、帰ったら何しようとしたんだっけ？

ええい忘れた、たぶん昼飯作ろうと思ったんだろう

俺はよく何をしようと思ったのかを忘れる

「情けない、男なんだから戦えよ」

「いいじゃねえか！別にあいつに何かしら恨みがある訳じゃないし、戦ったって百害あって一利無しだよ！」

友人とならよく喧嘩していたが、あんな本格的な戦いはしたことが・  
・あつたと思うけど空飛んだり弾幕飛ばしたりなんざ現実世界で  
は考えられん

などと話しながら食べていると

ガラッ

「お邪魔するぜー」

ノックもせずになぞるか？と我が家にエンターする白黒魔女が現れた

「あのなあ、ノックぐらいはしてくれ」

「私は客だ、細かい事は言いつこ無しだぜ」

「細かくねえよ！」

全く、ノックっていうのは人類最大の発明だつてのに

「んで、何の用だ？」

とりあえず俺も客をもてなす身なので用件を聞く

「ちよつと新型の魔法薬を作る為の材料を取って来てくれないか？」  
成程、採取依頼か

「それで、その材料っていうのは？」

「鈴蘭だ、厳密に言うとな鈴蘭の‘毒’と言った所か」

へー、鈴蘭に毒なんてあったのか

俺は山菜の事はある程度知っているが花の事についてはよく知らない

「どこに生えてるんだ？」

「‘迷いの竹林’から‘無名の丘’っていう所に行ける。そこに咲いてるから何本か取って来てくれ」

迷いの竹林か

俺は足を踏み入れた事はないが、迷ったら最後自力では抜け出せないと聞いたことがある

更には幸運の兎なんてのもいるらしく、会う事が出来れば幸せになれるんだと

無名の丘とやらに至っては全く知らない。何か名前からして不穏な匂いしかない

「でもそれなら魔理沙自身が行った方がいいんじゃないか？俺が行ったら迷って終了だぞ？」

頼まれといてこんな事言うのはなんだと思うが、一般人の俺からするとリスキー極まりない

「それなら心配ないぜ、この極秘で入手した地図があればな」

そう言つて懷から一枚の地図を取り出し、俺に渡して来た

てかどこで手に入れたんだよこんなの

「こんな地図で本当に行けるのか？」

「大丈夫だ、問題ない」

問題ないって言われてもねえ・・・

「それにあそこには少々面倒な奴もいるから、なるべく行きたくないだぜ」

結局はそれが理由か

てか面倒な奴って誰ぞ？

「それより報酬とかはないのか？」

とつさにガリバーが訪ねる

「明日の夜に白玉楼で幽霊楽団の演奏会を兼ねた宴会がある。それに連れてってやるぜ」

何と、また宴会が開かれるのか

幻想郷の人達って宴会好きだな

それに演奏会ってまさかあの人達が・・・？

「へー、楽しみじゃないか。んじゃあ飯食い終わったら出発するか」

「ああ、頼んだぜ。それとちよつと水を1杯くれ」

「へいへい」

接客っていうのも楽じゃないね

「じゃあ行ってくるな」

「散らかすなよ」

「ああ、達者でな」

昼食を終え、地図を片手に家を出発した訳だが、あの白黒、「帰ってくるまでくつろ・・・留守番させてもらうぜ」とか言って居間に寝っ転がりおる。仮にも俺ん家なんだぞ  
かくいう俺もいつぞやか魔理沙の家に不法侵入した事はあるが

「そっぴや迷いの竹林ってここから近かったっけ？」

「ああ、確かあっちの方にあったはずだ」

そっぴ言ってガリバーは前方を指差した

「よし、早速行ってみるか」

こうして午後の仕事が始まる

「うわあ、竹がいっぱいだあ」

そしてようやくその迷いの竹林とやらの足を踏み入れ、地図を頼りに歩いている訳だが・・・

「本当にこんな地図で行けるのかねえ」

「さあな」

どこを見渡しても竹、竹、竹

更には薄暗く、うつすらと霧のような物までかかっている

まだテレビゲームがカセットだった時代、とある配管工が主人公のRPGをやっており、「迷いの森」というステージにてBGMやら不気味な笑い声やらでトラウマになった記憶がある

そんでもってそのステージだけ友人にクリアして貰ってたな

この竹林ではトラウマになるような物が無い事をひたすら願う

「こんな時は何か歌を口ずさみながら歩くのが一番だ」

「歌ったって何も変わらねえよ」

何も変わらない？御冗談を

「初めてきいたのにいつかみた気がする」

「はあ・・・本当に歌いだしたよこいつ」

更にはスキップスキップランランで進む

「ZOOM・ZOOM・ZOOM はっしるよろこ（ドシャア！）  
のわっ！」

ドサッ

ノリに乗って来た所で突然俺の体が突如ガクツと揺らぎ、一瞬嫌な



浮遊感がしたと思ったら地面に尻もちをついていた

「いてて・・・なんだよこれ」

「どうやら落とし穴に填まったみたいだな」

「落とし穴？」

見上げてみると頭上には丸い円があり、そこから何本もの竹が見える  
成程、確かに俺は今穴の中にいる

「でも一体誰が何の為に・・・」

誰かこの辺で狩猟でもしてるのだろうか？

などと疑問に思っていると・・・

「くくく、間抜けな人間が引っ掛かってくれたウサ」

「「!？」」

突如、穴の外から声がかかる

見るとそこにはウサ耳を付けて薄らピンクの服を召した少女が大成  
功と言わんばかりの表情で中を覗き込んでいた

「てめーがこの落とし穴を掘ったのか？」

とりあえずガリバーが問う

「そうさ、なかなかいい出来だと思わない？」

自慢と軽蔑の念がこもってるかのような言い草の彼女

「一体何でこんな事を!？」

「引っ掛かった憐れな馬鹿を観察する為に決まってんじゃん」

「「んだとお!?!？」」

ピキッと俺の脳内でそんな効果音がしたような気がした  
この子、見た目に似合わぬ毒舌をはきおる

「それでも喰らえクソ兔！」

怒ったガリバーが俺の肩から飛び、数本の針を勢いよく発射する

「おつと危ない危ない」

が、それは体を反らして簡単にかわされた

「待て！」

俺は急いでこの穴をよじ登る

「つてのわっ！」

ズルツと足を滑らし、再び底に尻もちをつく  
くつ、思ったより若干深いみたいだなこの穴

「こんな事やつてる場合かああ！」

うおおお！と謎の雄叫びを上げ、齒を食いしばって再び側面に向か  
ってアタック

「おらあ！」

手が土塗れになりながらも何とか穴から脱出し、ふんつと力強くそ  
の場に立って辺りを見渡したのだが・・・

「くつ、もう居なくなりやがる」

流石は兎と言った所か、足は速いみたいだ

（ん？兎？）

そっぴや忘れてたけどもしかして噂の幸運兎とやらは彼女の事なの  
かもしれん

でも・・・

（あいつが？）

全く噂つてのもいい加減だね

ありゃただの悪ガキじゃねえか、いや、ガキじゃないと思うが

とにかく俺のイメージしていたのと全然違ったので少しかり失望していた

「正也、もうあんな奴どうでもいいからとにかく依頼をこなすぞ」

「あ、ああ、それもそうだったな」

とにかくこんな所で時間をとっていたらあつという間に日が暮れてしまう

夜になれば帰れなくなるところか、妖怪の餌になる

俺は急ぎ足で地図を頼りに再び目的地に向かう

「うわ、すつげ、抜けちゃったよ」

最初の方は地図があつても不安だらけだったのだが、あの兎に会って以来、何故かスイスイとここまで来れたのだ

「チツ、こればかりはあのクソ兎に感謝しておこう」  
悪態について呟くガリバー

人里の住人によれば、例の兎を見つけることが出来た者は難なく竹林を抜け出せるという噂もあるんだとか  
もしかしてこれは本当に彼女の‘幸運’なのかもしれない

「それより正也、前を見てみる」

「ん？」

ガリバーにそう言われ、前方に向き直る  
するとそこには

「うわあ、まっ白じゃないか」

辺り一面鈴蘭で埋め尽くされた丘があったのだ  
成程、ここが‘無名の丘’とやらか

「こりやなかなかのピクニックスポットなんじゃないか？」

「本当にのどかな・・・」

感想を呟きつつ、花をかきわけながら奥へと進んでいく

「さてと、そーいや何本ぐらい取っていけばいいんだろかね」

「適当に3本ぐらいでいいんじゃないか？」

「3本で足りるかねえ」

あいつの言う‘何本か’の基準はよくわからないが、とりあえず摘む事にした

そーいや‘毒’が欲しいって言ってたっけ

なら摘み方は適当でいいか

ブチッブチッと鈴蘭を摘んでいく

「ふむ、これはなかなか質のいい鈴蘭なんじゃないか？」  
これに毒があるなんて信じられないね

「その人間！何勝手に持ってこうしてるのよ！」  
「！？」

突如、背後上空から何者かの声がかかる

振り返つてみるとそこには金髪で黒い服に赤いスカート、更には細長いリボン<sup>リボン</sup>を頭に付けた少女が一名  
てか今さらだけど幻想郷<sup>こく</sup>の人達って女性率高いよね

「しかも勝手に私の領域<sup>テリトリー</sup>に足を踏み込んだじゃって、一体どういうつもり！？」

「ん？ここって鈴蘭の大農園じゃなかったの？」  
「違うわよ！」

先程から己<sup>かたき</sup>が敵<sup>かたき</sup>を見ているかのような強い眼差しで文句を垂れる彼女  
成程、この鈴蘭は彼女の所有物だったのかな？

「いいじゃねえか、たかが鈴蘭の1本や2本ぐらい」  
「たかが」って何よ！スーさんは私の命なんだから！」  
どうやら愛称をつけるほど鈴蘭をお気に召しているようだ

「そっぴやこの鈴蘭、全部あんたが育てたのか？」  
とりあえず落ち着きを取り戻してもらう為に話題をふってみる

「違うわ」  
ん？なんか急に雰囲気が変わったような・・・

「私はここに捨てられた人形、でもスーさんの毒のおかげで動ける

ようになつてね」

どうやら彼女には訳ありのようだ

「人間っていうのは皆自分勝手だわ、最初は可愛がってくれても飽きたら平気で捨てるんだもの」

誰だよわざわざこんな所まで彼女を捨てに来た奴はその度胸を讃えてもいい気がするんだ

「それに最近の人形の扱いと来たら酷いモンよ、武器として扱ったり儀式の供物にしたり・・・私はそんな人間達が許せない」

昔から人形には魂が宿ると言われてるけども、俺はそんなオカルト全く信じていなかった  
でも何故だかジーンと来る話だな

「だからスーさんの毒でいつか見返してやるの、それを貴方は・・・」

突如再び感情が高ぶる彼女

「ま、待つて！俺もある人に頼まれて貰いに来ただけなんだ！だからちよつとばかり摘みに来ただけで・・・」

「分かんずやの人間なんかスーさんを渡すもんですか！今すぐ戻しなさい！」

くう・・・同情したくもなるが、生憎俺も依頼を受けてる身なんだから彼女には悪いが・・・

「アディオス！」

鈴蘭を持ったまま全力ダッシュ

このまま一気に帰宅だ

「逃がさないわよ！」

が、当然彼女も逃がす気はゼロ

その刹那……

ブワッと、何やら毒々しい色の霧に包まれた

「な、なんだこれ？」

足を止め、一瞬疑問に思う

が、それがいけなかった

「コンパロコンパロ……毒よ、集まれっ！」  
何やら怪しげな呪文を耳にしたその瞬間

「……っ！……！」

なんだこれ！？く、苦しい

「ふふふ、どうかしら？スーさんの毒の味は」  
毒だと？

くっ、まさか彼女が……！

「う……ぐ……ゲホッ！」

これはやばい、喉は痛いし頭は痛いし……

ドサッ

更には眩暈に襲われ、たまらずその場に倒れ込んだ

「おい正也！どうしたんだ！」

異変に気付き、声をあげるガリバー

「あ……が……」

もう駄目だ、立ち上がることもすら出来ない  
俺、ここで死ぬのか？

「正也、おいしっかりしろ！」

だが……これだけは言わせてほしい

「どうしてお前は……平気……なん……だ……よ」  
どうしてもこれだけは腑に落ちなかった

ガクツと、そこで俺の意識は途耐えた



「ん・・・んん？」

閉じていた瞼を開き、よいしょと起き上がる  
そっぴや俺、いつの間に寝ていたんだ？

「ここは・・・一体？」

辺りを見渡してみると目の前には大きな川が流れており、俺は今そ  
の川の畔に座り込んでいた

ここはどこなんだ？見慣れない場所だな

てかそれよりも・・・

「おーいガリバー、どこ行っただ？」

何故か俺の傍らにいたはずのガリバーがいなくなっている  
全くあいつは、どこほつつき歩いてるんだ  
というかそもそも現状が全く掴めない  
何故俺はこんな所に？

「お、ようやく気がついたかい」

すると突如、左の方から急に声がする

「あんだ、新しくここに来なすった幽霊だろ？」

そこには赤髪でツインテールの女性が鎌をかついで俺の方を覗きこ  
んでいた

てか幽霊って何ぞ？

「ええと、ここはどこなんですか？」

「喋る幽霊とはまた珍しいねえ」

何か江戸っ子みたいな喋り方だなこの人

言ってる事の意味はさっぱし分かんが

「ここは三途の川、そんでもってあたいはここで船渡しをしてるって訳さ」

「三途の川あ？」

それってもしかしてあの世とこの世の分かれ目に流れてるっていうあれか？

いやいや、現実になんな川あるわけないジャマイカ

きつとこの川の名前が「三途の川」っていうだけなんだろう

「ま、あんたみたいに死んだ事に気付いてない幽霊もいるからどう説明していいやら・・・」

いやだから幽霊って何だよ！？

てかもしかして俺、本当に死んだのか？

な、何言ってるんだハハハ、俺は今日もいつも通りバリバリに働いていたじゃないか

死ぬ要素なんて一つも見当たらない

全く、この人もジョークがお上手ですなあ

「それよりもほら、船渡ししてやるから寄越しな」

ほらほらと呟きながら俺の方に手を出して何かを要求している

「何をです？」

「何って渡し賃に決まってるじゃないか、あんたの懐に入ってるだろ？」

「？」

意味が分からず、言われるがままに懐を弄つてみると、何やらジャラジャラとした巾着袋が出てきたのだ

どうやら硬貨が入ってるみたいだが、そもそも俺は巾着袋なんざ持

ち歩いていない  
いつの間にこんな物が？

「へえ、結構入ってるじゃないか」

それを受け取った彼女は感心したかのように眺める

「確かに受け取ったよ、ささ、乗りな」

そう言っただけにとめてある木船に誘導する彼女

「そういえば一つ気になる事があるんですが・・・」

「何だい？」

とりあえず疑問に思った事を聞いてみる事にする

「何故貴方はそんな物騒な物を持ってるんですか？」

そう言っただけは彼女の持つてゐる鎌に指さす

「そりゃあたいが死神だからに決まってるじゃないか」

・・・はい？

今何と言った？

俺の聞き間違えでなければ・・・

「死神<sup>デス</sup>」って言っただけだよな

「それとあの・・・船渡して、一体どこまで行くの・・・ですか？」

茫然としながら次の質問に移る

「どっつて、そりゃ閻魔<sup>えんま</sup>様の所さ」

ゾクッ

その瞬間、ようやく状況を把握し、悪寒に見舞われた

え、閻魔様つてまさか・・・あの地獄にいる髭生やしてガハガハ笑ってる奴だよな

そんでもって針山とかあって、挙げ句の果てには舌を抜かれるっていう・・・

つてことはもしかして俺、本当に・・・？

「あ・・・あ・・・」

「ん？どうしたんだい？」

ワナワナと体が震える

そして目の前の彼女に背を向け・・・

「うわあああああああああ！！」

「ちよっ、どこ行くのさ！？」

どこまでも続く畔を全力ダッシュ

嘘だろ！？まさか本当に死神だつてのかよ！？ないないないない！  
もしあの船に乗ってしまったら俺はっ・・・俺はっ・・・！

とにかく俺は必死に走り続けた  
とにかく認めたくなかった

俺が死んだ事なんて・・・

（ぐっ、結構走ったな）

さしずめ彼女も追ってこれないだろうと、一瞬背後を確認する

「往生際の悪い幽霊だねえ、もう死んでるんだから諦めな」

「なっ!??」

何と、いつの間にか彼女はしっかりと俺の後をつけて来ていた  
ただし、彼女はただのんびりと歩いているだけである  
それなのに何故か俺の走るスピードと変わらないのだ  
まるで動く歩道を歩いてるかの如く

「嘘だ！俺はまだ死んでない!!」  
必死にそれを否定する

「後閻魔様って何かおっかないのを想像してるんだろぅがそんな怯えなくてもいい。ちよつと説教喰らうだけさ」

「それも嘘だ!!」

そんな甘い言葉にのせられてたまるか！

死神に捕まれば俺の人生は終わる・・・だから俺はこうして必死に走って逃げてる訳だが

何故か、彼女との距離が一向に開かない  
あつちはただ歩いてるだけなのに  
まるで引き戻されてるかのようだ

「困ったねえ、映姫様も待ちくたびれてるってのに、早く行かないとあたいが怒られるんだから」

「あんたが怒られようが俺には関係ねえ!」

「幽霊の癖にひどい事言うねえ」

ええい、会話してる場合か

何が何でも逃げ切つてやる

「捕まつてたまるかあああああ!」

・  
・  
や！

（ん？）

・  
・  
い！  
・  
・  
さや！

（何だ？）

正也！

「ん、んあ？」

何か必死で訴えかけてるかのような声に目を覚ました

「正也、やっと気がついたか！」

するとそこには俺の顔を覗きこんでいるガリバーの姿があった

「よかった、心配したんだぞ」

「んあ？ああ、すまなかつた」

しかしあれは何だったんだ？

夢にしては妙にリアルだったけど

「それよりもここは？」

気がつく俺は知らない部屋の布団で寝ていたのだ  
何でこんな所にいるんだろうか？

「あら、気がついたかしら」

するといきなり第三者から声がかけられる

見るとそこには赤と青のツートンカラーの服に十字マークの入った  
帽子を召した女性がいた  
もしかしてここって病院？

「ええと、貴方は？」

やこころえいりん  
「八意永琳、この永遠亭で薬師をやってるわ」  
はて、永遠亭とな？

「もしかしてここって病院なんですか？」

「ちよつと違うけど、そう思ってくれたらいいわ」

何かよく分からないね

「そういえば、何故俺はこんな所に？」

「貴方何も覚えてないのねえ」

ショックで記憶でも飛んだのか？って思うぐらい何も覚えてない  
確か、依頼を受けて出発したってのは覚えてるんだが

「無名の丘で貴方が倒れていたのを優曇華うとうげが見つけてね」  
無名の丘？

はっ、まさか！

「解毒薬である程度その場で応急処置はしたのだけど、ほとんど意識は無かったわね」  
そうか思いましたぞ

俺、あそこの人形に毒を喰らわされたのか！

「それでここまで連れて来たと？」

「間一髪といった所かしら、もう少しで全身に毒が回って死んでいたわ」

「なっ！」

俺ってそこまで生死の分かれ目を彷徨っていたのか  
となるとあの夢はもしかや・・・

「もう解毒は終えたから、後はそのまま安静にしていれば治るわ」

「あ、はい、ありがとうございます」

「私は仕事に戻るから、何かあったら呼びなさい」

そう言い残して部屋を後にする永琳さん

俺はただその後ろ姿を茫然と眺めていた

「そっぴや、何でお前平気なんだ？」

あの場にはこのげっ歯類もあり、しっかりと毒霧の中にいた  
なのにこいつはピンピンしている

「俺は毒には耐性があつてな」

何その体質、俺だけ不公平じゃないか



「それより正也、依頼の方はどうするんだ？その様子じゃ難しそうだが」

そついや俺、依頼の途中だったね

確かにまだダル気は感じる

無理すればぶっ倒れそうだ

「いんや」

それでも俺は・・・

「依頼主を長々と待たせる訳にはいかない、依頼は続行する」

まず第一に依頼主の事を考える、それが俺達依頼屋の心得って奴だ

さあて、どうしたものかね

T O B E C O N T I N U E D

第12章 鈴蘭採取、承りました（前編）（後書き）

次回、依頼達成なるか！？  
こつこ期待！

第13章 鈴蘭採取、承りました（後編）（前書き）

長らくお待たせしました  
後編です

### 第13章 鈴蘭採取、承りました（後編）

「依頼主を長々と待たせる訳にはいかない、依頼は続行する」

依頼屋の誇りにかけ、俺はそう宣言する

「待て、ここは俺が行った方がいいだろ。正也が行ったらまた毒を喰らわされる羽目になるぜ」

「何とぼけた事言ってるの？俺も行くに決まってんジャマイカ」

「分からないのか！？今度こそ本当に死ぬかもしれないんだぞ！？」  
確かにあのざまを見れば俺が行くのは無謀かもしれない

だが・・・

俺はそこで、あの人形の言葉を思い出す

「人間っていうのは皆自分勝手だわ、最初は可愛がってくれても飽きたら平気で捨てるんだもの」

確かに人間は自分勝手な所もあるかもしれない

だが、このまま納得するわけには行かない

「俺がここまでやられて黙ってる男だと思うか？それに自分勝手な輩と一緒にされたままってのも頂けない。だから・・・」

俺は一呼吸置き

「人間の何たるかを、分かんずやのあいっに教えてやろうと思うの

さ。この手でな」

悪い奴ばかりではない

思いやりのある人間だっているんだという事を

「はあ・・・何つつか、お前らしいな」

諦めた表情でため息をつくガリバー

「分かった、もうこれ以上は止めない。その代わり、死んでも俺は知らないからな」

「はは、大丈夫だって」

死ぬ事よりもむしろあの死神に再び追いかけられる事の方が俺としては怖い

・・・てか俺、何気にさっきの夢を鵜呑みにしてないか？

ええい、とにかく一刻も早く忘れよう

「さて、永琳さんの親切を裏切る事にはなってしまうが、ここから抜け出そうか」

俺は襖に手を当て、右にスライドさせる

目の前は廊下だった

「あんま大きい音立てんなよ」

「分かってるって」

抜け足差し脚で慎重に歩いていく

若干ギシギシと下の方から音がするので今にもバレるんじゃないかとビクついてもいる

ふと、進んでいくと壁際にまたしても襖があり、その奥から何やら声がしていた

「何だろ？」

俺は襖に耳を当てて聞いてみる

「えーりん、何か面白い事をしなさい」

「姫様、急にそんな事言われても困ります」

「ここんとこ暇で暇で仕方ないのよ！最近、妹紅は忙しいとか言つて殺し合いに付き合ってくれないし、うどんげに不死の薬を進めても『結構です』って言って相手にされないし、あの異変、だっと思つたより早く解決されちゃったし」

姫様と呼ばれた人が永琳さんに向かって何やらダダをこねている  
もしかしてここって貴族の屋敷なのか？

「そういえば貴方、誰かをここに連れて来ていたわね」

「ええ、鈴蘭畑で毒を喰らった少年なんですが」

「誰なのよそいつ」

「よく見たら彼、前に人里に診療しに行つた時に見かけたあの噂の依頼屋だったんです」

「もしかしてそいつ、紫が言つてた不思議な力を持つてるっていう？」

「ええ」

ていうかいつ俺を見たんだろうか？

それと紫さんお願いだから余計な事ベラベラと喋らないでください

「ならその人間をここに連れて来なさい。是非とも手合わせ願いたい物だわ」

「ですが姫様、彼は今寢室に寝かせているのでそれは・・・」

「何よ、それぐらいいいじゃない」

・・・何だ？このことなく親近感のある展開は  
しかしこの姫とやらも随分と強情だな

「はあ・・・分かりました連れてきます」

諦めたかのように溜息をつき、そう姫に告げる永琳さん

（やつべ、さつさとずらからないと）

そそくさとその場から遠退き、身近な部屋に身を潜める

ガラッ

さつきの部屋の襖が開く音がする  
そして中から出てくる銀髪ナース

ドクンドクンと俺の心臓はいつも以上に元気に脈打っている

（こっち来るなこっち来るなこっち来るな・・・）  
ひたすらにその事だけを祈り続けた

すると願いが通じたのか、彼女はそのまま反対方向の寢室の方へと  
歩いていった

「あ、あぶねえ・・・」

もしこの場で見つかったりしたら確実に怪しまれる  
増してや殺し合いを平気で行うような姫の相手なんて真っ平御免だ

でも、どっちにしろもうすぐ俺が抜け出した事がバレてしまう。こ  
の建物から早く抜け出さないと

「正也、モタモタしてたらあの女が探しに来るぞ」

「ああ、分かってる」

俺はその部屋から出て、廊下を速足で歩いていった

あの後、永遠亭とやらを抜け出し、再び地図を頼りに竹林の中を彷徨っているわけであるが・・・

「あるえ？こっちの道でよかつたんだっけ？」

地図には永遠亭の位置も記されており、無名の丘もそう遠くない場所にあるらしいのだが、見るのと実際歩くのでは全く違った  
何せどこ見渡しても竹だらけだし、看板やら目印やらも無い



「はあー、萎えるな・・・」

「おいおい、段々と自暴自棄に陥ってるぞ」

そりゃそうだろう、もはや地図なんてあてにならないこの状況の下に置かれてる訳だし・・・

俺はしばらく半ば地図通り、半ばヤケクソになって歩き続けた・・・

すると・・・

「おい正也、あれ」

「ん？」

突然、ガリバーが向こうの方を指さして言った  
それにつられ、指された方に顔を向けてみると

「おお、もしかして出口か!？」

何と、前方数十メートル先の竹の隙間から日光が入り込んでいるのが確認出来た

「よし、一気に行くぞ!」

「急に元気になったな」

地図が正しければ、鈴蘭畑はもう目の前だ      やったね、すごいね  
俺は勢いに乗り、ダッシュで竹林を駆け抜けた

「あつるええ??ここって本当に無名の丘で合ってるの?」  
竹林を抜け出し、景色もガラリと変わって一息ついたのはいいのだが・・・

「正也、ここ向日葵畑じゃねえか」  
そう、鈴蘭が生えていたはずなのに何故か向日葵に変わっているのだった

何だ、このアンビリーバボーな光景は・・・

「やっぱり道間違えたのかな」  
また引き返してあの竹林に戻らにやいかんのかと思うと何だか虚しくなってきた

「おい、あそこに誰がいるぞ」  
「ほえ?」

ガリバーがいきなりそんな事を言い出し、それにつられて指差した方向を見ると・・・

「本当だ、誰だろ?」  
日傘をさした女性が向日葵に囲まれ、ポツンと立っていた  
何だろうな、何故か本能的に近づきたくない

「あの女にでも(場所を)聞いてみたらどうだ?」  
「ええー、でも何かあの怪しいし・・・」

なんかこう・・・夢に出てきた死神と似たような怪しげなオーラが伝わってくる

「そこにいるのは誰かしら？」

すると突然、その女性はこちらを振り向く事もなく、まるで最初からそこにいるのが分かっているかのように尋ねてきたのだ。

「そんな所に立ってないでこっちに来なさいな」  
さらにそんな事を言われた

(ゴクリ・・・)

多少怯えながらも一歩一歩足を前に進めていく  
そして彼女のすぐ傍で立ち止まった

うーん、別に見た感じ悪そうな人でもないな・・・  
せっかくだからこの人に聞いてみるとするか

「あ、あの、少しお尋ねしたい事があるんですが・・・」  
「まずは名乗るのが筋合いじゃなくて？」

今だ振り向かずにそう答える彼女  
それもそうだったな、最近自ら名乗るって事をしていない希ガス

「ええと、人里で依頼屋を営んでいる岡野正也という者です」

「あら、ひよつとして貴方、あの噂の人間？」

「え？あ、はい・・・」

どうやら「あの噂の」という形で俺の事は広まっているらしい

「私は風見幽香よ、よろしく」

すると彼女・・・幽香さんは初めてこちらを振り向き、にっこりスマイルで応じてくれた

うわあ、なんかこう・・・思ったより美人さんだ

「それで、聞きたい事っていうのは？」

気前よく先程の質問に答えようとしてくれる彼女

「ええと、無名の丘に行きたいんですが、道に迷ってしまって・・・」

最初はすんなり行けたはずなんだが・・・

「あら貴方、もしかしてメデイスンのお友達か何か？」

すると幽香さんはそんな風に答えた

メデイスン？誰だそれ？

「いえ、違いますけど・・・」

とにかく俺はそんな名前の人と友になった覚えはないのでそう答える

「ならやめといた方がいいわね、あの子はあそこに捨てられて以来人間に対して敵意を向けるようになったの」

ああ、もしかしてあの人形の名前か

しかし誰が名付けたんだ？

「実は一度行っただんですが、毒を喰らわされてしまって・・・」

そして俺はその後の経緯と目的を説明した

「・・・という訳なんです」

「成程、それで無名の丘に・・・」

日傘をくるくると回転させながら彼女は答える

「でも今のままもう一度行っても同じ事の繰り返しね」

うぐ・・・まあそりやそうかもしれんが、俺にも事情って物がある

「でも、どうしても行かなければならないんです。何かいい策とかはありませんか？」

何が何でもあの人形・・・メデイスンに一矢報いなければ気が済まないのだ

「そうね・・・策とまではいかないけれど、一つだけヒントをあげるわ」

ヒント？一体何だろ？

微かな期待を胸に耳を傾ける

「あの子、気が強そうに見えるけど、実はとっても騙されやすいの。騙されやすいだと？うーん、そうには見えなかったけどな・・・」

「騙されやすいってというのは一体どういう？」

「うふふ、そうね・・・」

何だろうこの人、急に楽しげな表情になったような・・・

「同情を誘う演技なんてどうかしら？」

「同情を誘うねえ・・・」

あの人形が同情する物っていったら・・・

「是非とも試してみてはいかが？裏を返せばあの子、とってもいいりがいいがあって面白いと思うから」

うふふと微笑んでそう付けたす彼女

何か、この人からさっ気のような物を感じるんだが気の所為だよな・・・

「ちなみに無名の丘はね・・・」

そして彼女は肝心の行き方を説明し始める

「・・・て行けば辿りつけると思うわ」

「は、はあ・・・」

正直不安もあるけどすごい分かりやすいデモンストレーションだった後はドジ踏んで迷わない事を祈るのみ

「色々ありがとうございました。それではこれで」

「ええ、健闘を祈ってるわ」

軽く会釈をし、幽香さんと別れ、向日葵畑を後にする

「それより正也、作戦は思いついたのか？」

さっきの話を眠たそうに聞いていたガリバーが問う

「作戦・・・ねえ」

俺は頭の中を整理し始める

日傘の人曰く、メデイスンは人間に対して敵対心を持っているとの事  
また、騙されやすいじりがいがあるとの事。まあいじりがいが多い  
うのこのうってのはとりあえず置いとくとして

（何か、もっと材料が欲しいな・・・）

そこで俺は断片的に記憶に残っている彼女の言葉を思い出す・・・

『その人間！何勝手に持ってこうしてるのよ！』

あの子は俺が勝手に鈴蘭を持っていこうとしているのが気に食わなかった

うーん、思いつく物がないな・・・

『私はもともとここに捨てられた人形・・・  
捨てられたのか・・・可哀想に』

『コンパロコンパロ・・・毒よ、集まれ！』  
一体どこで覚えたんだよその呪文・・・

『それに最近の人形の扱いと来たら醜いモンよ、武器として扱った  
り儀式の供物にしたり・・・』  
日本でも嫉妬心いばりが爆発した時なんか釘を打ち付けてる奴とかいる  
もんな・・・

ん？待てよ・・・何かが引つ掛かる  
作戦を立てる上で何か重要なキーワードがある気がする・・・

(・・・そうか！)  
俺は‘ある単語’に着目し、ついでに作戦も閃いた

「何か思いついたのか？」  
「ふふふ、まあな・・・」  
そして俺はガリバーに向かってこう言った

「この作戦、成功するか否かはお前にかかっている」

く無名の丘にてく

「はあ・・・憂鬱な気分だわ、スーさんもそう思わない？」

何せどこの馬の骨かも分からない人間が易々と足を踏み入れてくるなりスーさんを持つてこうとするし、拳げ句の果てには嫌な過去まで思い出させてくれるし

「安心してスーさん、貴方達は誰にも渡さないわ」

そつえばあの人間、いつの間にか居なくなっただけど、もしかして逃げたのかしら？

でもまさか普通の人間が毒を喰らってまともに歩けるはずがない

「ねえ、君」

「！？」

突然、背後から誰かに話しかけられた

「だ、誰よ！？」

振り替えてみるとそこには・・・

「え、私？私はガリコよ」

自分より背の低い赤い人形が浮いていた



「もしかして貴方もここに捨てられたの？」

「そうなの、こわーいおじさんに捨てられちゃったの」  
この子声までガラガラだけど大丈夫かな？

「もう私、寂しくて寂しくて・・・どうすればいいか分からないの」  
可哀想に、また私達の仲間が人間の犠牲にされてしまうなんて・・・

「それは気の毒ね、私でよければ友達になってあげるわ」

「えっ、本当に？」

「ええ、勿論よ」

今まではスーさん一筋だったけど、新しく共感できる仲間が増えるって  
いうのは私とても嬉しい事だしね

「あ・・・ああっ！」

「どうしたの？」

突然ガリコが驚いたような声をあげる

「わ、私をす、捨てたひ・・・人がっ！」

「え？何？」

私を捨てた人？

もしかしてさっき言ってたおじさんの事かしら？

「こ・・・こつちに来てる！」

「えー！どこから！？」

「あ・・・貴方の・・・う・・・後ろ」

「後ろ？」

言われるままに私は後ろを振り向いてみる

（っ・・・！あいつは！）

「よお、お前、メデイスンって言うんだっけか？」

一人の人間が徐々にこちらに近づいてくるのが確認出来た  
しかもあいつ、さっきの人間！

「い、何時の間n「おおつと、動くんじゃねえ」・・・っ！!?」

さらにまた近くから声がかかり、そこには既に人形は<sup>あそこ</sup>おらず、いつの間にか一匹のヤマアラシが私の肩に乗って片方の前足を耳元に構えていたのだ

まさか・・・あの人形の正体って！！

「幽香さんから聞いたけど、お前本当に騙されやすいんだな」

幽香ってまさか、あのタチの悪い日傘妖怪の事！？

一体どこで会ったのよ！

「だ、騙したわねっ！これだから人間は信用できない！」

「騙される方が悪いのさ。それとお前は人間という生き物をまるで理解していない」

「な、何ですって？」

まるで私が悪者みたいな言い草じゃない

徐々に徐々にあいつとの間隔が狭まっていく

「確かにあなたの言う通り、人間界限には悪しき心を持ったり、物を平気で捨てるような冷酷な輩は存在する」

「そ、そうよ、人間は皆愚かだわ！人形の気持ちなんて分からないのよ！」

だがな、と目の前の人間は一息置き

「ちゃんといいい奴だっているんだ、そいつらも前者と一括りにするんじゃない」

いい奴ですって？人間なんかのどこがいいのよ

遂にあいつは私のすぐ目の前まで接近し、右手を強く握りしめた

「俺の言ってる事が気に食わないなら・・・」  
そして私に向かってダッ！と駆けだす

（まずい・・・！）

動きたくても私の肩には未だにヤマアラシがしっかりと構えている  
もはや逃げ道など残されていなかった

（やられる・・・？この私が・・・こんな・・・人間に？）

「閻魔様の説教でも受けてこい！この分からずやが！」

刹那、ゴン！という鈍い音が響き、そこで意識を失った

その後、再び迷いの竹林にて

「いやあ、まさかあそこまでうまく行くとはな」

メディスンに勝利し、遠慮なく鈴蘭を頂いた俺は、現在その帰宅途中である

「本当に勘弁してほしかったぜ、なんだよ、ガリコ、って」

「ぷぷぷ、そこは俺のネーミングセンスに感謝すべきさ。あとお前声枯れすぎ」

「仕方ねえだろオスなんだから」

ちなみに今回俺の考えた作戦は・・・

武器の人形に変身したガリバーにあいつの元へと向かわせる

迫真の演技で同情を誘う

### 俺登場

俺に氣を取られてる隙にガリバーが変身解除し、肩に乗って牽制する

綺麗事を言っ て右手でパン！

正直自身無かったけど、でもあまりにもうまく行ったので俺の方が驚いた

元々人形が武器として扱われているなんて微塵も知らなかったのだが、メディスンの発言にそれらしきワードがあった為にこの作戦を

成り立たせることが出来たのだ  
そして当然ガリバーの変身する武器にもリストアップされていたの  
でこれまた好都合

「それより正也」

「ん？」

「お前の最後の台詞なんだが」

「閻魔様がどうのこうのって奴か？」

無論この台詞は俺が見た夢を元にした思いつきのアドリブだ、特別  
深い意味など無い

「お前もあいつの説教を受けた事があるのか？」  
え、『お前も』って何ぞ？

「いや別に無いけど、何故？」

「ちよつと苦い過去を思い出してな」

苦い過去？ 一体何だろうか

「何があつたの？」

「俺がお前と出会う前、野良だった頃に亡霊の食べ物をパクって幽  
体離脱させられた事があつてな・・・」

何でそんな事したんだよ、てか幽体離脱ってまたオカルトな・・・

「気がついてみると目の前には緑髪の閻魔がいてな、そこで俺は『  
人の食べ物を盗むな』やら『態度に気をつけろ』やらさんざん言わ  
れてうんざりだったって訳」

「いや、それ100%正論だろ」

全く、よくそんなん生きてこれたな

・・・て、もしかして閻魔様って本当にいるの？

こいつの話からするといえるっばいけど・・・

あれって夢だったのか？

「そっぴやさ、閻魔様以外にそこで誰か見た？」

「ああ・・・そっぴやさ」

ガリバーは一呼吸置き

「赤髪ツインテールで江戸っ子みtainな口調の死神なら居たな」

「・・・え？」

一瞬、俺の思考が停止した

赤髪ツインテール？江戸っ子みtainな口調？

・・・何故だろう、俺、実際にその人に会ったような気がしてならなかった

ハハハ、何言ってるんだ俺、所詮夢の話じゃないか

ほら、こいつもたまたま俺と同じ夢を見ただけとかな？な？

「それよりお前、何でそんな事聞くんだ？もしかしてそいつと会った事があるのか？」

「し、知らない、俺はそんな人、知らない」

「何をそんなに動揺してるんだよ」

「ち、違っ！ちよつと寒気がしたから震えていただけ！」

畜生、こっぴう時だけ無駄に鋭いんだから・・・いや、俺は本当にそんな人知らない、名前すら知らない

兎にも角にもそっぴ自分に暗示をかけて誤魔化す

今気付いたけど、俺・・・・・・・・

一体どこに向かって歩いてるんだろう？

く人里にてく

あの後、焦った俺は大声で助けを求めまくって叫び続け、その声に驚いて飛んで来てくれたもんぺの女性に人里まで案内してくれましたとさ、めでたしめでたし

彼女曰く、「私もちょうど慧音の元に行く所だった」との事、慧音さんとは友人だったらしい

それはさておき・・・

「魔理沙、約束の鈴蘭だ、持って来たぞ」

「こりゃ御苦労さん、遅かったじゃないか」  
全く、こちらら散々だったんだぞ

「じゃあ約束通り明日の夜白玉楼まで連れてってやるぜ」

「ああ、俺の家の前で待ち合わせな」

じゃあなと軽く会釈をし、簾に跨いでどこかに飛んでいく彼女  
これにて依頼完了である

「も、もう駄目ヘトヘト、寝る」

「俺もだ、こんな疲れたのは野良時代以降だ」

取り憑かれたように布団を敷いて横たわる俺とガリバー

（ああ、でももうすぐ晩御飯だっけ・・・）

ええい、今日はもう何もする気になれん、適当に食堂行つて済ませよう

とりあえず今日のまとめ：未知の世界に飛び込む際には事前に情報を集めた方がいい

これがなかなか出来ないんだよなあ

TO BE CONTINUED



### 第13章 鈴蘭採取、承りました（後編）（後書き）

あまり話が進展しない、何とかしないと

## 第14章 悪戯犯を捕まえる！（前書き）

新年明けましておめでとうございます  
皆さんの健康を祈っています

## 第14章 悪戯犯を捕まえる！

「ここは稗田家書斎」

さらさらさらりん

「それでは次は貴方の能力について教えてもらえますか？」

「おいおい、俺はそんな大層な物は持っていないぞ？」

とある日の朝、俺はいつものように店開きをしていると、常連客である稗田嬢がやって来て、『屋敷まで来てくれませんか？』と言うモンで行かせてもらい、俺の事を幻想郷縁起に書き留めておきたいとの事らしいんで今現在こうして質問にお答えしてる。いやー、朝から張り切ってるねえ

ちなみに何故毎日のように情報屋<sup>うち</sup>に来るのかと聞いたところ、天狗の作る記事は大抵当てにならず、俺んトコのがより有益な情報があるんだと

さらに言うとその天狗もウチの常連なのだが、どちらかと言うとネタの埋め合わせが主な目的といった所か・・・

汚い、さすが天狗汚い

「でも紫様が情報収集に便利な能力を持っていると」

「ははは、バレちゃ仕方ないな」

紫姉ちゃんも余計な事言わなくていいのに

「そうだな、俺の能力h（ドン！）のわっ！??」  
ドサッ

突然頭に何かがぶつかったような衝撃が走り、転がるように左に倒れる

「いてて、一体何だつて「きゃっ」……!？」  
すると今度は目の前の嬢ちゃんの頭に着いていた花飾りが突然消えたのだ

な、なんだこれ？もしかして怪奇現象!？

「一体何が起こったんだ？」

俺だって何もしてないのにいきなり倒れるし……

「いえ、私にもよく……あつ」

「ん？何か思い出したか？」

「ええ、思い当たる節が一つだけ……」

はあ……何か訳の分からん事に巻き込まれたな

く正也家く

「ふあゝあ、よく寝た」

散々だった一日が終わって次の日の朝

これでもかというくらい寝てしまったので少し頭が痛い  
未だガリバーは俺の隣で鼾いびきをかいている

「おーい起きろ、朝だぞ」

「ん・んあ」

体を揺すり、目を覚ます

「ほら、布団片付けるからどいたどいた」

「あ、ああそうだな・・・ってうわっ!??」

すると突然ガリバーが俺の顔を見て驚きの声をあげる

「お前その顔どうしたんだ!??」

「へ?顔?」

言ってる意味が分からない

寝ぼけてるんだろうか?

「へ?じゃなくて顔だ顔!鏡で見てみる」

「?」

訳が分からぬまま言われた通りタンスから手鏡を取り出し、それを  
自分の顔の手前に持つてくる  
するとそこには・・・

「なっ!?!」

俺の顔がマジックで落書きされ、醜い有様と化していたのだ

「な、な、な、な、な……」

不意の出来事に俺は愕然とした

「なんっじゃこりゃあああああああ!?!」

これが今日の始まりだった  
はあ……最悪だ

「一体誰だ書いた奴は!?!さてはガリバーか!?!」

「はあ?何で俺なんだよ」

「じゃあ一体誰さ!?!」

「知らねーよ!」

くそう、ただでさえ朝は機嫌悪いというのに、さらに悪化したじゃないか

「おい、正也あれ・・・」

「ん？」

すると突然ガリバーが卓袱台のある方に指差した  
見てみるとそこには一枚の紙が置かれてあり、何か書いてあるよう  
だった

「何だ？」

俺はそれを手に取り、書いてある字を読んでも

哀れな人間へ

気に入ってくれたかしら？私達が書いたその顔、素敵でしょ？  
ふふふ、鍵を盗まれるなんて、とんだ間抜けだわ  
さあさあ悔しかったら私達を捕まえてみなさいお馬鹿さん

「・・・は、はは」

そうか、俺、悪戯されたのか

「はははははははははは」

なあと、家の近所にもやんちゃ坊主の一人や二人ぐらい普通にいた

じゃないか、今に始まった事じゃないさ  
キレル事はない、ピークールだピークール

グ  
シ  
ャ  
ツ

[illegible]

俺はその紙を思いつきり握りつぶし、渾身の叫びをかます

何がビークールだ！勝手に人ん家侵入しやがって！

朝嫌いの俺に対する嫌がらせとしか思えん！

- ・
- ・
- ・
- ・
- つてそれより

「鍵を盗まれた？」

半分苛立ち、半分冷静さを取り戻して気になった箇所について考える

# ん?

ふと、先程の卓袱台を見るとポツンと家の鍵が置かれてあるのに気がついた

「何でこんなところに鍵が？」

出かける時以外はタンスの中に閉まつてある筈だ  
こんな所に置いた覚えはない

ということは誰かがここに置いたという事か……まあ恐らくこのメモを書き残していった奴だとは思うが



（じゃあ一体どうやって？）

鍵を使って侵入したのは分かった。なら肝心の鍵はいつ盗んだんだ？

「そっぴゃあよあ」

「どうしたガリバー？」

何か思い当たる節でもあるのか、突然ガリバーが喋り出した

「昨日俺たちが鈴蘭を取りに行ってる間、依頼主の白黒女がここで留守番してなかったか？」

白黒女っていうのは言うまでもなく魔理沙の事だろう

「それがどうして・・・まさか！」

「ああ、恐らくそいつに盗まれたな」

く・・・やられた、無駄に計画的過ぎる

もしかしていつぞやの恨みをここで晴らしたというのかっ

「なら悪戯犯は魔理沙という事か？」

「それがそうとも思えんな」

ガリバーは先程の紙を手に取り・・・

「男勝りなあいつがこんな言葉遣いで文を書くとは思えん」

「でも、犯人を特定されないようにあえてそんな書き方をしたっていう可能性も・・・」

「どうかな」

さらにガリバーは続ける

「見て分かる通り、私達」と書いてあるだろう」

「私達・・・ってことはまさか」

「そう、犯人は複数いるって事だ」

ぐっ、集団犯行か・・・

考えるだけで頭痛くなってきた

後色々面倒な事に巻き込まれたみたいだ

「んで、これからどうする?」

「はは、言われるまでもなく既に答えは出ている」

俺は一息置き、力強く宣言する

「悪戯犯は全員この手でとっ捕まえてやる!」

悠々と挑発に乗る辺り大人げないだって? 何とでも言っ方がいいさ  
何としても犯人を突き止めなければ気が済まないのだ

顔の落書きを落とし、俺とガリバーは犯人を突き止めるべく家を出  
発した

無論朝飯なんてこつちのが気がかりで食べてる暇なんて無かったのさ

「ところで今回の件と魔理沙ってどう関与してるんだらう?」

「さあな、それについては今の所何も言えん」

犯人の一人という解釈でいいのか・・・いや、もしくは

「ん?」

あれこれ思考を巡らせていると、何やら酒屋のおっちゃんが店の前でうねっている姿が見えた

何かあつたんだらうか?

「すみません、何かあつたんですか?」

「おう、依頼屋の坊主か・・・」

いつもより声のトーンが低い

よっぽど辛い事があつたんだらう

するとおっちゃんはこんな事を言い出したのだ

「他でもない、妖精がウチに悪さしに来やがった」

「妖精?」

妖精というのは幻想郷の至る所にいる虫k・・・じゃなくて、自然から発生する生命体の事で、自然がある限りいくらでも湧いて出てくるらしい

主に人妖に悪戯を仕掛ける事を生業としており、実際俺も依頼に向かう途中に何度かエンカウントしており、その度にちょっかい掛けられるのでたまったモンではない

基本的に手のひらサイズの者が大半で能力は持つておらず、悪戯したり弾幕打ったりする程度の力しかないが、中には見た目小学生ぐらいの大きさと能力を持つ者もいるんだとか

無論、これらの事は全て初めから知っていた訳ではなく、慧音さんから教えてもらった事である

とまあ解説はここまでにして（誰に言ってるんだよ）

「そんなのそこらじゅうに居るんですからいちいち相手にしてちゃキリが無いですよ」

「違う、近所のガキンちよぐらいの大きさの妖精だったんでい」  
ふむ、近所のガキンちよぐらいとな・・・

そこで俺はとあるスケバン口調の水色妖精を思い出した  
もしかしてあの子がおっちゃんの店に忍び込んだ犯人では？

「たまたま倉庫の中を漁ってるのを見つけてな、とっ捕まえようとしたら強い光を浴びせられちまってな、暫く目が開けられずに蹲うずくまっていた」

強い光？

能力か何かだろうか？

とすると氷精とは関係ないのかも知れない

「その子、本当に妖精だったんですか？」

「ああ、背中に羽が生えてた。この目で見たんだから間違いない」

自信満々に胸を張って宣言するおっちゃん

「そうだ坊主、もしそいつを見かけたら代わりにとっ捕まえてくんねえか？後で自慢の一品をくれてやつからさ」

「ええ、そうしたいのは山々なんですが・・・実は俺達も諸事情で犯人探しをしている所です」

「何、坊主も何かやられたのか？」

「はい、顔に落書きされてしまいました」

朝からうんざりでしたよと続ける

「なら無理は言わねえ、坊主の問題を優先してくれ」

「あ、はい」

軽く会釈し、おっちゃんと別れ、その場を立ち去った  
さあて、続行するかね

「おい大林い」

ドンドンと大林の営む情報屋の戸を叩く

が、一向に返事は無く、入ろうと思っても鍵がかかっている

「留守なんじゃねえか？」

「うーん、普段は居るんだけどな」

情報収集にでも出かけてるんだろうか？

何故大林の店に来たのかと言うとあいつなら何か掴んでるかも知れないと思ったからである

だが、頼みの綱が居ないとなるとますます迷宮入りだ

「あーもう、私達って一体誰なんだよ」

悪戯する為だけに俺ん家忍び込みやがって・・・

ん？悪戯？

その単語が頭の中でやたら引っ掛かったその時

ぐう

「おい、腹鳴ってるぞ」

「そりゃ朝飯食ってないからなあ」

本格的に腹が減って来た

「ええいもう、団子屋で軽く済ませて来よう」

「家で食って来たら良かったじゃねえか」

「うるさい！その時はそれ所じゃなかったんだよ」

何がともあれ腹が減ってはまともに物事も考えられそうに無かったので、団子屋へと直行した

皆はちゃんと朝飯摂ろうな（だから誰にry）

ガラッ

「おばちゃん、団子二皿ちょうだい」  
まあ何だかんだでガリバーも腹が減って来たとの事なので二人揃ってここでブレイクファストを済ませる事にする

「はいよお待ち」

団子の乗った皿を持ってくるおばちゃん  
ここは早くておいしい事で評判がある

「では早速・・・」

はむつと三食団子を頬張る人間一人と動物一匹  
ふむ、今日もなかなかいけるな

「そうそう坊や」

「ん、はんへふは？」

食いながら喋るなんざ行儀の悪い事・・・て俺か

「この辺りで子供ぐらいの大きさの妖精を見なかったかい？」  
ん、妖精だと？

何だこのデジャヴ臭のする質問は

「いえ、見なかったですね。それがどうかしたんですか？」

「はあ・・・それがねえ」

溜息をつき、続けてこう言った

「店開きをしていたら、急に背後から驚かされてねえ」

「驚かされた？」

「それも朝早く回りに誰もいない時にだよ、全然気がつかなくて・・・それでギックリ腰になってしまってたねえ」

アイタタタと声を漏らすおばちゃん

しかし酒屋のおっちゃんといい団子屋のおばちゃんといい、今日は  
やたらと妖精絡みの事件が起こってるような

「それはお気の毒ですね」

「ええ、それとクリーニング屋のタエコさんも何やらちよっかいを  
出されただの何だの・・・」

「何だつて？」

一体この人里で何が起こってるって言っただ

「久々に事件の匂いがするな」

「いや、久々ではないと思うが・・・」

はあ・・・頭が痛い



頭痛薬飲みたいぜ・・・

「かなり頭を抱えてるわね」

「ふふふ、これは大成功といった所じゃない？」

「またそうやって調子に乗る」

建物の影からひっそりと一人の人間を覗き見る妖精達  
無論、当の本人はその事に気づいていない

「まさか魔理沙を何の疑いも無く家に入れるなんて、余程気が抜けてるのかしら」

「正直ここまでうまく行くとは思わなかったわ」

ワイワイキャツキャと自分達の成果に満足する

「ちょっと二人とも」

すると様子を見ていた一人の妖精が他の妖精に声をかける

「あいつが動き出したわよ」

そう言つて指をさした先には団子屋を後にして向こうに去つて行く人間の姿があつた

「せつかくだからもう一泡吹かせてみない？」

「でも、流石にそれは・・・」

「大丈夫よ、向こうには見えてないんだし、恐るるに足らずだわ」  
その中で自信満々に胸を張つて宣言する者が一人（一匹）

他の二人は諦めた表情になり・・・

「分かつたわ、行つてきなさい」

「ドジ踏んでバレない様にね」

「任せなさい！」

またもえっへんと胸を張り、少年の背後を追つて走り出した

その姿は、誰にも見られていない

「ういゝ、食つた食つた」

朝食を済まし、犯人探しを再開するべくぶらぶらと人里を歩き出した

「しっかし今日は一体全体どうなってるんだ？」

聞く限り人里のあちこちで妖精の悪戯に遭ってるみたいだし・・・

「なあ、もしかしてお前の家に忍び込んだのも・・・」

「ああ、そうかもしれない」

でもまだはつきりと決まった訳ではない

それに魔理沙がどう関わっているのかを知らなければどうにも

「んで、どうやって犯人を探すつもりだ？」

「うーん、当てずっぽうに探し回っても見つかりそうにないし、どうしたものか」わわっ！（ドサツ）「!？」

あれこれ思考を巡らせていると突然後ろの方から何やら声がし、誰かがコケた様な音がした

「いたたた・・・」

その声は俺のすぐ真後ろから聞こえてくる  
だが、そこには誰もいない

「んん？」

ジト目で誰もいない筈の場所を吟味する

「くんくん・・・!!っ正也、妖精の匂いがする」

「何だと？」

どんな匂いなのかは分かんがコイツの嗅覚は一級品だ、警察犬と肩を並べられるぐらいに

「ちよっとルナ、何やってんのよ!」

「ち、ちよつと躓<sup>つまず</sup>いただけよ！」

「ほら、その人間が訝<sup>あや</sup>しげな顔してるじゃない」

「・・・あん？」

その‘誰もいないはずの空間’からまたも声が聞こえてくる  
しかも今度は三方向から

（誰か・・・いる？）

ゴクリと唾を飲み込み、自分の足元に右手を伸ばす

その時・・・

パキン！

恒例の効果音が再生された

すると誰もいない筈の空間から三匹の妖精が姿を現したのだ

「だ・・・誰だこいつら！？」

一人は先程コケたブロンドドリルヘアー、そしてその傍らに浮遊しているのは、一人はショートツインテ、もう一人はロングの妖精だった

「しまった、しっかり姿を見られてるみたいだわ」

「何で能力が解けるのよ！」

「今はそんな事どうでもいいわよ！」

予想外の事態にあたふたする彼女達

そうか・・・そういう事だったのか

「まさか・・・あんたらが今回の悪戯犯か？」

近所のガキぐらいの大きさ、そして背中には羽、完璧におっちゃん  
の証言と一致している

「ふふふ、ばれちゃ仕方ないわね」

その中のドリルヘアが動揺しつつも先程の質問に応えた

「そうよ、酒屋の倉庫を荒らしたのも団子屋のおばちゃんを驚かしたのも・・・そしてあんたの家に忍び込んだのもね」

「何だと？じゃあ魔理沙は・・・」

「魔理沙にはあんたの家から鍵を盗み出すのを頼んでおいてね、まさか本当にうまく行くとは思わなかったわ」

「ぐっ・・・！」

まさか、魔理沙はこいつらの悪戯計画に加担したという事なのかっ！

「やれやれ、妖精の分際で恩人の家に忍び込むなんざ、いい度胸してやがるぜ」

「いずれにせよ、お前らはここでとっ捕まえてやる」

右の袖を腕まくりし、戦闘態勢に入る

「あはは無理無理、サニー、宜しく」

「任せなさい」

するとサニーと呼ばれたショートツインテが俺の前に出る

（く・・・来るか？）

何が来てもいいように力強く右手を構える

・・・が、その直後

キーン！

「・・・・・・・・・・・・・・・・だあっ！！！！？」

突如眩い光が視界を遮る

直視してしまった為、激しく目を痛めた

「がああああああああああ貴様等あああああああああああ  
ああ！！！」

「あああああああああ目が、目があああああああああああ  
ああ！！！」

その場に蹲るガリバーと俺

今になってム○力の気持ちがよく分かった

おのれ、小癩こしゃくな真似を・・・・！！

「今のうちに逃げるわよ！」

「ちよつとやり過ぎじゃない？」

ぐ・・・・・・・・逃がしてたまる・・・・か！

「ぐ・・・喰らいやがれ！」

ガリバーが目を押さえつつ、ヤケクソに弾を放つ

「へへーん、そんなの当たらないわよ」

「さつきコケた癖に随分余裕ね」

「あ、あれはたまたま転がってた石が悪いのよ！」  
「が、どうやら一発も当たっていない模様」

やはり目を潰されたのが響いているみたいだ

「ぐう、何たる不覚」

とにかく、目が見えるようになれば・・・

「ぐーぬぬぬぬ」

もう少し、あともう少し

俺は必死で目を開けようとしていた

「ぬおおおおおお」

だんだん目の痛みもとれてきた

「活目っ！」

そしてようやく目が開けられるようになり、パツと見開いて辺りを見渡した

が、しかし・・・

ヒュウウウウ

木の葉が風にあおられているその風景の中に、今度こそ妖精達は姿を消していた

「くそ、逃げられたか」

そりゃあれだけ余裕与えりゃ逃げられるだろ常考

「くっそ悔しい」

つい対戦ゲームなんかで惜しくも敗れた時の台詞を漏らしてしまった

「おいガリバー、大丈夫か？」

「ん、んあ、何とか」

くっ、可愛らしい顔してエグい事しよる

あと一步の所だったのに

「はあ・・・帰るか」

「意外と諦め早いな」

「仕方ないだろう、見失ったんだから」

そう言っただけガリバーを肩に乗せ、しぶしぶ帰宅する俺であった

今回は不覚に終わったが今度会ったら必ずやとっ捕まえてやる



「危ない所だったわね」

「もう、ルナのせいでしょう？」

「見つかった時はほんとにはらしたわ」

「またも建物の影に腰を下ろす三人方」

「悪戯好きではあるが、意外と小心者のようだった」

「まさか右手で触れただけでサニーの能力が解除されるなんて、あれが魔理沙の言ってた不思議な力ってやつかしら？」

「でもそんな能力今まで見た事も聞いた事もないわ」

「だが、当の本人もその力の正体は何なのかは未だに分からない」

「でも私が屈折させた日光はしっかり喰らったんだし、何でもかんでも防げるって訳じゃないみたいね」

「じゃあ別にそこまで恐れる程の相手じゃないわ」

「三人はしばし右手の力について討論していた」

「忍び寄る一つの影にも気付かずに・・・」

「その直後・・・」

「ボン！」

「モワモワモワモワ」

「な、何よこれ!？」

「一体どこからこんな物g・・・(ドサッ)」

「ちよつとサニー!? どうしt・・・(ドサッ)」

「ちよ、ちよつと二人t・・・(ドサッ)」

正体不明の粉状の物質を吸ってしまった三人は、その場に倒れ込み、眠りに堕ちた・・・

「はっはー、ざまあみろ」

これぞ大林様お手製の小道具、その名も睡眠弾！

稗田嬢の屋敷を後にした俺は、偶然オカチンが彼女の言ってた三月精やらとイザコザっているのを目撃し、しばらく物影からその様子を眺めていたんだが・・・

案の定オカチンがドジ踏んで逃がしてしまったんで、代わりに俺がその足取りを追ったって訳

「まあ肉眼でこいつらの足取りを掴むのはほぼ不可能だろうから・  
・」

俺はスターの背中に付いている探知機を取り外す

「モメている間、陸上部で鍛えたステキ投擲力で背後から付着させてやったって訳さ」

くくく、これ知ったらオカチン腰抜かすだろうな

とまあ誰に向かって言ってるのか分からない解説はここまでにして・  
・と

「さあて、どうしてやろうかね・・・」

俺は懷から一本のロープを取り出した

その後、三人を拘束した俺は人里のど真ん中まで運んで行き、これまで悪戯を仕掛けた人達や野次馬に囲まれた中で一人一人に謝罪させた、まさしく公開処刑である

心の優しい俺は謝罪を終えたらすぐに解放し、三人は一目散に人里を出て行きましたとさ

そしてドリルの子の懷から取り返すよう頼まれた花飾りが出てきたので、その足で屋敷まで届け、慌ただしい朝は終わりを迎えた

「ふう・・・」

コーヒーを一杯口に含み、一息つく

うん、一仕事した後のカフェオレは格別だな

ガラッ

「おい大林」

おっと、オカチンが来ちまったみたいだ

「何かロープで拘束された妖精共が必死で謝罪してたんだが、何か知ってるか？」

「ん？さあ、何の事やら」

何だ、てつきり二度寝しに帰ったのかと思ったが、オカチンも結構な物好きだねえ

「ぐう・・・本来俺が捕らえるべき奴らをいとも簡単に」

「いやあ、それは残念だったねえ」

何がともあれ丸く収まったんだし、いいって事よ

もつと物事は柔軟に考えようぜい、オカチン

TO BE CONTINUED



### 行間3

「へー、ここが新しい家かあ」

外からやって来たとする一人の少年は、一軒の家の前に立ち尽くしていた

「どうだ、気に入ったか？」

「はい！とっても」

だが、この少年には迷いがあった

「紫から事情は聞いたぞ、家出したんだってな」

「・・・・・・」

そう、過保護の両親に嫌気が指して家を飛び出して来たのだ

それもたった一人で

「本当に、もうご両親に会ったつもりは無いのか？」

「・・・・・・」

確かに自分でも悪い事したと思う

でも、どうせもう自分は行方不明って事になっているだろう

「いえ・・・」

それでも、少年はただ一言こう言った・・・

「ここに住みます」

## 第15章 飲ま飲まYEAR！二回目

あそゝれ夜      あそゝれ夜

ドタバタしたその日の夜、約束通り魔理沙が俺の家の前にやって来た  
そして筈の後部に跨り、宴会会場である白玉楼とやらに向けて出発  
した

その道中、俺は今朝の件について魔理沙にクレームを垂れたが、し  
らばくれるだけで白状してくれなかった  
全く、強情な奴だ

そんなこんなで現在白玉楼前である

「着いたぜ、ここが白玉楼だ」  
「うお、桜満開」

まず目の中に飛び込んできたのはまだ夏だというのに華々しく咲き  
乱れている何本もの桜の木だった



まるで一本一本が季節を忘れているかのように思える  
ふ、ふつくしい……

手入れされた庭には既に何人もの宴会客でにぎわっていた

「じゃあ私はアリスの所に行ってくるからな、せいぜい楽しめよ」

「ああ、そっちもな」

何となくそのアリスとやらの聞き覚えがあったが、一体誰なのかは  
思い出せなかった

「さてと」

早速食い物を頂戴しに行くとするか

「うわ、やっぱり中もすごいな」

「酒臭せえ」

案の定建物の中も人妖で賑わっており、ほとんど足の踏み場が無か  
った

更には酒気も充満している

「ご飯ご飯」

「から揚げから揚げ」

「ごちゃごちゃしている足場を跨いでいき、目的の物を探す

「お？」

するとエプロンを召して忙しく食べ物に乗ったトレイを配膳する一人の女性を発見

この人はもしかや・・・

「あのー、すみません」

その声をかけると彼女はこちらを振り向き、「はい、何でしょう」と言って歩み寄って来た

「ええと、何とか妖夢さんでしたよね？いつぞや新聞に載っていた・・・」

「ええ、そうですが」

彼女の顔は新聞や前の宴会で見たことがあった

「ちょっと食べ物を分けていただけますか？」

そう言つて俺はトレイに乗っかっている山盛りの皿を指さす

「すみません、これは家の主人の分なのでそれはちょっと」

「・・・え？」

主人ってもしかして例の御大の事だろうか？  
「っつーかこれ・・・」

トレイに乗っかっている物

- ・白飯（6杯）
- ・から揚げ（まあざつと20〜25個程度）
- ・アジの塩焼き（6尾）
- ・その他野菜などもろもろ

「ええと・・・これ、全部ご主人様の分なんですか？」

「ええ、これでもまだ足りないぐらいで・・・」

「・・・マジスカ？」

てつきり客人の分だと思ったんだが

「た、大変そうですね、ご苦労様です」

「いえ、毎日の事ですし、もう慣れてます」

ちよつとぐらい分けてくれてもいいんじゃないか？と思ったがここは我慢しておこう

「あ、貴方の肩に乗っている動物はひよつとして・・・」

すると妖夢さんはいきなり思い出したかのようにガリバーに目を向けて言った

「えつと、こいつがどうかしたんだ」あーっ！お前いつぞやの！・・・え？」

すると今度はガリバーが驚いたような声を上げた

「ええと、知り合いか何か？」

「いえ、ちよつと色々ありまして」  
色々？

一体何があつたというのだ？

「まさか運よく生きてましたか」

「ああ、おかげでお前んとこの主人にトラウマ植え付けられたつづきの」

「そりゃ貴方があんな事するからでしょう」

「五月蠅い！あん時や命かかってたんだぞ！それが分からぬか！？」  
「ぎゃーてぎゃーてと反論するげっ歯類」

何だかんだでこいつも苦労してたんだな

まあ詳しい話はいつか聞かせてもらおう事にしよう

妖夢さんと分かれた後、ようやくごちそうが並べられている机を発見し、その中から頂戴する事となったのだが、その傍らでロリ鬼とハンティング男が飲み比べをしていて随分と況まいてカオスだったので、あまり近づきたくはなかった

てゆうかこの人、どうやってここまで来たのだろうか？

そんなこんなで現在庭で桜模様を満喫しつつ、人間一人と動物一匹は食していた

「ふう・・・」

こうしていると俺が小さい時、じっちゃんによく花見に連れて行ってくれた時を思い出すなあ

芝生の上でいっしょに弁当を頬張りつつ談笑したものだ

そうしてみるといかに両親が俺に冷たいかがよく分かる俺にとってじっちゃんは唯一の心のオアシスだったのだ

「ん？」

そんなこんなで思い出に浸っていると、何やらぞくぞくと中にいた人妖達が外に出てある一か所に集まり出したのだ  
その前方にはステージのようなものが配置されていた

「何か始まるのか？」

「何だろ・・・あ、そういや」

確か昨日魔理沙が幽霊楽団がどうのこうのって言ってた希ガスもしかしてこれの事だろうか？

などと考えていると・・・

「」「わっ！」「」

「ってどわわ！？？」

突如、何者かが背後から驚かして来たのだ、いやーびっくりした  
一体誰だと振り返ってみるとそこには・・・

「やつほー、朝方ぶりね」

「てめえらかああああああああああアアアア!!」  
今朝人里でさんざん悪戯を仕掛けた例の妖精共の姿がそこにあった  
ちなみに今声をかけたのはブロンドドリルヘアである

「相変わらず間抜けな人間ね」

「他にもこれぐらい気が抜けてたら面白いのに」  
それに続けて上からショートツインテ、ロングの順に言葉を投げか  
ける

く・・・俺も随分と舐められたものだ

「んで、今さらどの面下げて来やがった？また正也にちょっかいを  
出すつもりか？」

ガリバーの言う通りなら今度こそとっ捕まえてフライにしてやろう  
かと思っただが・・・

「違うわ」

「？」

するとショートツインテが何やらシリアスな表情で俺の前に来て話  
し始めたのだ

「今朝あなたの顔に落書きしたり目眩まししたりで、罪悪感が湧きまして」

妙に改まった口調で何か怖い

とゆうかついさっき俺を驚かした事に関しては何も思っていないんだな

「それでお詫びの記しにこれ、つまらない物ですが」

そう言っただけは何やら正方形の箱を俺に差し出したのだ

「へー、お前にも一応罪悪感って物はあるんだな」

それを受け取り、眺めつつそう言い放つ俺

「早速開けてみて、これは私たちからあなたへの気持ちだから」

「え・・・そ、そう？」

急に聞き慣れない言葉を聞き、若干照れくさくなりつつも、言われた通り開けてみる事にした

そして中に入っていた物は・・・





浴びせる

「逃げるわよサニー、スター！」

「逃がすか！ガリバー！」

「おうよ！」

ガリバーは食べるのをやめ、戦闘態勢に切り替える

「やめた方がいいわよ、他の連中を巻き込んでも私達は知らないわ」  
そう言い残し、目の前からフツと姿を消したのだ

「くっそぉ〜」

「あいつら・・・舐めた真似を」

一度ならず二度までも捕り逃がしてしまい、思わずそんな言葉を漏らす

確かにここで弾なんか打ったら他の人妖を巻き添えにしてしまう恐れがあるのは否めないもあり、より一層悔しさが増した

「くっ、一瞬でもあいつらの事を見直した俺が馬鹿だった」

公開処刑されても尚懲りないとは、余程悪戯に対して執着心があるようだ

「くっそ悔しい〜」

「何が悔しいの？」

「んえ！？」

本日二度目となる台詞を漏らした所で、またも背後から何者かによつて声をかけられた

またあいつらか！？と思つて振り返ってみるとそこには……………

「そんなに驚かなくてもいいじゃない」

赤を基調とした派手な衣装を召した俺より背の低い少女がいたのだ  
うん？何かこの服、どこかで見たことがあるような・・・

「えっと、君誰？」

「人に名前を聞く時は・・・」

「ええと、人里で依頼屋を営んでいる岡野正也と言います」  
そついや俺全然自分から名乗って無いような  
これからは気をつけないと

「依頼屋ねえ、私はリリカ・プリズムリバー、宜しく」  
ん？プリズムリバー？

「もしかしてk「あ、依頼屋さんだ」ってわお!？」  
いつぞやご来店したメルランさんの妹さんですかと聞こうとした所  
でご本人様ご登場である

「あ、久しぶり」

「ああ、お前確かあん時の」

「そつだよ、覚えててくれたんだ」

幻想郷の人達は皆個性的だから一度見たら忘れられない  
・・・あれ？でも何か忘れてるような気が

「あれー、二人ともいつ知り合つたの？」

「「あ・・・」」

しまった、すっかり忘れていたがメルランさんは内緒で俺の店に来  
たんだけ？

見るとリリカさんは何やらニヤニヤと俺とお姉さんを見比べていた所謂Sっ気って奴だろうか？いや、ちよつと違うような・・・

「ほ、ほら！この前お使いに行つた時にたまたま出会つて・・・」

「そ、そうですよ！その時大根が安上がりしてたので買いに行つたらたまたま出会つただけで・・・」

必死で誤魔化す俺とメルランさん

だが、動揺しているのを見抜いたのかさらに黒い笑顔になる

「・・・何してるの？」

そうこうしていると更にもう一名様ご登場

確かこの人、クリーニング屋でそれこそたまたま出会つた・・・

「あ、もう一人の姉さん実はね・・・」

「ななな何でもないよ姉さん！別にやましい事なんて」

「？」

Sモードの三女と動揺を隠せない次女を見て疑問符を浮かべる長女・  
・・・ええと、たしかルナサさんだっけ？

「・・・あ、貴方」

すると彼女は今度は俺の方を見て何やら思い出した様子である

「この前はどうもありがとう」

「あ、いえいえ！例には及びませんよ」

ほら、リリカさんがブラックな笑顔をこつちに向けてるじゃないかこれは非常に気まずい事になった

「依頼屋さんちよつと」

「正也、話がある」

はあ・・・そりやこの人が俺の事知ってたら不思議に思うよなそりや

「ちよつと、何で姉さんが君の事知ってるの？」

「ちゃんと説明しろ」

そして現在少し離れた所で動物一匹と次女にはさまれて尋問される  
羽目に

「ええと実は・・・」

大林がバイオリンを汚した事、クリーニング屋でバツタリ出会った  
事、ついでに秋刀魚が安売りしていた事を打ち明けた

「という訳なんだ」

「ええ！？それであんな事言っちゃったの！？」

「ったく、お前はどこまで面倒事を増やせば気が済むんだ」

「あ、あの時はそうするしかなかったんだよ！」

その場凌ぎって言うのは後々ややこしい事態を招く恐れがあるので  
皆は極力避けような

「じゃあやつぱり姉さんの言ってたバイオリンの人って」

「うん、俺の事」

「いやあ、あの時は本当に間一髪だったよなあ」

「・・・何話してるの？」

「「ひゃい！」」

突如背後からルナサさんに声をかけられ、つい変な声を出してしまった

そら気になるよなあ

「べ、別に他愛もないただの世間話ですよ！」

「そ、そくだよ姉さん！決してやましい事なんかでは・・・」

「何も隠れてする必要ないよね？」

あ、やばい

もう何も言い訳が思いつかない、こりゃ困った、ははは

「あ、ほら！そろそろ時間なんじゃないですか！？お客さんも集まってきましたし」

と思ったが、辛うじてその場凌ぎの材料が見つかった

「それもそうだね！行こ二人とも！」

「え・・・うん」

「そんな慌てる事ないのに」

はあ・・・俺ってつづつぐ面倒事を抱えやすい体質だよなあ

「なあ」

「ん、何？」

一方、その様子を傍らで見ていた動物は、ふと思い、三女に声をかけた

「思ったけどよお、正也とあいつって・・・」

「あー何か・・・」

すると彼女も同じような事を考えていたのか、口をそろえてこう呟いた

「「似たモン（者）同士だよな（ねー）」」

「「何か言った（か）！？」」

「別に」

「空耳じゃない？」

依頼屋とあるう者がこんな調子でどうするんだと、げっ歯類は心の中でそう付け足した

あの後、しばらくして彼女達・・・幽霊楽団による演奏会が始まった

三人とも華やかな衣装を身につけており、それぞれがキーボード（PCのあれじゃない方）、トランペット、バイオリンを繊細に奏でていたので、中々鑑賞のしがいがあった

俺らの世界では携帯型音楽プレイヤーが普及しているので、いつでも手軽にリッスン出来るのだが、ここにはそんな物はない為、人妖は直接生で聞く事となる

まあでもたまにはこんなのもいいかな、便利な物に頼りすぎて生で聞いた事なんてそうそう無かったし

演奏が終わった後、あちらこちらで拍手が起こった

音楽鑑賞つても結構疲れるモンだねえ、現に周りを見渡すと数名ほど眠りに就いている者が確認出来る、例えば巫女とか魔法使いとか鬼とかハンティングとか金髪リボンの子とか動物とか妖精共とか

小さい頃一度だけじっちゃんに演奏会へ連れて行ってもらった事があるが、寝ていよう物なら問答無用でたたき起こされた、「お前は何て失礼な奴なんだ」ってな

それはそうと、今日もドタバタとした一日だった  
色々あったけど、やっぱり平和が一番だな

さて、明日から気持ちを入れ替えて仕事に励むとするかね

そして現在、再び魔理沙と共に箒に跨って上空を進んでいる所なの  
だが・・・

「弹幕はパワーだじええ」

「おいしっかりしろ、眠気と酔い気に襲われてクラクラじゃねえか」

「わ、わたしは別に酔ってなんか・・・ヒック」

「ちょ、落ちるってやめろ！」

箒がガタガタ揺れたり、木にぶつかりそうになったりで、最後の最後まで心臓に悪い一日だった

ああ、俺も空を飛ぶ事が出来ない物かねえ



くおまけく

実は大林が三月精を解放する際、彼はこんな事を言った

「さあて、釈放してほしかったら一つだけ俺の願いを聞いてもらおうか」

「な、何よ一体」

ふふふ、それはと一呼吸置き

「俺の店の手伝いをしてもらえないか？なあに、別にお前達の自由まで奪うつもりはない、必要になった時だけ頼みに行くっていう形だから」

「嫌よ」

「何で私達がそんな事・・・」

「嫌なら髪の手坊主にしてそのまま慧音さんの所に引き渡そうと考  
えてる所だが」

「分かったわよ！やればいいんでしょー！？」

鬼！悪魔！とぎやあぎやあ喚く妖精達

「よし、それじゃあ決まりだな、て事で早速今からある事をお願い  
しよう」

そう言つて彼はポケットから正方形の箱を取り出し、それをショ  
ー  
トツインテに渡す

「何よこれ」

「所謂ビツクリ箱だ、今開ける必要はない」

「それで、お願いつていうのは？」

「オカチン・・・もとい、例の依頼屋が今夜白玉楼で行われる宴会  
に向かうという情報をキャッチした、そこでだ、これはお前達のモ  
チベーションを上げる意味でもある仕事なんだが・・・」

彼はさつき箱を渡した妖精の耳元でとある作戦を言い渡す

「・・・という訳だ、頼めるか？」

「任せなさい、お安い御用よ」

「あんた思つたより結構気さくじゃない、見直したわ」

「ふふふ、そうか、まあ何がともあれ、今夜白玉楼に向かつてくれ」  
そう言い終えると彼は妖精達を釈放し、そのまま帰宅した

「幸せだねえ、オカチン、愛の籠つた贈り物を貰うなんて」  
くくくと笑いつつ、コーヒーのブレンドを行っていた

T  
O  
  
B  
E  
  
C  
O  
N  
T  
I  
N  
U  
E  
D

## 第15章 飲ま飲まYEAR!二回目(後書き)

食べ過ぎ、飲み過ぎにはご用心!

## オリキャラファイルvol.2

NO.4

おおばしのぶよし

大林信吉

種族：人間

能力：UNKNOWN

概要：正也の幼馴染であり戦友である

正也の消息を不審に思い、探し回った所、八雲紫に偶然出会い、再会を果たすべく、幻想入りする事に

元陸上部であり、ここに来るまでは楽器修理のバイトをしていた

お調子者で大抵碌な事考えないのだが、人一倍友達思いであり、正也もそこだけは評価している

基本スタイルはサングラスに坊主、正也曰くイクオイル

好きな物はカフェオレ、嫌いな物は毛虫

人里で情報屋を営んでいる事もあり、主に人里周辺の人妖との絡みが多い

三月精の優れた能力に目を付け、半ば強制的にお手伝いさん（その場限り）にスカウトした

NO.5

団子屋のおばちゃん

概要：人里で団子屋を営んでいるおばちゃん

早くておいしいがモットー

一時白玉楼の亡霊に店を潰されかけたが、現在はいつも通り  
通常運転

NO・6

酒屋のおっちゃん

概要：常に威勢のいい口調で接客するおっちゃん  
何かと図々しい

NO・7

ハンチングを被った伊達眼鏡の男

概要：酒屋の常連客

某神主とは一切関係ない

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5164w/>

---

東方探求記

2012年1月10日21時46分発行